
来訪者《エトランジェ》の進む先

X・オーバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エドランジエ
来訪者の進む先

【NZコード】
N1095Y

【作者名】
X・オーバー

【あらすじ】

人間と亜人種たる魔族が対立する世界に勇者として召喚された少年
ソリハヤト
年祭隼人

元の世界へと戻る方法を知るためマグガディア王国国王が出した条件は白龍連峰の魔王を討ち取ることだった。

そして魔王を討つために旅立ち早一年、ようやく魔王を討ち倒した彼を待っていたのは残酷な事実だった。

魔王を討伐した來訪者^{エトランジエ}のその後人生を描く英雄譚^{サーガ}

彼の進む先にあるのはいかなる未来なのか？

始まり

肉を撃つ音が広い室内に鳴り響き、巨大な砲弾と化した人影が部屋を横切つて奥に据えられた玉座に叩き込まれる。しかし人影を吹き飛ばした力はそれでさえ止めることは出来ず、直後にはその豪奢な玉座ごと壁に叩きつけられこととなつた。人影と壁の間に挟まる形になつた玉座は原型をどどめることが出来ず一瞬で瓦礫へと変貌する。さらにその瓦礫の山の上には吹き飛ばされた人影が力なく仰向けに倒れている。

「はあ、はあ、はあ、これで、最後、だ……」

息も絶え絶えの様子でそう言つのは瓦礫の上に倒れている男ではなく、脚を引きずり近寄つてくる二十歳ほどの男だった。元はおそらく上等な作りだつたろうが現在はただのぼろに成り下がつた布切れの下には無数の傷痕を刻み、両腕にバンテージを巻いた格闘家風の男は倒れた男の眼前に拳を突きつける。

「くつ、まさか、人間に負けるとはな……」

倒れた男は自嘲するように笑みを浮かべながら首を動かし、自らに拳を向ける男を見上げる。

「貴様、名は?」

「ハヤト、祭隼人……」

「ハ、ハヤト、か……。その名、魂に刻みて、我らがイルシュメイラの元で祈つているぞ……。」

このま、魔王が一人、ネスファイアムを、倒せし人間の、勇者ハヤトよ……。御身に、力の……、力の栄冠有らんことを……」

倒れた男 - 魔王ネスファイアムは震える手で自身の、この戦闘で折られた角に触れながら力なく笑つて見せる。

角を持つ魔族が人前で己の角に触れる、それは相手を称える意味を持つことを知る隼人は、苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべ、絞り出すように叫んだ。

「なんで、なんでだ！なんで俺を恨まない！今こうして城に攻め込まれ、命を奪われようとしていて、なんで俺を恨まない！」

勝者であるはずの隼人から絞り出される苦痛に満ちた叫び。もちろんそれは体の痛みではなく自身の心に負った痛みの叫び。構えられたら拳が僅かに揺れ、その表情は恐怖に怯える子供のようでもあった。

「な、にを、恨め、と？」

我ら……、魔族、は、力の世界。力持つ、者が全てを率いる撻。貴様は、ただ、一人……で、我に、挑み……、下したのだ。我らの、中では、よくあること。此度、は。我に、その番が、回つて来たに、すぎぬ。

貴様は、我に、勝つたのだ。後は、貴様の、好きにするが、いい……

「……」

隼人を見上げていた魔王の首が、木から実が落ちるがごとく、力なく瓦礫の上へと落ち、そして永劫に動かなくなる。

遙か遠き異世界、地球から召喚された勇者祭隼人マジリ ハヤト

彼が白龍連峰の魔王ネスファイアムを討伐。この出来事こそがこの後

に続く混沌の時代始まりである。後の世に生きる人々はそう語る。

マグガディア王国。レントリシア大陸を横断し、魔族の土地たる白龍連峰と大陸中央の大半を国土とするメダクトリ帝国に挟まれた小さな国。

発達した魔法技術に、過去に喪われた魔法たる遺失魔法を数種現存させる魔法国家。開発される魔法技術の独占とそれにより創られる数々のマジックアイテムの輸出により存続するこの国が異世界より勇者を召喚したのは、今から一年ほど前のこと。

異界者召喚儀式魔法。
サモン・エトランジエ
ロストマジック

遺失魔法の一つであるこの魔法によつて召喚されたのは一人の少年であつた。

各国に一人は存在する勇者といつ名の照合を持つ者達。その存在は所属する国の武力の象徴でもある勇者をマグガディア王国が異世界より召喚したのは、名目上は同盟国でありながら実質的には支配国とならぶらぬメダクトリ帝国の武力に対抗するため、その武力に劣る自国の武力を高め誇示するためという理由からだろう。

この世界の歴史において、過去存在した異世界からの來訪者達は、この世界の法の外より召喚されるためか、唯人では持ちえぬ力と共に召喚されたと伝えられる。

ある者は膂力において並ぶ者無しとまでうたわれる鬼族オガが赤子のごとく思えるほどの力を持つて召喚され、またある者は莫大なる魔力でもつて過去に類を見ることの出来ない魔法を操つたと言つ。

総じて『異能』と呼ばれるその力は、たった一人で万人の軍隊を凌駕し、資源にも人的資産にも乏しいマグガディア王国がサモン・エトランジエに頼つたのもある意味で当然のことだったのかも知れない。

そうして召喚された少年こと祭隼人は、この国に従属する事を強制される。

元の世界においては平和な日本で、喧嘩好きであれども普通の高校生活を送り、自身の意志に関係無く召喚された彼がそれに反発するはある意味当然の事だった。

故にマグガディア現国王レード王は、隼人に元の世界への帰還方法を教える条件として、白龍連峰を根城とする魔王の討伐を擧げる。隣国に対する武力の誇示する事が目的であるはずが、なぜそのような条件になるのか？疑問に思った隼人の問いにレード王はこう答える。

魔王を滅ぼし白龍連峰の魔族を奴隸とすれば、それだけで強大な軍隊を造ることができ、さらには白龍連峰の豊富な資源によつて軍を強化できるのだと。

相手がこの国に何かをしたわけではない。ただこの国の都合で討つ。国とは本来そういうものなのかもしれない。

けれど彼にそのような条件が呑める筈もなく、隼人はその条件を蹴つて一度は城を去ることとなる。

しかし彼が生活してきた日本と言つ国との世界では価値観を含めあらゆることが違すぎる。

城を去つた彼に何があつたのかは分からぬ。しかし一月後城へと

戻ってきた隼人は王の条件を呑むことになった。

その時の彼の表情は苦渋に歪んでいたといつ。

そして約一年の月日が流れ、彼はついに白龍連峰の魔王ネスファイアムと唯一人で対峙しこれを下した。

ようやく、元の世界へと帰還する方法を得られることに安堵し、そのためには多くの生命を奪つた罪の重圧に彼の心は悲鳴を上げる。

この手で多くの生命を奪つてしまつた。

けれどこれでようやく元の世界に戻れる。

そこまでして戻るべきだったのか？

俺はこの世界に居たくは無い！

命を奪う苦痛を味わつてでも？
そう、苦痛を味わつてでもだ！

そのような苦痛を味あわずとも生きていいくこともできるの？

無理だ、この世界で俺は独りだ。

本当の意味で分かりあえる者がいないのに、この世界に生きていけと？

この苦しみを理解もされず、孤独に抱かれたこの一年間。しかしそれからもよつやく解放される。

俺は、魔王を倒したのだから。

マグガディア王国首都リティブル。

「勇者ハヤト。此度の魔王討伐見事であつたな」

王城エルメティアの謁見の間。真紅絨毯が引かれた先、豪奢な玉座に座る老王が正面に立つ隼人に労いの言葉をかける。

煌びやかな装飾を施された服に赤いマントを羽織り、宝石の散りばめられた王冠をかぶる姿は確かに一国の王の姿そのものだ。しかし玉座の肘掛けに置かれた手は、元から骨と皮だけで作られたかのごとく。首も同様で今にも折れそうなその様は、煌びやかな装飾を身に纏うつと言つよりも装飾に纏われているかのようだ。

「…………世辞はいい。そんなことよりも、約束を忘れてないだろ？
な？」

理由が理由とはいえ、一刻の主への態度としては礼を欠きすぎる隼人の言葉に謁見の間に並ぶ臣下達の間にざよめきが走る。

王のそばに立つ大臣が顔を赤くして前に出ようとすると、彼の言葉を気にした風もない王が手で制す。

「そう急くこともあるまいに。

約束は守るとも、お主が元の世界に戻るためにロストマジック《リ

ターン・HトランジH》。その方法を記した書だ

レード王のそばに控えていた侍女が古びた本の乗せられたトレイを手に隼人のそばへと跪き、それを掲げるようになし出してくれる。隼人は王と侍女、そして本の間で視線を往復させながらその本を手にとつて。

「国に古くから伝わる魔導書じゃ。お主なら読めるじゃろう? すでにその書の解説は終わつてある故、その書はお主の自由にする」と良い

「…………俺は元の世界に戻れればそれでいい。こんな本を貰つたところで意味なんか無い。それよりも俺は魔法が使えないんだ、戻るために協力はしても、」

険の籠もつた目で王を睨みつけ、それを受ける王は何がおもしろいのか笑みを、いや明らかに嘲笑を浮かべる。

「何がおかしいんだよ」

「いや、それよりもだがな。協力は不可能だ」

「な、ふざけんな! 俺がこの一年間どれだけ苦労したと思ってる! 何度も死ぬ様な目に会つてその対価が帰還方法を教えるだけ! ? いくら何でもそれはおかしいだろ! 」

まるで広い謁見の間その物が震えるかのような怒声にそばにいた侍女は身体を震わせ、その他の人々も身体を強ばらせる。そんな中でこの怒声を浴びせかけられている当の本人たるレード王は、浮かべた嘲笑をそのままに首を左右に振るう。

「おかしいもなにも当初の約束となんら違はないはずだが?わたしとお主との間で交わされた約束は帰還方法を教えることだけのはずだが?」

確かにレード王の言うとおりで、約束は「教える」とのみ。その事実に悔しそうに歯を食いしばる姿に王の表情がいやりしく歪む。

「だがわしも鬼ではない。絶対に協力しないといつもりは勿論無い……、だがな……」

「まだ何か、条件を付けるつもりか?」

王の表情に不快感を覚えながらも、それ以上激情に駆られまいと睨みつける。

「いや、そんなつもりはないとも。だが無理なものはやはり無理なのだよ」

王が頭上へと視線を上げ、隼人もそれにつられて謁見の間の天井を見上げる。そこには太陽と月、星々といった天体が描かれており、魔力が込められているのか描かれた月と太陽が淡く輝き、それがこの部屋の光源となっている。

「《リター・ン・エトランジエ》を行う条件は《サモン・エトランジエ》とほぼ同じ。百年周期訪れる皆既日食のその瞬間。もうわかるだろ?、次の皆既日食は約百年後だ」

隼人に与えられた王城の一室。そこに備え付けられたベッドに腰掛けた隼人は呆然と目の前に開かれた窓から夜空を見上げていた。この二年間旅の間に幾度となく見上げた星空。東京に住んでいたときには一度たりとも見たことの無かつた満天の星空に、しかし何も感じじることなくただただ時間だけが過ぎてゆく。

魔王との戦いより五日が過ぎた今、彼に体はある戦闘で受けた傷は痕も残さず完治している。

謁見の間にて聞かされた帰還方法。それが実質不可能であることを知らされた後、どうやって今部屋に戻ってきたのかは覚えていない。気付いたときにはベッドに腰掛け呆然と元の世界のことを思い返していた。

互いに、または共に喧嘩や危ないことをしていた級友達。

そんな彼を目ぐじら立てて追いかけ回してきた幼なじみ。

若い頃の自分にそつくりだと豪快に笑い、幼い頃には空手の手ほどきをしてくれた祖父。

喧嘩でムエタイを振るい、破門された後も自分のことを気にかけてくれたクルー。

喧嘩をする度に拳骨を振るいつつ、本気で叱ってくれた両親。

彼らの顔が、思い出が脳裏に浮かぶ度にあふれ出す涙が頬を濡らし、隼人は声を出さずその晩を泣いて過ごした。

朝起きて飯を食べ、部屋で抜け殻のごとく呆然と過ごすことが日常化してすでに一週間。

何にも関心を持てず、何かをする気もなく、ただ無気力に一日を過ごす彼に変化が訪れる。

彼が魔王を討伐したことで白龍連峰へと領土を広げることが可能になり、この半月ほどのあいだ無気力に過ごしてきた彼と異なり、王城は蜂の巣をつづいたがごとく憚たやすい日々が続いていた。その間彼が呼び出されることは一度として無く、料理を運ぶメイド以外に訪れるごとの無かつた部屋に王の遣いが訪れ彼に付いてくるよう促された。

案内されるがままに連れてこられた場所は、王城と並ぶように建てられた巨大なコロッセオ。まるで魂を抜かれたかのような目をした隼人は、王がコロッセオを見渡すための特別席へと連れられ、見たくないレード王の隣へと座らされる。

隼人が姿を現したことに歓声が上がり、王の姿を視界から外す意味も込めて眼下へと視線を移した。

「ロッセオは社会の授業の教科書で見た、ローマのそれと同じ様に石で造られた巨大な円形の建物で、ちょうど正面には闘士などが闘うのだろう砂を敷かれただけの舞台があり、それを囲う用に階段状の観客席が設けられている。

そして今その観客席は大量の人で埋め尽くされていた。しかも誰もが皆同様の鎧を身に着け、その鎧も見覚えのあるもの、つまりこの観客席を埋め尽くす人々は皆この国の兵士だということだ。

「…………なんの騒ぎだよ」

煩わしい。と苛立たしげに呟くと、彼をここへと案内した侍女が耳もとで説明する。

ここに集まっているのは明日から白龍連峰へと遠征する兵士であり、その遠征の兵士の士気を高めるための催しを今日この場で行うため、國の武象徴たる勇者、隼人にも出席してもらつたのだと。

「…………催し？」

「それは直ぐにおわかりになれますよ」

本人も楽しみで仕方ないと言つた様子で背後に下がるのを見送り、再び視線を眼下の舞台へ落とす。

「ロッセオ、闘技場なのだからそつぬつ物なのか？」

たしかにそれなら士気も上がるかも知れない。そう思いつつもだからどうしたと、我関せずとばかりに視線を逸らす。

そうしている間に準備が終わったのか、王が立ち上がり兵士達へと

激励の言葉が贈られ、あれよあれよという間に件の催しが始まった。

隼人達がいる特別席から見て右側の格子が音を立てて開かれ、そこから巨大な触手を無数に生やす魔物が闘技場の舞台へと姿を現した。

「…………あいつ、は確か」

それは隼人にとっても見覚えのある魔物だった。男は裏わない癖して女と見れば見境なく襲いかかる淫獸に属する魔物だったはずだ。なぜそんなものが闘技場へと？

その疑問が浮かぶと左側の格子が上がるのはほぼ同時だった。自然とそちらを見れば開かれた格子の向こうの闇の中から口の下に姿を現したのは、一人の女性だった。

両手を背の後ろにて拘束されたその女性は頭部に一対の角を持ち、着ているボロボロの服の間からは一組の漆黒の翼と一本の尻尾が出されている。

魔族。

その瞬間隼人は理解した。この場で行われる催しその正体は、彼らが敵とする魔族の彼女を兵士達が見ている前で淫獸に凌辱させることなのだと。

しかもそれだけではない。彼女の長く闇のよつた黒髪の合間から生える角、それもまた隼人にとって見覚えのある者だった。後頭部から頭部を覆うように前へと先端を向けて生えるその角は、彼が殺した魔王ネスファイアムの物と同じ物。つまり彼女はすくなくともかの魔王と同族であるということだ……。いやもしかすると彼女は……。

彼の予想は最悪の形で的中した。今日の前で晒し者にされようとしている少女は魔王ネスフィアムのたつた一人の娘なのだと……。

王の口から出たその言葉は、隼人の胸を容赦なく貫いた。

この世界の魔族の社会は下克上上等な弱肉強食の世界。それではながら無闇に争うことを良しとせぬ比較的温厚な世界でもあつた。そのような世界に生きていた彼女を、隼人が元の世界に戻りたいがためにこののような場所に引きずり込んでしまった。

その事実が彼の心を容赦なく傷つける。彼女だけではない。これらここにいる兵士達が白龍連峰へと攻め込めば彼女と同様の目に遭うもの、それ以上目に遭つものも大量に出てくるという事実に気づき、隼人は金槌で頭を叩き割られたかのような衝撃に見舞われた。

「…………俺の、俺のせいだ」

自分が元の世界への帰還を望まなければ彼女は、彼女たちはそのようなことにはならなかつたのではないか？

一度そのような考えが脳裏に浮かぶと、もう止まらなかつた。次から次へと罪の意識から浮かぶ考えに歯を食いしばり、隼人は立ち上がる。

左右の入り口の格子が閉ざされ、王が開始の言葉を口にする。

もう、後戻りは出来ない。

脳裏に浮かぶ言葉に首を振る。もとより戻ることができる道など、自分には存在していなかつたのだと。

魔獸が動く。そのおぞましい形をした触手が一斉に彼女へと襲いかかる。

魔族の女はそれを回避しようと動くが、その圧倒的な数の触手を前に、その程度の回避は意味成さず……。

絶叫のような雄叫びと共に振り下ろされる手刀が、今まさに彼女を捕まえようとした触手を切り落とし、続け様に放つ蹴撃はその蹴圧だけで魔獣を舞台の端まで吹き飛ばした。

「コロッセオ内が目の前の光景呆然となる。それはそうだろう。今まさに始まろうとしていた楽しみを邪魔した存在、王と共に特別席にいたはずの、彼らの勇者であるはずのマツリ・ハヤトがなぜ魔族を助けるのかと……。」

特別席から隼人を見下ろすレード王が意味が分からぬといつた様子で尋ねる。

「もしやその魔族が欲しいのか？まあたしかに容姿は美しいかもしれんが、そいつは薄汚い魔族なのだぞ？」

一体なにを考えているのかと首を傾げるレード王に、しかし隼人は答えることなく構える。見据えるのは今し方自分が吹き飛ばした触手の魔獣。何事もなかつたかのように起き上がる魔獣を前に、左足

を後ろへと引き半身の構えをとる。

狙うのは一点。触手の生える本体のちょうど中心。この手の魔獸の弱点は重要な器官が一力所に集中して存在していることだ。上半身を僅かに前方へと傾け、後ろへと引いた左足に力がこもる。身体を捻り右の拳が腰の辺りに達した瞬間、全身のバネが蓄えた力を爆発させる。

この世界に召喚されて得た異能力によつて強化された彼の身体は、たつたの一歩大地を蹴つただけで音速に達し、音を置き去りに一直線に魔獸へと跳ぶ。速度と全身の力の全てを込めた拳が魔獸へと振り下ろされる。隼人の持てる力を一点に集中させた必殺の一撃が魔獸の弱点へと突き刺さる。

約一週間ぶりに感じる軟らかい臓器を押しつぶす不快な感触。突き刺した拳を引き抜き、後方へと飛び退ると打ち込まれた力が全方位へと解放されようと魔獸の身体を引きちぎり爆ぜさせ四散させる。

助けられたことが分かつていなか、目の前で起きたことを、幻でも見ているのかというような信じられないという表情をした女に、隼人は彼女の両手を拘束する枷を破壊する。

「そな、た…………なにを…………」

「ハヤトオッ！」

呆然と問いかける彼女の言葉をレード王をの怒声が遮る。

「貴様、一体、なにをしておるのだ！」

特別席から身を乗り出し、怒りのあまり呂律を怪しくしながら顔を真つ赤にしながら怒鳴り散らす王の姿を見上げながら、隼人はこの

世界に来て初めて自らの意志の元殺氣を込めて王を睨みつける。

「黙れ、もう終わりだ。俺はもつ、俺の好きにさせてもうつ」

「な、貴様はこの国の勇者だらう！？それが好き勝手していいと思つているのか！？」

静かだがこれ以上ない怒りが込められた彼の言葉に、レード王はますます怒り露わにわめき散らす。コロッセオに集まる兵士達も急な展開に騒然としている。

「勇者だ？ 知るか。そんな称号『代物』溝に捨てちまたよ」

言うやいなや胸元に付けられたバッヂ、所属する国を示す国旗を模したそれを引きちぎり、足下に投げ捨て踏み碎く。

隼人がそのような行動に出るとは思っても見なかつたのか、王を含めコロッセオにいる全員が動きを止める。

その国の威を示す国旗。それを蔑ろにするといふことは、その国に対する敵対行為と同意。それが国旗そのものではないとはいえ、それを模した物を破壊したのだ。

当然隼人も自分がしたことの意味を理解している。理解した上でこの行為が一体何を意味するのか。それは誰の目から見ても明らかだつた。

「マグガディア？
クソ喰らえだ……」

その一言が決定的だつた。

「あ、あの国賊を捕らえろおおおおおおつー！」

恥辱に顔を真っ赤にしたレード王の怒声がコロッセオに響き渡った。

マグガディア国王レードとマグガディアの勇者マツリハヤトの確執を知る者は、僅かな国の上層部の人間だけである。その他の人々、それは城の一般兵であり國の民達は、マツリハヤトとという存在を純粹に勇者として讃えていた。

それ故にコロッセオに集まっていた兵士達は目の前で起きたことを信じられず、王の命令もまた悪い夢でも見ているかのような思いで聞いていた。すぐに行動に移らぬ兵士達に業を煮やし、二人の確執をしる将軍達の怒声が兵士を襲う。そこでようやくこれが現実であることに気付いたかのように慌てて兵士達が己の武器を手に席を立つが、命令から行動までにかかった時間は隼人に大きな味方と化す。

兵士達同様なにが起きているのか、と呆然としていた魔王の娘を小脇に抱え、隼人は出口に向かつて走り出す。魔獣や彼女が入ってきた入り口はすでに格子が降ろされ、それを破壊している時間など無い。故に隼人が向かうのは、舞台を中心に観客席の間を放射線状に走る階段だった。

建物にすれば三階分はある観客席へ一足で飛び乗り、動きの鈍い兵

士達の間を全力で駆け上つてゆく。

「何をしている！逃がすな！」

剣を手に行く手を阻もうと走る将軍・フォーテイスの言葉によつやく兵士達の動きが元に戻つてくる。割れた海が戻るかのじとく、左の観客席から階段へと兵士が現れる。

この時点で隼人がいるのは、長い階段のちょうど中間あたり。短い時間でよくここまで駆け上つたと言つべきか、はたまたここまでしか上れなかつたと言つべきか……。

「邪魔だ！」

隼人の一括に兵士の動きが鈍る。その隙を逃さずに階段を蹴り、大跳躍でもつて距離を稼ぐ。

「う、うあああああ！」

突如彼が目の前に現れる形になつた兵士が、悲鳴を上げながらも普段の訓練の賜物か手にした槍を隼人へと突き出される。抱えた女を庇つて身をひねる隼人のわき腹に槍の穂先が深々と突き刺さる、が

。

「らああつ！」

それを意に介した様子もなく振る手刀が槍をへし折り、距離を詰めて放つ肘打ちが兵士の胸部を抉るように強打し、兵士はその一撃に容易く意識を手放した。

隼人の激しい動きに槍の穂先が抜け落ち、異物の無くなつた傷口がそこだけ時間を縮めてでもいるかのような異常な早さで再生してゆ

く。

これが異世界から召喚されたエトランジエたる隼人の異能力『異常再生能力』

例え身体が消し炭となろうとも瞬時に再生させる異能力。実際にこの一年間、ある魔族との戦いにおいて隼人は首から下消し飛ばされたことがあったが、その際も身体は瞬時に再生されたほど。

この異能力を知る者は、マグガディア王国の上層部でもさうに一握り。故にそれを知るはずもない兵士達は、瞬時に再生する彼の肉体に驚愕を、次いで恐怖の表情を浮かべて武器を構える。

化け物。

兵士達の誰かがそう叫ぶ。その言葉は水面に立てられたら波紋のごとく瞬く間にコロッセオ中に浸透してゆく。

(化け物、か……。確かにその通りだな。どれだけ傷を負つても死ぬことのない、正真正銘の化け物だろうさー。)

「ハヤトオツオオオオツツー！」

階段の上に立ち、隼人の前に立ちふさがるフォーティスが振り上げた剣に炎を纏わせ、怒声とともに唐竹割りに振り下ろす。

自身を掛けて振り下ろされる炎の刃に、隼人は真っ直ぐに己の拳を突き出した。刀身と拳が正面からぶつかり合い、一瞬の拮抗を経て刃は隼人の腕を切り裂き突き進む。

「ぐつがああああああああああああ！」

肉を切り裂かれる痛みと神経を焼かれる痛みに隼人は悲鳴を上げる。しかし隼人は悲鳴をあげてなお次の行動に出る。肘の近くまで切り裂かれた右腕を振るい、無理やり炎剣の軌道をずらす。真っ直ぐに切り裂かれた腕の半分が宙を舞い、隼人は気を失つてもおかしくはない激痛に見舞われる中、残つた右肘を振り上げフォーテイスの顎へと叩き込む。

「ぐうおつ！」

顎を打たれることによって脳を搖さぶられ、片足を引くことで倒れることをフォーテイスだったが、片足を引くことで前に残つた膝を踏み台に隼人はフォーテイスの身体を駆け上る。

「天より振るう雷神の斧……」

フォーテイスの背後へと飛び降りながら、振り上げた右肘が脳天へと落とされ、着地と同時に再び階段を駆け上り始めた直後、フォーテイスは脳天から噴水のごとく血を吹き出しながら膝を折り、そのまま自身の血の中へと倒れ伏す。

「フォーテイス将軍！」

兵士の悲鳴を背に、恐怖に顔を歪めて道を開ける兵士の間を駆け抜け、隼人はついにコロッセオの最上階へとたどり着く。

「何を、何をしている！逃がすなあ————！」

レード王の喚き声を背に受けながら、隼人はコロッセオの外へと身を投げ出し、眼下に広がる林へと落ちてゆく。

他の將軍達がその場に駆けつけたときには、隼人の姿はどこにも見当たらなくなっていた.....。

始まり（後書き）

・ 祭隼人マツリハヤト

召喚時十七歳、現在十九歳。

幼い頃には祖父から空手の手ほどきを受け、その祖父が亡くなつた後はなぜか古式ムエタイの道場に通つていた。中学の頃喧嘩でムエタイを使つたことから破門され、その後も学生生活を送りながらも喧嘩を楽しむ日々を過ごしていいたところを異世界へと召喚される。

物理属性資質：ノアフイス（硬く速い）

魔力量：計測不可

魔法属性資質：特異特化型

・ 異能力 《異常再生能力》

どのような傷でも瞬時に再生させる隼人の持つ唯一の超状能力。名称は再生能力となつてゐるが、実際には治癒能力である。受けた傷を瞬時に回復させ、傷を負う前よりも強靱になるよう回復させると、いつ《超回復》とのような効果を併せ持ち、一度は身体の大半を失うという重傷（首以外の消滅を重傷というならば）を負いながらも回復し、それにより生身でありながら高い防御力を持つに至る。

魔法国家であるマグガディア王国でも測定することのできない膨大な魔力を持つが、隼人には魔法操る資質は無く、この膨大な魔力は彼の異能力を維持するためだけに消費される。

マグガディア王国王都ヴィネイアの外れにある廃屋。コロッセオから脱出した隼人は林に逃げたと見せかけて、真逆の方向にある街の中へと逃げ込んでいた。

「単純な手だけどこれで少しばかり時間が稼げるな」

逃げる途中胸元に抱き変えた魔王の娘マットもなにも敷かれていなければベッドの上に降ろし、隼人は乱れた息を整えるために大きく深呼吸を繰り返す。

絶対的な再生能力をもつ『異常再生能力』も怪我をしたわけでもないからか、戦闘などで消費したスタミナまでは回復してくれない。身体が消し飛べばその限りではないのだが、疲れるたびに身体を消し飛ばしていたら肉体的にはともかく、精神的にやられてしまうのは想像に難くない。

どうせならスタミナも回復してくれればいいのだと、何度そう思つたかも分からないようなことを思いつつ、ようやく息が整つたためそばにあつた埃だらけの椅子に腰掛ける。

「……なぜ、私を助けた？」

ベッドに降ろされた女が不思議なモノでも見たかのような表情で問いかけてくる。

「そなたは勇者だったのだろう？私も人間の社会がどのようなものか、ある程度は知っているつもりだ。勇者の地位がどのような物なのかもだ。

勇者、それも魔王を討ち滅ぼせるほどの力を持つ者ならば、およそ

人間達の中であれば望んで手に入らぬ物は無いはず。そんな地位を捨て、あまつさえ小国とはいえ一国を敵に回してまで、なぜ私を助けたのだ？」

心底分からぬと言つた風の彼女に対し、隼人は静かに首を振つた。

「欲しいものか…………。確かに手には入つたぞ。
俺は元の世界に帰りたかつた…………、だが…………」

「そなた、^{ヒトランジュ}来訪者か？」

「ああ、お前の親父を殺せば元の世界へと歸る方法を教えるつて言
われたのさ…………」

自らを嘲るような口調で言う隼人を、彼女は苦いものでも口にした
かのような表情で首をふる。

「だがあれは百年周期で訪れる皆既日食が絶対の条件のはずだ」

「ああ、その通りだつた。あのクソ野郎はそれを知つた上でそんな
条件を出しやがつた…………」

「あの術で元の世界へと帰還したとされる来訪者は唯一人。不老不
死の異能力を得た来訪者だ」

「…………」

「それも知らなかつたようだな。その帰還魔法もその来訪者自身が
元の世界に戻るために構築した聞く。もしもそなたが百年後の皆既
日食まで生き延びられたとして、本当に帰還できるかは半ば賭にも

近いのではないか？」

構築者自身が自身を元の世界に戻すために構築したのなら、その来訪者以外に扱うことが出来ない可能性もある。そしてレーデ王はあの魔導書はすでに解読したと言っていた。ならばその可能性、いやそのことも分かつていたはずだ。

隼人の口元から歯ぎしりが鳴る。

「マグガディア国王の噂は私も聞いている。あの王ならばやりそつな話だな」

静寂が辺りを包み、痛ましげに隼人を見ていた魔王の娘がふと思いで出したように再び口を開いた。

「…………なぜ私を助けた？」

「…………あんたが捕まつたのは俺のせいだろ？俺が魔王を倒した時一緒に白龍連峰に行つた兵士に捕まつた。違うか？」

彼女が静かに頷いたのを見て、隼人は再び視線を逸らして口を開いた。

「元の世界に戻れないと分かつてから、俺は文字通り脱け殻だった。何もする気も起きず、ただ生きてるだけの死体も同然だった。

それが今日コロッセオに呼び出されて……、あんたを見て分かつたんだ。俺がしたことがどういうことなのか。元の世界に戻りたいって言るのは、俺のわがままだ。その俺のわがままの結果あんたは父親を失い奴らに捕まることになった。そのことに気付いた後は……正直なにも考えられなくなつてた。あの魔獣が動き出した直後

も同じだ。同じだけ、気付いたときにはもう動いていた。今思えば、義務か贖罪か……。どっちにしたって俺の傲慢な、独りよがりな理由だよ……」

「……故郷を思うのは当然のことだろう。私がそなたと同じ立場に立つたとしても同じことをしたと思う。

それに全ての元凶はそなたを召喚したレーダー王だろう。あの王が来訪者の召喚を行つたりしなければそなたは御家族と離別する事もなかつたし、父が死ぬことは……、少なくともそなたの手にかかることは無かつただろう」「うう」

「だが現実として俺はここにいて、多くの命を奪つた！俺が元の世界に戻ることを望まなければ、城を出たまま人々の中に紛れて生きていいくことを決心していれば、そんなことにはならなかつたのに！－

俺は、俺はあんたの父親を殺したんだぞ、憎くないのか？恨みはないのか！？なんで俺に怒りをぶつけない！？なんで罵倒しない！？」

「なんで、なんでそんな普通に接することが、できる…

？」

気が付いたときには女に向けて感情を爆発させていた。

この一年間敵の、魔族の命を奪つ度にこみ上げてくる罪悪感を心の内に閉じ込め、周囲の人々から感謝される度に元の世界に戻る為と言つ理由を重石にして心に蓋をし続けてきた。

しかしあの日謁見の間で知つた事実によつて心の蓋に乗せられていた重石は外れ、ため込まれた罪悪感、いや命を奪うと言う禁忌を犯したという罪の意識は容易く隼人の心を呑み込んだ。

隼人の価値観において人の命を奪うことは禁忌に属すること。それは今まで生きてゆく中でそう教え込まれてきたから。しかしこの世界の人間達にとって命の価値はそこまで重い物ではなく、それが魔

族の命となれば尚更だった。

彼の心に生まれた罪の意識。しかしそれを理解する者はおらず、その価値観の違いがさらに彼の心を蝕むという連鎖。価値観の違いという明確な壁。その壁が彼の孤独を増長し、その孤独がさらに心を蝕む悪循環。

だれでもいい、自分の罪を認めてほしい。

誰でもいい、自分の罪を責めてくれ。

無意識のこの思いに応える者はおらず、無気力状態になっていたのもそれゆえに心の浸食を防がんとする自己防衛の結果だったのだろう。だが今、彼の前にその罪を突きつけられる者が、裁ける者が現れた。

自らの内にため込まれた『罪』。それを『罪』だと認識を共有する存在。それは価値観の共有。孤独からの離脱。彼が求めて止まぬ者。コロッセオからここにたどり着くまでの間、隼人は彼女に裁かれることを無意識のうちに望んでいた。

裁かれるべきことを裁かれず、罰せられるべきを罰せられぬ。それは意図されたものでは無かつたが、それは今まで築かれてきた価値観の否定にも繋がること。しかしここで彼女に裁かれれば、それは彼の価値観の肯定であり、自分の感じていることが間違いではないという証明であり、祭隼人という存在の再確認であるから。

けれど、彼女は彼の『罪』に触ることはなかつた。

それは彼の立場に対する同情か、または別の理由による物かは分からぬ。しかしそれは隼人の望んでいた物ではなかつた。無気力状

態といつも自己防衛の名の抑圧から解放された隼人に、これ以上溢れ出る物を押さえ込むことはできず、それは容易く暴走する。

埃の積もった床の上に崩れ落ち、隼人は泣いた。ただただ、泣いた。それは一体何の涙なのか…………。

全身にのしかかる『罪』の重みに耐え切れぬ故か、それとも自身が『独り』だという孤独感故か。またはもう会えんだろう人達、友人や家族たちを思つてのことかもしれない。

もしかすれば理由など存在せず、そのどれもが理由なのかもしない。

声を殺し、しかし抑圧され続けてきた、押さえ切れぬ感情のうねりに嗚咽が混じり、歳も外聞も関係なくただただ泣き続ける。

「…………辛かったのだな」

ベッドに座っていたはずの女がいつの間にかそばに近づき、その黒翼で彼を包み込む。そして隼人の頭を胸元に抱き寄せ、幼子をあやすように頭を撫でる。

「…………私達魔族の王は力でもって民を統べる。故にさらに大きな力が現れたとき、その地位を追わることとなる。

我が父とてそうだ。先代の王を己が手で殺し、そうして王となつたのだ。

力ある者が王となる。ならばより強き者が現れれば父が王位を奪われるは当然のこと。その時は王位だけでなく命もまた同様であろう。そのことは漠然とではあるが、常に覚悟はしていた。

此度の父の死は、ついにそ順番が回ってきただけでしかない

だからそなたが気に病むことではない。そう続けようとして、彼女はその言葉を飲み込んだ。彼が欲する言葉は全く別の物だと気付いたからだ。

「…………しかし、そうだな。父の死に悲しみを覚えていないと言えば嘘になる。少々物騒なところはあれど私にとつてはやさしい父親だったからな。だからその父を奪つたそなたを憎む心は確かに私の中にある」

胸に抱かれた隼人の身体がびくりと震える。だが彼女はそんな彼ぼ頭をより強く、優しく抱きしめて言葉を続けた。

「だが、そなたの理由を知つて、なぜそなたを責められよう? そなたとて犠牲者ではないか。見知らぬ地へと呼び出され、頼る者もなく、誰にも気づかれるこもとなくただ一人傷つき続けてきた…………。真に責められるべきはそなたをこの世界へと召喚したレードHWではないか。

だから、私はそなたを赦そう。そなたを憎む気持ちを持つ私が赦すのだ……、だからそなたも御自分を赦すのだ」

声を押し殺しながらしかし混じる嗚咽が多くなり、彼女は隼人を抱きしめる。

「今はとにかく泣かれよ…………。泣いて泣いて、今までため込まれた感情を全て吐き出しなされ。

そしてその涙が止まつたとき、まだ御自分を赦すことができぬと言うならば、償つて下され。これ以上そなたの知つた悲しみが生まれぬように、その悲しみを知るそなたが考え方を導きだされよ」

ついには声を出して泣き始め、彼女はそれを受け止める。泣きじゅ

くの半供をあやすように…………。

「落ち着いたか？」

「…………ああ、みつともないとこ見せたな」

盛大に泣いたことで目を真っ赤にした隼人は、恥ずかしそうに視線を逸らしながら答えた。彼女はその様子を 微笑ましそうに眺めながら首を振ると。

「そんなことはあるまい。老若男女関係なく、感情をため込むというのがあまりいいことではあるまい。たまには今のように吐き出してしまわねば心が病むことになろう」

日が落ちて久しいこの時間。星明かりもない暗闇の中、魔族である彼女は顔を逸らしている隼人が頬を赤くするのを見て静かに笑みを浮かべる。

しかし彼女はその笑みをすぐさま引っ込めると、真剣な表情へと変えて問う。

「それで、これからそなたはどうするのだ？」

この言葉に顔を逸らしていた隼人も表情を改めて向き直り、深呼吸

をするかのように大きく息をすつてから言葉を紡ぐ。

「……誰がなんと言おうと、理由がどうであれ俺がしてきたことは赦されざることだ。だから、償いをしたい」

(ああ、やはり彼は自分を赦し切れなんだか……)

悲しそうに見つめる彼女に気付かずに、隼人は自分の両手に視線を落とす。暗闇の中でも分かるような真っ赤な血の色。それが両手を染め上げているような錯覚に隼人は唇をかむ。
フォースティアに切り裂かれた右腕はすでに再生し、試しにぐっぱ、ぐっぱと開いて閉じて繰り返すがいつも通りなんの違和感も感じられない。

『化け物』

あの時の兵士の言葉が脳裏に甦る。

(どんな傷も、それこそ腕を切り落とされようが首から下が無くなろうがトカゲのしっぽのように再生するんだ。全くもって化け物だよな……)

「やうか。ではどうする?何をするにしてもまずはマグガディアから出る必要がある。どこか行く宛はあるのか?」

「無い。だけこの後する事はもう決まってるよ」

「ほお、聞かせてもらひても?」

隼人の言葉に意外そうに声を上げ、隼人は小さく頷いてコロッセオ

のある方をへと視線を向ける。

「コロッセオに戻る」

「な、そなた何を考えている。コロッセオにはまだ多くの兵士が残つているはずではないのか？何のために戻るというのだ？」

「コロッセオの地下には奴らが娯楽として闘わせるための魔族が大勢捕まつている。まずはそれを解放する」

驚く彼女にそう言いながら、かつてコロッセオの内部を案内された時のことと思い出す。あの時は魔族や魔獣がどういつ者かを教えると言われてコロッセオへと連れて行かれた。

コロッセオの地下に並ぶ檻。そこにに入れられた魔族達は一体どれほどいたのだろうか？

年老いた者もいればまだ幼い者もいた。満足な手当をされなく放り込まれている者さえいたのだ。この一年間でその数はどれだけ増えただろうか？中には隼人が原因で檻へ入れられた者もいるはずなのだ。そんな人達を放つて何処かへ逃げるなど今の彼には出来なかつた。

「彼らを助け出しますは白龍連峰に向かう。多分マグガディア軍もそつちを固めるだらうけど、直接北に向かわず西のクアカナラカン湖に向かってその漁船を奪う。奪った漁船でルティスイア河を下れば直接北に向かうよりも早く白龍山の麓にたどり着けるはずだ。途中軍と戦闘になつても、コロッセオには奴隸闘士として捕まつてる獣人や鬼族がいたはずだから逃げることに専念すれば何とかなると思う」

「……確かに、船を使えばかなりの距離を稼げる。それにクアカ

ナラカン湖はここからそれほど遠くない。今からでも夜明け前にはたどり着けるか

「ああ、だからすぐにここを出たいんだけど……。そういえばあんた魔法は？」

思い出されるのはあの日の魔王との闘い。剣を振るうと同時に放たれる魔法の数々におおいに苦しめられたのはまだ記憶に新しい。彼の血を引くならばあの魔法の才能も受け継がれているのではないか？ ただし彼女にそれだけの才があったのならばそう易々と捕まつたりなどしなかつたのでは無いだろうか？

そのことに全く気付かず問いかけ、彼女は静かに首を振る。

「『奴隸の首輪』装着者の魔力を封じ、他者へ危害を加えることを禁ずる魔法具だ」

長い髪をかきあげ、その細く白い首にはめられた無骨な首輪を隼人に見せると、その説明をし始める。

「これはマグガディアで造られた魔法具なのだが、その性質上罪人の拘束器具としても有能な上に安価で量産がきくので私達の国でも使われていた代物だ。

これを外すには特別な器具と長時間の儀式魔法を用いてようやく外すことができる。

ゆえに今の私はなんの役にもたたぬよ。まあ鬼族のように魔力に乏しくも耐魔力が高い種族には、危害を加えることを封じる能力は効かぬのだが、私は竜魔族ドラゴンクリフと翼人族ショウジョウケイのハーフなのでな

「そう、か。わかった。でも魔族達の解放には人手が必要だ。一緒に来てくれるか？」

「つむ、だが足手まといになるようであれば即座に切り捨てよ。それは私だけでなく、コロッセオに囚われている魔族達とて同様だ。僅かな足手纏いのために大勢を危険に晒すわけにはいかぬゆえな」

その言葉に隼人は逡巡するも、唇を咬みつつも頷く。

「よし、その言葉忘れるでないぞ」

そして一人が廃屋から出ようとしたとき、隼人はあることを聞いていないことに気が付いた。

「やつには名前……」

「む、そういうえば互いの名前を交換していなかつたな。私としたことがすっかりと忘れていた」

隼人の言葉にキヨトンと首を傾げると、そう言えばと納得して頷く。

「恥ずかしいところ見られておいて今更な気もするけど、祭隼人だ」

「マツリハヤト。聞き慣れぬ響きだが、いい名だな。ではハヤト。私の名も受け取ってくれ。

魔王ネスフィアムが娘リリィアネイラだ。リリィと呼んでくれ」

「蛇王の立てる毒の牙……」

「ぐあがつー？」

「ロッセオの地下にある牢獄。不用心にもたつた一人で見張りをしていた兵士の鳩尾に膝蹴りを叩き込み、その意識を瞬時に刈り取った。

「鍵は？」

「これだ」

倒れた兵士の腰に掛けられた鍵の束を奪い取り、通路の向こうから駆け寄つてくるリリイに投げ渡す。

「巡回の兵士がこないか見張つている。急いでくれ

リリイが隠れていた角へと隼人が走るのを見送り、彼女はすぐそばの牢屋の鍵を開く。

「ああ、もう時間か？ちつ、今日はやけに早えじゃねえかよ」

開かれた扉から入る光に、牢屋に囚われていた男は目を細めながら地が唸るような声で呟くと、殺氣立つた目でリリイを睨みつけた。

「そりゃ、それは悪いことをしたな。だが今を逃すと脱出が困難になる。今はとにかく一緒に来てはくれぬか？」

「なに？ ぬあ！？ あんた、まさか！？」

鬼の男の言葉を最後まで聞くことなくリリイは次の牢屋の鍵を開けに走る。一つ目の牢の鍵を開けたところで鬼族の男が牢から身を屈めて出てくる。薄暗い牢屋の中で壁際に座っていたから分からなかつたが、屈めていた身体を伸ばせば天井まで2m半はありそうな廊下だというのにそれでも上へと向いた巻き角が天井に付きそうになる巨体。奴隸共通のボロボロの服・彼の場合は服というよりも布だが、から突き出た腕はリリイや隼人の胴よりもなお太く筋肉が盛り上がっている。

「やつぱり、あんた白龍連峰の姫さんかい。あんた見てえなお人がなんで……」

「父が死に、私は捕まつてここにいる。そんなことよりも他の牢を開けるのを手伝ってくれ」

手を止めることなく簡潔に答え、鍵束から半分程取り外して束の方を鬼族の男に投げ渡す。男は慌てて投げ渡された鍵束をキャッチして言われた通り牢の鍵を開け始める。

「ある男が助けてくれた。そしてこの口ロッセオに囚われた奴隸も助け出したいとな。

この国から脱出するにはそなた達の助けが必要だ。協力してくれるな？」

次々と牢から出てくる奴隸闘士達に鍵を渡しながら問い合わせる。問われた男達はニヤリとばかりに口端を上げて拳を握つてみせる。

「当然でさあ、こんなところからおそれらばできるつてんならあ俺達

は何だつてしやすぜ?」

奴隸達を代表するように鬼族の男が答え、周りを見回せば全員が同じ様に拳を握りながら肯定の声を上げる。

「どうか、礼を言つ。

よし他の囚われた者達も救出にゆくぞ」

「合点でさ。クガーザ、パルディア! 武器庫から俺達の得物を奪つてこい!」

「わかつたぜ」

名前を呼ばれた鬼族の男と豹頭の獣人はきびすを返して廊下を駆けてゆく。

「リリイ、終わつたか?」

とそこで一人が駆けていったのとは別の通路から隼人が飛び込んでくる。奴隸達の声を聞いて戻ってきたのだ。

「うむ、今二人ほど武器を取りに行つているがこここの奴隸達は全員来てくれるそうだ」

「姫さん、そいつは?」

いきなり現れた人間である隼人に鬼族の男は怪訝そうに眉を顰める。全てがそうというわけでは無いが、基本人間と魔族は相容れることがない。彼の反応は至極当然のものだらう。

「彼が私を助けてくれたのだよ。コロッセオの奴隸達の解放も彼が望んだことだ」

「マジですかい？人間が俺達を？」

リリイの言葉に奴隸達は疑問の声を上げるが、二人はそれを気にすることなく廊下を走り始め奴隸達も仕方なくそれに続く。

次の牢屋へと向かう途中、何度も巡回中の兵士にでくわすが、隼人は即座にその意識を刈り取り先を急ぐ。

「持つてきただぞ！」

途中武器を取りに行つた一人が他の牢の奴隸を連れて合流し、戦える者達に武器が行き渡つたことで一人は一手に分かれる。コロッセオの残る二つの牢へと手分けして向かうこととなつた。

「虫の知らせ、というのも馬鹿にはならぬようだな……」

奴隸闘士を含めて56人もの数の奴隸達を助け出し、コロッセオを出した隼人達の前に立ちふさがつたのはマグガディア軍の誇る四将軍の一人クルアカンだつた。

マグガディアの軍は四大属性である水地火風に合わせて四人の將軍が存在し、彼はその内の地を司る將軍だつた。ちなみに先に隼人の手により死亡したフォーティスは火を司る將軍であつた。

「クルアカン……」

「俺はお前を賣つていたんだぞ……。それを裏切りおつて……」

巨大なハルバートを構え、それに応じるように彼の配下の兵達が隼人達を取り囲む。その数は30人ほどか。数の上では隼人達が約倍の人数と有利とはいへ、実際に戦えるのは隼人と奴隸闘士達の19人。魔族の基本スペックは高いとはいえ、相手も軍のトップともいえる将が率いる精銳であり、何よりも37人と半数以上が戦えぬこの状況、どちらが有利かは火を見るよりも明らかである。

「陛下に勇者へと取り立てていただいた恩を忘れ、あのよくな……」

……

誰の目から見ても怒り心頭といった様子のクルアカンに鬼族の男は首を傾げる。

「勇者つて、それであれつてあんた一体何したんだ？」

「別に勇者の証だつて渡されたバッヂを踏み潰してやつただけだ」

「はあつー？」

その答えに素つ頓狂な声をあげてしまつのも当然だろう。勇者のバッヂが所属する国の国旗を模していることは、この世界では誰でも知つているようなことだ。そして国旗に対する扱いについてもだ。

それだけにその場にいた誰もがおかしな者でも見るような目で隼人を見る。すなわちこいつは何を言っているのだろうかと。

「それが、どうこう意味を持つているか、分かつて言っているのだろうな？」

怒りに顔を赤くしたクルアカンは、ハルバートの柄を持つ手に力をこめる。もし視線だけで人を殺すことが出来るのならば、この場にいる全員を皆殺しにできそうな形相で隼人を睨みつけるが、対する隼人はそれがどうしたと言わんばかりの様子でクルアカンを鼻で笑う。

「どうだつていいな、そんなことは。

それとレードに伝えておいてくれ。この国は俺が潰すってな」

さすがにこの言葉には解放された奴隸達だけでなくクルアカンを含め全員がギョッとする。

「今、なんと言つた！？」

「この国は俺が潰す」

轟音が当たりに響き、クルアカンの足下から隼人の足下まで小さな地割れが走る。クルアカンが振り下ろしたハルバートによるものだ。

「國賊めが……、陛下への恩義を忘れての数々の行い。もうゆるさん！」

「誰が恩なんか感じるか。俺があいつに向けるのは、あの日から今まで憎悪だけだ」

戦斧が空気を割る轟音と共に隼人を襲う。唐竹割りに振り下ろされる一撃を、しかし隼人は前にでることで回避する。長柄の武器の死角、相手の懷へと飛び込み肘を振るつて胸を撃つ。よりの上からの一撃は大したダメージにはならないようだが、その威力に後方へと大きく吹き飛ばされる。

「あれは俺が片付ける。他の兵士を抑えてくれるか?」

「ライオックスでああ」

「え?」

「俺の名前があ」

振り返る隼人に鬼族の男は歯をむき出しにして笑みを浮かべると、手にした金棒を肩に担ぎあげて前へ出る。

「すいやせんね。正直、姫さんに味方だつて言われても、大将のことを疑つてましたわ。だが今のを見てそれも晴れやした。

周りの雑魚を抑えろ?任して下さいや。抑えるどころかそれ以上大将の手は煩わせませんわ。後ろのことは気にせず、存分にやってくだせえ」

「…………祭隼人だ。

ライオックス、周りのは頼んだ」

「へい!野郎共行くぞ!」

まるで軍と対峙したかのような声がそれに応え、隼人達は地を蹴つ

た。

隼人の身長と変わらぬ長さの鉄棍が地面を叩く。その一撃で多くの士や砂利が跳ね上がり、解放された奴隸達に襲いかからんとする兵士達を迎撃つ。

「てめえらの相手は俺達だ！」

ライオックスの一括に奴隸闘士達が呼応する。

奴隸に襲いかからうとする兵士の槍をパルティアのカトラスが受け止める。

「魔族風情が……！」

「魔族風情、か。ならばこう返してやろう。人間風情が！」

槍を弾いて身体を屈め、背後から切りかかつってきた剣撃を避けてそのまま地面を転がり距離を取る。戦えぬ奴隸を背に一本目のカトラスを抜き放ち両手で構える。

「来るがいい、貴様達をこれの錆びにしてやろう」

豹の「」とき身のこなしで宙へと飛び上がり、頭上から兵士へと襲いかかつた。

「ふん、はつ！」

クガーザは手にしたバックラーで剣を弾き、横を抜けようとする兵士の行く手に手斧を振り下ろしてそれを防ぐ。

「後ろの連中をやりたかったら、まずは俺を殺してからにするんだな」

「ちつ」

煩わしいとばかりに振るわれる剣手の斧で迎え撃ち、側頭部目掛けバックラーを振るう。兜と盾がぶつかり合い甲高い音を立てるが、兵士はふらつきながら後ずさり、そこにクガーザの蹴りがねじ込まれ、そのまま後方へと吹き飛ばされる。

「ま、貴様ら」ときにやられるつもりは毛頭無いけどな

バックラーを正面に向けその後ろに身体を入れて斧を相手から隠し、クガーザは迎撃の構えをとる。鬼族にしては小柄な、しかし人間にとつては巨大な体から向けられる殺氣に、兵士達は攻め倦ねるのだった。

「はつ！」

首相撲の体勢で放たれた膝蹴りは、間に差し込まれた腕に防がれる。それでもなお当たるまで蹴り続けるとばかりに脚を引いたところで目標を変更。腹部を蹴ってクルアカンから飛び退る。今まで胴があつた場所へと振るわれるのは彼の膝と敵の顔の間に差し込まれた腕にはめられた手甲から伸びる白刃だった。

「でかい武器を使う割に暗器がおおいな」

たつた今隼人を襲った手甲の白刃の他に、膝に仕込まれた毒針に鎧の各所に隠された毒塗りナイフ。

他にもかかわらず寸鉄や礫など巨体に似合わぬ嫌らしい戦い方に舌打ちをする。

「国を守るために手間など選んでおけん。貴様もマグガディア王國に牙を剥いたことを悔いて死んでゆけ」

「お断りだ、お前こそ護る価値もない國のために無駄死にするんだな」

「ぬかせえー！」

腰のベルトに仕込まれた投げナイフが宙を駆け、毒を塗られた刀身が緑色に怪しく光る。隼人に對して毒はほとんど意味を成すことはない。それが死に至るよつた物ならばなおさら。しかし……。

飛来するナイフの射線からから身体をどけてかわし、続けて放たれる二投目三投目も完全に回避する。

そして体勢を崩したところへ投げられたら四投目を地面に転がることでやり過ごす。

確かに隼人の異能力はたとえ毒であっても完全に回復させることができ。しかしそれは全く効かないかといえばそうではなく、致死性の毒で死ぬことはなくとも身体が痺れて動くこともままならなくなり、さらに麻痺毒の場合より異能力の働きが悪くなってしまうのだ。

地に転がりナイフを避けると、さらに地を転がり距離をとる。案の定開いた距離を一瞬で積めたクルアカンの一撃が地面にめり込み、その衝撃が大地を震わせる。

「逃げるばかりか、元勇者が」

「武器に毒を塗つてる陰険野郎に言われたくないな」

距離をとつて立ち上がり、両手を挙げ首をすくめるような独特の構えを取りながら応えて敵の獲物を見る。毒鉤竜ジヤナラーケの毒牙を用いて作られた巨大なハルバートの刃には、その腹の部分に空けられた穴から染み出した緑色の毒液がまぶされ、獲物を振るう度に毒液をまき散らしている。

「貴様を倒すにはこれぐらい必要だろ？いや、これでもまだ足らないくらいだ。貴様はゴキブリ以上にしぶといからな」

クルアカンの口が閉じるよりも速く、刹那にも満たない時間で距離を詰めての肘打ち。斜め下からかちあげるようにして放った一撃はとっさに首をのけぞらしたクルアカンの顎を掠める。

「もうつた！」

僅かに前に出ていた膝に足をかけ、鎧の飾りを足場にクルアカンの

長身を駆け上る。

「火尾を振るうハヌマンー！」

クルアカンの側頭部を狙つて放つ膝蹴りは、しかし身体が勝手に反応したのかギリギリのところで挙げられた腕に阻まれる。隼人は舌打ちしつつもそのまま膝を振り抜き、クルアカンも直撃は免れたものの吹き飛ばされ大地を転がる。

「クルアカン様！」

それを見た兵士の一人が着地したばかりの隼人の背後から切りかかる。

避けることも防ぐことも適わぬタイミングでの攻撃。受ける以外に道は無しと判断するや、受けた直後に反撃する為に四肢に力を込める。

「どあほおつ、貴様の相手は俺だろつが！！」

しかしその攻撃が隼人に届くよりも早く、巨大な物が風を切り裂く轟音が辺りを震わし、兵士は身体をくの字にへし折られて吹き飛んでゆく。

「大将には指一本触れさせるかよおー！」

声の主、ライオックスが隼人の背を護るように立ち怒声を上げる。

ライオックスに声に出さずに礼を言い、脳を搖さぶられながらもなお立ち上がろうとするクルアカンに向かつて地を蹴る。

今クルアカンの手にハルバートは無い。隼人に蹴り飛ばされたときに手放してしまったからだ。

クルアカンは迫る隼人に對して手甲から刃を引き出し、殴るように突きを放つ。心臓めがけてまっすぐに迫る刃。隼人は心臓の前に左手を差し出した。

刃が肉に差し込まれる鈍い音。クルアカンの刃は隼人の腕を貫き、後少しで胸に突き刺さるところで無理矢理軌道を変更させられる。隼人がフォーテイスとの戦いでやつたことと同じだ。敵の得物が突き刺さった左手を身体の外へと振り、次手を封じたクルアカンへと飛びかかる。

「首を啄む巨鳥の嘴！」

体制を崩したまま首の位置が低くなっている彼の喉仏に膝を、それと同時に首の裏へと肘を叩きつける荒技に、硬い何かがへし折れる音が響く。

「か、はつ…………」

胸を蹴つてクルアカンから離れると、クルアカンもまた蹴られた勢いのまま仰向けに大地に倒れる。明らかに首の骨が折れた彼に隼人は用心しながら近づき、その死を確認する。即死だったのだろう驚愕の表情を浮かべて息絶えたクルアカンの目を閉じてやるのは死者に対する最低限の礼儀だ。

立ち上がり振り返れば、今起きたことが信じられないのか呆然と立ちすくむ兵士達。その場に立つたまま確認すれば兵士の数は半数まで減つており、奴隸闘士達も六人が地に伏し、二人が他の奴隸達の中で血を流す腹を抑えて倒れ込んでいる。大勢の奴隸を庇いながらも良く戦つたといえるだろう。しかし傷つき散つていった奴隸闘士

達の存在に隼人は唇を噛む。

「まだここのことを持て他の軍に知られる訳にはいかないんだ。悪いけど、あんた達を逃がしはしない」

静かにそう宣言して一步を踏み出ると、兵士の一人が悲鳴を上げる。それは瞬く間にほかの兵士へと伝播し、兵士達は我先にと逃げだそうとする。しかし隼人は宣言通り、彼らを逃がすつもりはなかった。
……。

バルディアの振るう一刀のカトラスが、鋸のよろこ交差して逃げる兵士の首を刈り取り、隼人達を囲んでいた兵士達は全滅する。

「終わつた……」

切り落とされた首の目を閉じてやりながら、バルディアは静かにそう告げて隼人達の元へと戻つてくる。

「本当なら埋葬してやりたいけど、時間がない

死体を敵味方の区別無く並べた隼人が、苦渋に顔を歪めながら呟くと、ライオックスが静かにうなずきそれに同意する。

「気に病まねえでくんなせえ。見せ物じゃなくて自分の意志で戦つて死ねたんださ。」ここで死んでいった連中よかよっぽじマジだし、こいつらだってそう思つてまさあ」

「…………そう、だといいな。

行こう。先ずはクアカラナカン湖に向かう。そこで漁船を奪つてルティスイア河を下る」

「確かにそれならば、この大人数でも速やかにこの国を脱することができますな」

隼人の言葉に頷くのは豊かな髪を蓄えた魚人族シーラカーラの老人だった。人とほとんど変わらぬ姿にただ一力所違う箇所を上げるとすれば、耳元から生えるエラともヒレともとれるそれか。

「ならば湖から先の先導役は俺達の役目だな」

三つ叉の鉤を手にした水魔族フィシャールの男が魚がそのまま人になつたような顔を不適に笑わせると、同じ水魔族の奴隸達も同意するように声を上げる。

「ああ、そう言って貰えると助かる。では時間もない、急ぐとしよう」

いつの間にか隼人のそばに立っていたリリイがそう締めくくり、彼らは湖へ向けて移動を開始しようとすると。

「あんた何を言つているんだ!!」

突如上がった怒声に再び足が止まる。

「どうした?」

声のした方へと向かうと、そこには例の傷を負つた一人の奴隸闘士と、『奴隸の証』を付けた竜魔族の男がにらみ合つていた。

「あ、いや。ここからが…………」

隼人の問に対しても竜魔族の青年はしどろもどろになりながら奴隸闘士達を見る。

「どうもこりも、俺達を置いて行つてくれって言つただですよ」

「こりの傷じや、俺らは足手まといになるだけだ」

竜魔族の青年の代わりに答えたのは傷を負つた奴隸闘士の一人だった。

腹部の傷を抑える虎の頭部を持つ人虎族ティーグの青年と妖魔族の一種族である小柄なゴブリンの男は自嘲するように笑みを浮かべるとさらに言葉を続ける。

「ただ足手まといになるでけならまだマシだ。けど今の俺たちは戦えないだけでもないぜという時にとっさに動くことも出来ねえ」

「そう言つこりつた。わかつたら俺らのことは置いて行つてくれよ。俺たちのせいでの失敗したことになつたら死んでも死に切れねえしよ」

戦闘中に応急手当だけはしてあるらしい腹部を抑えながらティーグの男はさつと行けと手を払う。

「言いたいことはそれだけか？」

隼人はティーグの男のそばに膝をつくと、その腕を取つて肩を貸して無理矢理立たせる。

「まだ失敗するとは決まってないし、軍に捕捉されるとも限らない。だつて、このにお前達だけ置いていかれるかよ。

「なつ……、そんなのは希望的観測でしか……」

「その程度で見捨てる位の気持ちなら最初から『ロロシセオには来てない』

希望的観測でしかない。そう言おうとした言葉を遮り、隼人は睨みつけるようにしながらティーグの男を見る。その目に何も言えなくなつた男を見て竜魔族の青年も笑みを浮かべてゴブリンの男に肩を貸す。

「それにあんた達の傷は俺達を譲つて負つた傷だ。恩人のあんた達を置いてなんかいけるか」

周りの人達もまた青年の言葉に頷き、中には反対側の肩を支えるものも出てくる。

「…………あんたら、馬鹿だろ…………」

同じ魔族でもその容姿から敬遠去れることの多いゴブリンの男は、

そんな皆の姿に憎まれ口を叩きながら涙を流す。

「よし、時間がない。今度こそ行くぞ」

隼人の号令に皆が頷き、今度こそクアカラナカン湖へむけて歩き始めた。

・リリィアネイラ

46才

白龍連峰の魔王ネスファイアムの娘であり、ドラグクリフ シュラミゴケーラ竜魔族と翼人族のハーフ。背まで伸ばした濡れガラスのような光沢を放つ黒髪、そこから冠のごとく頭部に巻きつく角、夜空を連想させる黒翼と《高貴なる紫》とも称される紫色の鱗に覆われた尾を持ち、それらと対照的な透き通るような白い肌の女性。人間よりも長く生きる魔族達の中でもまだ若輩者。特に長齢で知られる竜魔族の中では成人としても扱われることもない。

父親譲り魔法の才と相手が誰であれ平等に接するその性格から、多くの魔族から慕われている。

物理属性資質：アンフリュアンファイス（やややわらかくやや速い）

魔力量：S

魔法属性資質：光闇《二重属性者》

・保持スキル《テイム》

ランクB

自身と相性のいい魔物を手懐けることの出来るスキル。ランクBでは3種の魔物を手懐けることが可能。

リリィアネイラと相性のいい魔物は竜種、鳥種、馬主の3種。

郊外からかすかに聞こえる虫の声。

都のはずれへと辿り着いた隼人達にかけられる声があつた。

「な、なああんた達…………」

突如の声に全員が身構えるも、声の聞こえた方を、いやこの場所が何処なのかに気付いて構えを解いた。そこは野晒しにされた檻が並べられた広い広場。同時に先ほどから感じていた異臭の正体にも気が付き、隼人は怒りを覚えながらも声の主へと向き直った。

声の主がいる場所は隼人の近くに設置された檻の中。狼の頭部に灰色の体毛を持つその男は首に『奴隸の証』をはめられている。この場所は、奴隸市場だった。

「なんだ？」

「あんた達この町から逃げるのかい？みんな『奴隸の証』を着けてるからそうだと思ったんだけど…………。もしそうなら隣の檻の子供と一緒に連れて行つてやつてくれーその子は明日出荷されちまうんだよ！奴隸としてじゃなく、貴族どもの飼つてる魔獸の餌としてだー！奴隸としてならまだいつかは逃げるチャンスもあるけど、魔獸の餌なんかにされたら…………。頼む、まだ小さい女の子なんだ！」

必死に頼む男の言つ檻には、確かに小さな女の子が膝を抱えながら怯えるように身体を震わせていた。埃にまみれた赤茶色の髪の中から飛び出た狐の耳に大きな尻尾も狐のそれ。狐の獣人の子だろう。

「大将……」

ライオックスが心配そうに声をかける。今まで寝ていたのだろう奴隸達が目を覚まし、隼人達の存在に気付いた者達が助けてくれと騒ぎ始める。

「ハヤト、これ以上増えては動きが遅くなる。それに漁船にこれだけの数が乗れんだろう」

苦渋の表情を浮かべながらリリイがそう囁く。その言葉に市場を見渡すと檻の数は百ほどか。……。その全てに奴隸が入っているわけではないが、それでも相当数の奴隸がここにいることになる。

「なあ、その子だけでも…………！」

必死に懇願する人狼族の男の声に、隼人は決心したように顔を上げる。

「だつ……！」

渾身の肘打ち。

そして鳴り響く破碎音に一瞬で広場は静寂に包まれた。

金属のきしむ音とともに檻の扉が開かれる。

「え、な……」

目の前で開かれた扉に人狼族の男は目を見開いた。

「速く出で、時間が無くなる。

手分けして牢を開けるんだ！全員助けるぞ！…」

「へいー！」

ライオックスの返事に応じるように解放された奴隸達が市場に散らばつてゆく。

隼人は再び肘を振るつて隣の檻の鍵を破壊する。

「おい、ハヤト。おまえの気持ちも分かるが、この数を連れて脱出するなど無茶だ！」

無事にクアカラナカン湖にたどり着けたとしてもこの人数を乗せられる船があるとは限らないぞ」

檻の中から飛び出してきた少女を抱き止め、しがみついて離れないことにため息をつく。周りを見回せば力の強い鬼族を中心に次々と檻を壊しているのがわかる。

「無茶だろうがやる。魚人族や水魔族の人達には泳いでもらえばいい。そうすれば船が必要な人は少なくなる。それにあの広さの湖に漁船が一隻しかないわけじゃないだろ？以前見たけど一隻もあれば十分に乗せることができるはずだ。別に快適な船旅をしようつていうんじゃないんだからな」

しがみつく少女を抱き上げ、隣の檻に肘を打ちつける。その破碎音に少女がビクリと震えるが、今は時間が惜しいと次々と破壊していく。

「はあ、そなたがそう決めたのならば仕方あるまい」

リリイもまた壊れた檻の格子を引き抜き、鍵を破壊し始める。

助け出した奴隸達も檻の破壊に加わり奴隸達は瞬く間に解放される。

そして全ての奴隸達を解放し、隼人は再びクアカラナカン湖へ足を進めた。

一向に離れようとしない少女を離れさせるのをあきらめ、隼人は集団の先頭を歩いていた。

彼らが今歩いているのはリティブルからクアカラナカン湖に向かう途にある名も無い山の裾。左手側の急な斜面の上には木々が立ち並び、右手側の斜面の下には森が広がっている。

ふと見上げて見ればこんな時でなければゆっくりと見上げていたくなるような星空が広がっていた。

「夜明けまではまだある。この調子ならば夜明け前に辿り着けるだろ？」

同じように夜空を見上げたリリイ安堵したようにそつぞく。

「ですが、たしかこの山を抜ければ湖へ流れる川があつたはず。若い連中に水中を行かせれば船の確保も確実になりましょうな」

水魔族の老人が額の汗を拭いながらそう提案する。一秒でも時間が惜しい現状、湖で船を得るためにかかる時間すらも惜しい。

老人の言葉に頷き、隼人は辺りの気配を探る。クルアカンとの先頭以降、軍は愚か兵士とも接触していないとはいえ油断するわけにはいかないのだ。

「そう警戒する事もないと思うが？ これだけ静まつていれば離れていても音を聞き分けることもできよう。特に獣人の聴覚は我々よりも鋭いからな」

「え？」

リリイの言葉に心臓を驚撃みにされたかのような錯覚を覚えて足を止めてしまった。それは隼人だけではなかつたようで、ライオックスやクガーザ達奴隸闘士立つた者達、狩猟を生業としていた者達も同時に足止める。それにつられて全体の歩みが止まり、隼人達の表情が緊張しているのを見て身体を強ばらせる。

「…………大将」

「ああ、静かすぎる」

先ほどまでは確かにしていたはずの虫の声が一切無くなっている。しかも虫だけではない、夜鳥や小動物の気配も無くなっているのだ。それはつまり彼らがここを離れているということでありそしてここを一斉に離れるにたる理由があるということ。

「ギノイア」

「任せろ」

ライオックスに名前を呼ばれたゴブリンが右手の斜面を駆け上り木々の中へと消えてゆく。もしも予想が当たっていた場合大変なことになる。

隼人達のただならぬ様子に、リリイ達も辺りを警戒する。

五分か十分か、それとももっと短い時間、いやもっと長い時間かもしれない。しんと静まり返った森の中、早くも時間の感覚が歪み始める。そしてようやくギノイアが戻ってきたとき、隼人達の予想が最悪の形で当たつていたことが証明された。

転がるよつとして飛び出してきた彼の表情は焦りに歪んでいるのが遠目に見えて取れた。そして林から飛び出し幾ばくも進まぬ内に自分のめるよつに転倒し、斜面の下・隼人達の下へと転がってきた。

「ギノアス！」

クガーザが彼に駆け寄るが、転がり方が悪かつたらしく首はあらぬ方向へと曲がり、既に息絶えているのは明白だつた。そして肩には彼が転倒した理由である矢が深々と刺さつていたのだ。

突然の出来事に皆は言葉を失い、隼人や元奴隸闘士だつた者が斜面を見上げる中、彼らを半円状に取り囲むように、弓を携え水色の鎧に身を纏めた兵士達が現れたのだった。

「水色の鎧、リゼルダか……」

隼人の言葉に誘われた訳ではないだろうが、取り囲む兵士達の後ろから水色のプレートメイルに身を包んだ騎士が現れる。手には巨大なランスと身を隠せるほどに巨大なタワーシールドを持ち、フルフェイスのヘルムの格子の向こうから彼らのことを見下ろしている。

「クルアカンに言われてここで待機していたが、まさか本当にかかるとは思っても見なかつたな」

半分呆れ口調でそう言つと、彼は眼下の隼人達を見下ろしたため息をつく。

「コロッセオで見た顔もある。ということはコロッセオにも戻ったということか。あつちにはクルアカン本人が向かつたのだが、よくもまあ無事だつたものだ」

「無事なもんかよ、こつちは助けた内の何人かがやられてんだからな」

「つまりかの将もお前に敗れたということか。

魔王を倒した実力は伊達ではないか」

リゼルダが片手を挙げると兵士達が弓に矢をつがえる。ぎりつ、と音を上げて引き絞られる弦。隼人がざつと確認するが、逃げられるのは背後の斜面を下つた森の中だけ。そちらに逃げたとて背後から矢をかけられることに変わりはなく、その場合どれだけやられることになるのか。それにもし森へと駆け込めたとして、敵の兵士が今見えているだけの筈はない。それに水を司るリゼルダ將軍は魔法王国の名に恥じぬ魔法の使い手、即座に追いつかれるのは目に見える。すでにコロッセオで戦つたときよりも戦える者の数は減っている。あの数に囮まれば全滅するのも時間の問題となる。

もしもここにいるのが隼人だけならば、彼一人あの中に突っ込めばいいだけなのだが、今は護るべき存在を抱える身であり、そんなことができるはずもなかつた。

「だがこの状況をどうにかできる手札はあるまい。そこにいるのは『奴隸の証』で魔法を封じられた奴隸達と奴隸騎士。まともに戦える存在が少ない今、お前達に勝ち目は無い。おとなしく降伏するんだな」

リゼルダの口から告げられる最終通告。ここで降伏したところでのレード王のことだ結果は目に見えている。ここにいる全員待ち受けているのは死刑という結果。ここで死ぬか少し後で死ぬかの違いしかない。いや、死刑決行までの間も拷問を受けることになる可能性すらあるのだ。

（皆を森に逃がして、俺が奴らに突っ込むか……。せめて戦えない人達だけでも助かれば御の字だ）

抱えている少女をリリイび押しつけるのと同時に飛び出す。そう決めて両の足に力を込める。

「つき合こますぜ」

隼人の使用としていることが分かつたのか、ライオックスが小声でそう告げる。ギノアスのそばに膝をついているクガーザも目それに同意している。

断つても勝手についてきそうな上に、断つている時間もない。決死の覚悟を決める彼らに口に出さずに詫びる。

「答えは………！」

合図代わりの返答を、轟音と共に降り注ぐ雷光が遮った。リゼルダの兵士がいる斜面に幾つもの雷が続けざまに降り注ぐ。

「《サンダーレイン》か！？」

リリイの驚愕の叫びが耳に届く。

光属性の系統に分類される上位魔法だ。降り続ける雷のベールの向こうでリゼルダの兵士達が騒ぐ声が聞こえてくる。

「後方の森へ走れ…………！」

突如耳元で囁かれ、隼人は驚いてそちらに振り返った。普段ならば意識をリゼルダ達に向けていたとはいえ、簡単に背後をとられたりはしない。しかし振り返った先には顔を黒い体毛に覆われた人豹族の男がそこに立っていた。

背後で降り注ぐ《サンダーレイン》は威力を犠牲にする代わりに継続時間を長くしているようだが、それとて永遠というわけにはいかないだろう。人豹族の男は隼人の返事を待たず、先に森へと走り出す。それを見て意を決した隼人は雷鳴に負けぬ大きな声で指示を出した。

「森だ！あの入豹族に続け！」

走りながらリリイに少女を押し付けて斜面を滑り降りる。森の入り口の木のローキックを放つてへし折ると、すぐ後ろに続いてきたライオックスに目配せをする。その意味を正確に理解した彼は、へし折られた木を抱き抱えると斜面の上、駆けてくる奴隸達の後ろへと

放り投げた。さらに他の鬼族も同じ様に木をへし折つては上へと放
り、斜面へと転がしてゆく。

奴隸達が森の中へと駆け込み終わると降り続けていた雷が止むの
はほぼ同時だつた。雷が止むのを見届けて、残つていた鬼族達も森
の中へと駆け込んでゆく。

「へい、そつかハヤトは私の戦い方を知つていいのだつたな

雷が止み、そして目の前に広がる光景にリゼルダは悔しそうに歯噛
みしながら兵士に追いつよう命令を下す。

斜面の上に転がる木々をくねければ自身で追いかけたといふのこ
と舌打ちをする。

「それに今の魔法は…………、どうひいても私も行かねばならん
か」

重い盾と突撃槍を抱えたまま、リゼルダは兵の後を追つて斜面を下
り出す。田の前で国賊を逃がしたことが王に知れたらと若干顔を青
ざめさせながら。

森を走る隼人達の前に現れたは、目を疑うような光景だった。木々の生い茂った森の中でただ一力所、空間の歪んだ先には荒れ果てた岩場が広がっているのだ。さらにその空間の歪みの横には片手を歪んだ空間に向ける見覚えのある水魔族の姿。

「話は向こうで。今は急ぎなされ

水魔族の老人が皺だらけの顔を向けてそう告げる。背後では隼人達を追つて兵士たちが森の中へと入ってくる音が聞こえてくる。隼人は水魔族に頷き、その空間へと飛び込んだ。

湿り気を帯びた森の柔らかい土の感触が、歪んだ空間へと飛び込み着地した後にはざらりとした砂の感触へと変わる。背後では水魔族の老人が空間の歪みを通り、そして歪みが消えるとそこには森景色はなく、草木の生えぬ岩場が広がっていた。

なにが起きたのか理解できていない奴隸達をよそに、武装した魔族が周囲の岩陰から現れ彼らを取り囲む。正確には隼人一人を……。

「な、なんだてめえら！」

隼人に向けて武器を向ける魔族に、ライオックスが驚きを露わに声を上げ、隼人を庇つて武器を構える。

「止めてくれライオックス。これは当然のことだ……」

「な、大将何を言つて……！？」

ライオックスの言葉を遮るように取り囲む魔族達の一角が左右に分かれる。そこに現れるのは全身を至る所に赤黒い炎の文様を入れた漆黒の鎧に身を固め、巨大な大剣を背負つた騎士の姿だった。そし

てその傍らには薄く白金色に輝く髪を地面に付きそうなほどまで伸び、その髪合間から尖った耳を覗かせる若草色のドレスを身に纏うリヨースアルヴの女性。そして隼人の背後にいた水魔族の老人がその一人の横に並び、隼人はライオックスを脇へ下がらせて三人と対峙する。

「よくも我々の前にその顔を出せたものだな」

黒騎士から発せられた、ぐぐもつた声にライオックス達は驚きの表情を浮かべる。なぜならその声は、ぐぐもつてはいるものの間違いなく女性の物だったのだから。

「彼らを逃がす場所が、ここ以外に思いつかなかつたからな

上へと視線を向ければそこにあるのはこの岩場を睥睨する巨大な砦。それはつい一月ほど前に訪れたばかりの場所なのだ。

白龍連峰が一角、ホトロゼナン山脈中腹に建造された魔族の砦。そしてこの岩場は彼が魔族の将の一人を討ち取つた場所でもある。魔王ネスフィアム配下四魔将、狼将ハルトシャンを……。

「まさかこうやって再び見えることになるとは、思ひもしませんでしたわ」

リヨースアルヴの女性がおかしそうにくすくすと笑うが目だけは一向に笑つてはおらず、敵意の籠もつた視線でハヤトのことを睨みつけている。

「まったく、二人は敵意を出しすぎじゃ。さて、久しいな。マグガディアの勇者よ」

水魔族の老人だけは穏やかな表情で挨拶をし、隼人も静かに頭を下げる。

「まさか残る四魔将全員に出迎えられるとは思つても見なかつたんですね」

四魔将。魔王ネスファイアムが白龍連邦を形成する四つの山を任せた魔王ネスファイアム軍の最高位。かつて隼人が倒した狼将の他に、目の前にいる水魔族の老人ことグルハナーン山脈を治める賢将ダラス。リヨースアルヴである妖将シャナンクルがアミラドゼ山脈を、そして最後のチエラナカルス山脈に配されし剣将グリミナ。

かつて対峙した三人と再び、今度は同時に会い見えることになるなどといつたい誰が予測できるだらうか。

「それと、俺はもう勇者でも何でもない。マグガディアにとつては国始まって以来の大國賊でしじうが」

「ほほほ、勇者の証を碎いたらしいの。まったく、若いのに無茶をするものよ」

ダラスがおかしそうに笑い声をあげるが、ほかの二人はそんなことはどうでもいいらしく、グリミナがダラスの肩を押して前へと踏み出し背負つた大剣を隼人に突きつける。

「勇者を止めたから今までのことを水に流せとでも？・貴様の罪が本当にそんなに軽いと思っているのならば、この場で今度こそ永遠の眠りに誘つてやるぞ」

剣の刀身に闇が絡みつき、不気味な光を発しはじめる。かつてその一撃で隼人の首から下を消失させた一撃。その前段階。

突きつけられる大剣を前に隼人は静かに前へと踏み出し、その切っ先が心臓の上へと僅かに突き刺さる。

「そんなこと思つてもいなさい。そしてこれが俺を裁く一刀だとうならば、俺は喜んでその一撃を受ける」

「なんだと…………つー!?」

馬鹿にされたとでも思つたのか、グリミナの声に陰が混じが、隼人はやるならやれとばかりに格子の向こうの相手の目を見る。

「止めよグリミナ！ ハヤトも一度離れるのだ」

一人の気配に皆が息を呑む中、リリイが仲裁しに入つてくる。

「姫ー！」無事でしたか！？」「

グリミナは大剣を地面に置き、兜を脱いで脇に抱えるとリリイの足下に跪く。脱がれた兜の下から現れたのは、短く揃えた髪を切りそろえた人間の顔。しかしその髪を搔き分け姿を見せるのは三角形の黒い豹の耳。それは人と獣人とのハーフに見られる特徴だ。

同じ様にシャナンクルもまたリリイの足下に跪き頭を垂れて臣下の礼をとる。兵士達もそれにならつてリリイへと跪いて頭を垂れる。ダロスだけは膝を突くことなくリリイのそばに近づき、目を細めて小さく頷く。

「「」無事でなによりですじゃ」

「ああ、ハヤトが助けてくれたのでな。それより、じい達も無事で良かった。こちらの様子もわからず心配していたのだ」

「姫様…………、もつたいのハジセイます」

「ほつほつほつ、リリィアネイラ様は相変わらずですなあ。わしらの心配などよりじ自身の心配を先にするべきでござりませんでしたかな？」

ダロスがおかしかったと尋ねると、リリィは苦笑して頭を振る。

「捕らわれの身となつていただのだ。自身の心配をしたといひでどうじつなるものでもあるまい」

リリィは言われた通り一步下がつていた隼人を見ると、表情を引き締めて隼人のそばに立つ。

「グリミナ、シャナンクル。父は既に無い。私を姫と呼ぶ理由はもう無いのではないいか？」

「何をおっしゃるか！ネスフィアム陛下はたしかに崩御なされてしましましたが、それはそこの人間の手に掛かつてのもの…我らの忠誠は今も変わらず……」

「父は一対一で戦い敗れた。そつだなダロス」

「その通りですが、リリィアネイラ様」

グリミナの言葉を遮り、リリィは彼女に言ご念めるよつてダロスに確認する。

「父は一対一で敗れた。その意味が分からぬそなた達ではあるまい

？」

リリイの口から成された言葉。それを聞いたときその場にいたほとんどの者が、その言葉に含まれる真の意味に気付くことは無かつた。しかし、あの奴隸市場で助けた人狼族の男が隼人のそばに進み出て跪いた時、その言葉に含まれる意味の可能性に誰もが息を呑んだ。そしてその青年に続くよろしくしてライオックスが、クガーザがパルディアが、隼人に助けられマグガディアから脱出してきた魔族達が揃つて隼人に対して跪き頭を垂れた。

「お、おい？」

突然のことには隼人は狼狽し、彼等と同じくその言葉の意味に気付いたグリミナや兵士達も驚愕の表情でリリイを見上げる。

「ま、まさか……、姫……」

「父もまた、いや今王位につく各地の王達、歴代に王達もまた力を証明して王位を得てきたのだ。一対一で戦い父に勝ち、その力を証明したのだ。隼人が王位に付いたとて問題はあるまい」

リリイの口から明確に言葉にされ、そう予想していた者達を含め驚きの表情でリリイを見上げる。そのようなことを一切想像もしていなかつた隼人などは驚きのあまり絶句し、ポカンと口を開けたまま動くことすらできない。

「どうしたハヤト、そんなに驚くことだつたか？」

抱き抱えたままだった少女を降ろすと、少女はハヤトの下へと駆け寄り、絶句したままの隼人にしがみつく。リリイは隼人の足下跪き、

グリミナ達が彼女に対して行っていたように頭を垂れ、臣下の礼をとつた。

「姫（様）」

グリミナとシャナンクルが悲鳴のような声を上げてリリイの元へと駆け寄つてくる。

「姫様おやめください……」

「なぜ姫がそのよつなことなさねば！」

「二人とも下がれ！！血族の者が一対一での戦いで敗れ命を落としたとき、その者以下の血族の命運は勝者の者となる。父もそうやって先王の娘であつた母を娶り、叔父上を配下に加えたのだ。私もまたそれに習つだけのことだ」

狼狽する一人を睨みつけ、有無を言わせぬ態度で一人を下がらせると、リリイは改めて隼人に頭を垂れる。

「お、おい、まさか俺に……」

「そのままかだ。ハヤト、この地の王位はそなたの物だ」

再び起るざわめき。崩御した先王の遺児たるリリイの宣言に、跪いていた兵士達も改めて隼人へと臣下の礼をとる。

「ハヤト、私はあのときここに立つたな。『償つて下され』と……。少々卑怯な気もするが、これも償いの形として受けてもらえぬか？少なくとも、ここにいるそなたが助けた者達はそれを望んで

いると思うが？」

「大将、いや陛下。俺はあまり学とかそういうもんは持ち合わせ
ちゃいねえからあまり難しいことは言えねえが、あんたにはその資
格があると俺は思う。少なくとも俺はあんたにならこの命を預ける
ことができると思っている」

彼らを代表するようにしゃがむライオックスに脱出してきた魔族
達が同意の声を上げる。

「ほつほつほ、これは腹を括つて受ける以外にありそうにないの」
いつの間にかに隼人の傍らにはダロスが立ち、のんきに笑いながら
彼の肩を叩く。

「ダロス老！あなたはそれでいいのか！ネスフィアム陛下を殺した
者がその地位に着くなど！何より人間が王位につくなど聞いたこと
がない！」

グリミナがすごい剣幕でダロスに詰め寄るが、ダロスは表情を変え
ることなく肩をすくめてみせる。

「何を言うかと思えば、わしはそのネスフィアム陛下の先代のさら
にその前の代から歴代の王に仕えた身。そしてその歴代の王全てが
一対一の決闘に敗れて命を失ってきたのじゃ。此度はネスフィアム
陛下にその番が回ってきただけじゃよ。

それにの、ここより北には在位は短いが人間が魔族の王となつた例
が無いわけではない。彼が魔族か否かなど問題では無いのだよ」

「な、くつ……」

ダロスにそう言われてグリミナは勢いを失う。彼女が下がるのを確認したダロスは隼人に向き直ると一礼してから口を開く。

「と、そう言ひ訳じや。

少なくともそこの鬼族の者やその少女、なによりリリアニアラ様はお主が王位に着かずともお主の後について行くじやろうな。そしてこの白龍連邦は次の王位を巡つて争いの坩堝と化す。

お主の返答を、聞かせてはくれぬか？」

ダロスの言葉は起こるであらう事實を告げただけなのだろう。しかしその言葉が隼人にとっては脅迫にも似た意味を持つことも、恐らくは理解したこと。

隼人は一度その場に跪く魔族を見回すと、諦めたように首を縦に振るのだった。

「新しい王の誕生じやな」

ダロスの言葉に脱出してきた魔族達から歓声が上がる。グリミナとシャナンクルは納得がいかぬといった様子で頭を垂れ、兵士達は戸惑いの表情を浮かべる。

この日、異世界から召喚された少年は、勇者の地位を経て王、魔族を統べし魔王となる。

この新たなる魔王を迎えた魔族達は、この後自分達の未来に待ち受けた物をなにも知らない。己の行いに償いを決意した来訪者^{エトランジェ}の魔王。その物語が今始まったのだ……。

これは遠い異世界で起きた遙か昔の物語……。

・ライオックス

50才

鬼族の中でもなお巨体を誇る青年。特徴は額に生えた一本の角。元々は白龍連邦の一つホトロゼナン山脈に住む鬼族の一人だった。物語より10年前、狩りの途中でマグガディア軍に見つかり捕縛され、それ以降コロッセオの奴隸闘士として生きることを強要される。巨大な鉄棍を得物とし、彼の全脅力を込めた一撃に耐えられる者は少ない。

コロッセオの奴隸闘士のまとめ役的な存在で、竹を割ったようなサッパリとして性格をしていて人望は厚い。村にいたときも昔からガキ大将的な存在で、ある種のカリスマを持っていると思われる。

物理属性資質：ノアピア（硬く強い）

魔力量：E

魔法属性資質：地

・鬼族の耐魔力

鬼族特有の種族スキル。鬼族の者は突然変異のようなことでもない限り、総じて魔力量は最低のEとなる。その代わりに絶対的な耐魔力を得ておりこの耐魔力を貫通させる場合、最高位魔法に属する魔法でもない限りダメージを与えることは出来ないとされている。

隼人が王位について三日が過ぎた。現在隼人はホトロゼナン山脈の砦にて各種の報告を聞いているところだつた。

なぜ同じホトロゼナン山脈にある前魔王居城ではなくこの砦なのかというと、魔王城が半月ほど前隼人の行つた戦闘によつて半壊してしまつているからだつた。

「言われたとおり歩兵を中心とした前衛部隊と、弓兵を中心とした援護部隊との組み分けはほぼ完了した。前衛部隊の指揮はグリミナが、援護部隊の指揮はシャナンクルがとることになつてゐる」

「わかつた。それで例の部隊は？」

手渡された報告書にから顔を上げ、リリイに訪ねる隼人の格好は今までとは全く違うものだつた。

マグガディア王国を脱出した日を含め、普段はマグガディアで用意された貴族の服を着ていた隼人だつたが、今は黒を基準としたシンプルな服装になつていた。黒いズボンに無地の黒シャツ。元の世界で彼が好んできていた服装なのだが、王なのだからもつと着飾れとリリイに押し付けられた金糸と銀糸で魔術印を縫い込んだ赤いコートをその上から羽織つていた。このコートというのが前魔王ネスフイアムの持ち物だつたらしく、素材も造りも相当高価なものらしい。これを着せられた当初はグリミナやシャナンクルにはすごい形相で睨まれたりしたが、リリイが何かを言つたらしく今ではそれもなくなつてゐる。

「そちらの編成も急いでいるが……。何分初めてのことらしいからな」

「やっぱり手間取っているか」

隼人の問いに答えるリリイの表情は暗い。そこから察した隼人も表情を暗くする。

彼らが急いでおこなっている軍の編成。これには理由があった。隼人が王となつた翌日、マグガディア王国が白龍連峰へと軍を出したという情報が入つたのだ。

その情報をもたらしたのは剣将グリミナの異母兄である人豹族の青年ブルフグス。リゼルダの兵に囲まれたとき隼人に森へ逃げるよう指示した人豹族だつた。

彼はネスフィアムの代に諜報員としてマグガディア王国へと侵入していく、あの日あの場にダロスがいたのも彼の報告によるものだつた。

「魔法部隊の方は？」

「そちらは順調だ。もともと各将の下にいた者を分けるだけだからな。

言われたとおり回復魔法を扱える者は別に編成している

「ありがとう、それだけでもだいぶ違ははずだ」

持つていた報告書をテーブルに奥のと同時にリリイから視線を逸らし、窓の外に移る景色を眺める。

この階がある辺りは僅かな草木しか生えない岩場になつてゐるが、少しきだつた辺りからは豊かな緑に覆われており、隼人が見てゐる合間にもそこから野鳥が飛び立つのが見えた。

「それと、水魔族フィシャーリーと魚人族シーラカラの協力も得られた。こちらも志願者をハヤトの言つたとおりに配置している」

「……打てる手はすでに打った。後は全力でもって結果をもぎ取るだけか……」

「今まで我々は個々の将が勝手に動いていたが、それでもマグガディアを含め他国の侵略を許したことはなかつたのだ。しかし此度はハヤトの立案の下全軍を上げて、それが一つの意志の下統一されて動くのだ。そうそう負けたりはせんよ」

確かに魔王軍が人間の軍に敗れたことはほとんど無いのだろう。敗れた、または軍を突破された事例は隼人のような勇者と称された者達少数による一転突破のみ。ポテンシャルのアベレージが高い魔族達に個々のポテンシャルがより高い者達の手によるもの。

軍同士の戦いにおいての無敗故の自信に満ちたリリイの言葉に隼人は小さく頭をふった。

人間達は魔族に対して確かにほぼ全てのポテンシャルアベレージは劣っているかもしれない。しかしそんな人間でも魔族に勝っている物があるのだ。それは人間という單一種のみで國という形態を形成できる“数”。それこそが人間達最大の武器であり、魔族には補えぬ弱点なのだと隼人は考えている。

『戦いは数』

誰言つたのだつたか戦争というものをよく表している言葉ではないだろうか？そしてブルフグスの報告によれば、マグガディア王は国のはぼ全軍でもつて進撃しているらしい。その数は四万。マグガディア王国の全人口が十六万であることを考えれば、実にその四分の一が動員されていることになる。これだけでもレード王の本気の程

という物がよくわかる。対する魔族達の戦力は一万二千。マグガディア軍の半分にもみたないのだ。いくら魔族の個々の能力が高いとはいえこれでは数の暴力の前に呑み込まれることになるだろう。そう考えての軍整備を急ピッチで行っているのだが、なれぬ戦い方をするという不安材料が生まれる事実に、隼人はリリイのように樂観視することができないでいた。

せめてもの救いは、膨大な数の軍となつたが故に全体の進行速度が遅く、ホトロゼナン山脈にたどり着くまでに時間がかかるということか。

「とにかく今はマグガディア軍がここに来るまでに、できる限りの準備をしておくことか……」

窓から視線を戻し、視界にリリイが入ったところで視線を逸らす。先ほどからまともに自分の方を向こうとしない隼人に、リリイは首を傾げる。

「そなた、先ほどからどうしたのだ？」

「いや、べつに……」

表情が赤くなつてゐること自覚する隼人は、再び窓の外へと視線を移して彼女に顔を見られぬようにする。

なぜ彼がこのようなことをしているのか。当然のようにその理由はリリイ自身にあつた。

隼人が先日とは違う服を着ているように、彼女も奴隸として与えられていたものから自身の私服に着替えていた。そしてその服装がそもそもの原因であることに彼女は気付いていなかつた。

彼女の服装を説明すれば以下の通り。ある竜種の革を使用しているというその服は、身体にピッタリと張り付き出るところがしっかりと出て引っ込むところは引っ込んでいる彼女のボディラインを強調し、彼女の背には一対の黒翼があり腰の後ろからは尻尾が生えていため背中が大きく開けられ、袖もなく首筋から肩、背中にかけてその透き通るような白い肌がさらけ出されているのである。おまけにその生地の色が黒いためよけいに白い肌を強調している始末。さらにその服の形状は隼人の感覚からしてみればレオタードや水着のそれで、かなり急角度のハイレグとなつており、そこから延びる両足の白さも同様に強調されている。一応腰回りはスカートのような飾りが付けられてはいるが、待たした数センチもないうえに前が大きく開かれ、非常に薄いレースが申し訳程度に隠すだけとなつている。そしてその布飾りも実際はガーターベルトのようなもので、そこから伸びたりボンのようなそれが腿の半ばまでを覆う黒いタイツを吊している。

元の世界でもこの世界においても女性のここまで際どい姿を見たことの無かつた隼人にとって、彼女の姿は刺激的すぎたのだ。

「む、そうか。だが無理はするな。今のそなたは白龍連邦に住まう魔族の王なのだからな」

それだけ告げると持つてきた報告書を手にリリィは部屋を辞して出て行つた。それを見送つた隼人は盛大にため息をついて、備え付けの水挿しで喉を潤しテーブルに突つ伏した。

「あの服装、どうにかならんかなあ。ならないだらうなあ

あれには相当参つてゐる様子の隼人だった。

風を切る。そんな表現が生やさしく聞こえるような轟音が兵士の集まる中庭に響いた。音の主は巨大な金棒を手にしたライオックスで、現在彼の身体を包むのは十年ぶりに再会した家族から手渡された鬼族の伝統鎧だつた。鬼族は成人の儀式として一人で魔獣を狩りに行き、その狩つた魔獣の骨や甲殻などを使用して鎧を仕立てる。この鎧を仕立てることができて初めて成人と認められるのだ。

彼が身にまとう鎧はどう部分を茶色い甲殻で包み、両肩には竜種の頭蓋を肩当てとして使用しており、そのほかの部位も全て竜種といふ他では類をみない代物。それだけでも彼の実力が伺えるというものだ。そしてそれを証明するように轟音とともに振られる金棒に、見るもの全てが頬もしそうに視線を送つていた。

「精ができるな」

「ん、グリミナ将軍ですかい」

いつの間にかそこにいたのか、金棒を振るうのをやめた彼女の背後に立つたグリミナはどことなく不機嫌そうな表情のまま彼に近づいて行く。

「お前に聞きたいことがある。少し時間を貰つても？」

「別にかまいやせんぜ。クガーザ、パルティア。ちと行つてくるから後は頼んだあ」

「どこに？」という疑問は返つてこない。あるのはどこか諦めの混じつた了承の返事。二人と同じく奴隸闘士として捕まっていた者達も、二人と同様に諦めたような笑みを浮かべて領きあつていた。

そんな反応をされているとはつゆ知らず（グリミナは気付いていたが）ライオックス達は中庭から兵士の控え室へやつてきた。

進められるままにソファに腰を下ろすが、巨体の彼にとつて二人分のソファでも少々窮屈そうで、身じろぎするだけでも軋むソファに彼女は知らず知らず表情をひきつらせていた。

「で、俺に聞きたいことつてえと？」

席について早々にライオックスの方から口火を切られ、グリミナは表情を改めてライオックスに向きなおつた。

「ハヤト王についてだ……」

隠そうにも隠しきれない険の籠もつた言葉にライオックスは目を細める。それはまさしく獲物を観察する狩人の目そのものだった。

「大将が、いつたい何だつてんでえ？」

控え室の空氣が、まるで灼熱の業火がそこに現れたかのように変化する。

それを成すのはライオックス。隼人が彼らの王として即位したあの日より、グリミナなやシャナンクルが隼人に對していい感情を持つていなことを知つていたからの反応だつた。

「私は先王陛下に実力を認められ四将の地位に着いた。私の実力を認めて下さったネスフィアム陛下は恩人だつたのだ。それはシャナンクルも思いを同じくするところ。

しかしその陛下もハヤト王に討たれた。正直私もシャナンクルも今の王の即位に疑問を拭えていない。あの王が我々に何をもたらす存在なのかとな。

無論、これに私情を挟んでいいかと問われれば首を横に振らざるえないが……。

だからこそお前に聞きたい。今の王に忠誠を違つお前に。

お前と私達とでは確かにお前の方が付き合いは長い。とはいえるも半日足らずの差でしかない。それでなぜ忠誠を誓えるまでになつたのか、その理由を……」

ライオックスから発せられていた燃えるような気が抑えられ、彼は静かに目を閉じて今の言葉を反芻した。

彼が隼人について行くと決めた理由。それはマグガディア軍の將軍クルアカンとの戦いの際に彼と將軍との間で行われた遣り取りも理由の一つなのだろう。しかしそれが全てかといわれれば首を横に振る自分に気付く。ではなぜ自分は隼人に忠誠を尽くそうと思えるのか。

いくら考へても明確な答えは出でこない。だから彼は思つたことをなにも飾らずに口に出していた。

「わからん

「私は真面目に聞いているんだが?」

ライオックスの言葉に、今度はグリミナから絶対零度の殺氣が発せ

られる。殺氣を向けられたライオックスは、しかしその殺氣を気にした風もなく言葉を続けた。

「なんと言われようと分からねえもんはわかりやせんよ。ただ、この人は信じられる。命を懸けたつて悔いはない。そう漠然と思えたから忠誠を誓つた。ただそれだけですんで。俺は頭で考えて動くのが苦手でしてね、一々考えながら動くことより思つたままに動く方が生にあつてまさ。そうやって生きてきた俺の感がそう思つたからこそその忠誠なんで」

暫くのにらみ合いの末、グリミナは殺氣を治めると大きくため息をついて立ち上がる。

「わかった。お前のような奴そういうのならば、今の王とはそのような存在なのだろう。ならば私もしばらく様子を見るとしよう。あの王を認められるか否か……。時間をとらせて悪かつたな」

「いえ、それじゃ俺は失礼しやす」

控え室を出て行くライオックスを見送り、グリミナは彼が出て行ったのとは反対側の扉から隣の部屋へと移ると、そこで優雅に紅茶を楽しんでいたシャナンクルに向かいに腰を下ろす。

「前線の隊長ならともかく、指揮官にはあまり向かない男だということがよくわかつたよ……」

「ですが理屈をこねない性格の分、今の王についてもある程度収穫があつたこともまた事実ですわ」

「あのような野生動物のような男に慕われているんだ。それに足だけの物を持っているのは間違いないか」

部屋の隅に控えていたテックアルヴのメイドがグリミナの前に紅茶を出し、それに礼を言つて口を付ける。

「何人かに話は聞いたが、皆肯定的な意見ばかりだったな」

「そうですわね。となればやはり、今は様子を見る以外にありますわね。あなたが今、彼に告げたとおりに……」

窓から差し込む日の光が室内を赤く染め上げる。

今日もまた一日の終わりたる夜が来る。

「まさか、皆の中に温泉があるとは思つても見なかつたな」

皆の地下にある温泉から出た隼人は、温まり上気した身体に触れる空気を気持ちよく感じながら寝室へと向かっているところだつた。

「む、ハヤトか……」

背後から声をかけられ振り返ると、彼と同じく風呂上がりらしいリィが日中とは違い厚手のガウンを羽織った姿で近寄つてくるとこ

ろだった。

「リリイも風呂上がりか」

「つむ。捕まっている間は入れなかつたからな、ついつい長風呂をしてしまひ」

苦笑しながら横に並んで歩くリリイの肌は温泉で温まつてゐるためかほんのりと赤みを帶び、昼間とは別の意味で色香を発してゐる。それの色香に当たれ頬が熱くなるのを感じるが、温泉のせいだと無理矢理納得させて口を開く。

「下の世界では俺も風呂には毎日入つていたんだけどな。こっちの世界に来てから一年間は、風呂にはいることなんて無かつたな。マグガティアにはそもそも風呂といふ習慣は無かつたし、俺自身白龍連峰を西へ東へな感じだつたしな」

「ほお、ハヤトの世界にも風呂の習慣はあるのか。この世界では魔族や魔族と交流のある一部の人間や王族貴族ぐらいしか入らないのだがな」

隼人の言葉に興味を持つたリリイが食いついてくる。

「ハヤト、そなたの世界とこの世界に他にどのような違いがある?」

「違ひ、か。まず思いつくのは、やっぱり種族か……。俺の世界に魔族はいなくて、地球上で繁栄しているのは人間ばかりさ。だからこの世界にきて魔族を見せられた時は、本当に驚いたよ」

「ほお、魔族はおいらんのか……。ならば、この世界のように能力

や容姿の違いなどで争いが起つたりといふことも無もそつだな

羨ましい限りだ、と言つリリイに、隼人は小さく頭を振つた。

「いや、そう言つ意味ではやつてることなんてこの世界となんら
違いは無いさ。

こつちの世界でも肌の色違いがあるだろ？

俺の世界ではそれが差別の原因となつてたんだ。白人、黒人、黄色
人種でな具合にな。それは今でも一部の人達の間で続いててね、特
に白人と呼ばれる肌の白い奴らは黒人や黄色人種をして色有り（
カラード）なんて侮蔑する場合まである。

結局人間つてやつはどこに行つても些細な理由で人を分けたがるも
んなんだよ」

「だが全ての人々がそうというわけではあるまい？」

そなたは私やライオックス達を見た目だけで差別したりなどするま
い。

それが何よりの証拠ではないのか？」

「そ、う、だな。ありがと」

「礼を言われるようなことを言つた覚えはないぞ」

自然と互いに笑みを浮かべ、しばらく会話もなく廊下を歩いて行く
が会話が無いことへの気まずさなどもなく、心地よい沈黙に自然と
表情を綻ばせていた。

そして隼人が寝室として使つてゐる部屋がある階に着いたとき、二
人は廊下の向こうから何かが駆けてくる音に気づいて眉を顰めた。

「何事だ？」

「マグガディア軍が現れたという訳でもなさそうだし……」

夜風の舞い込む窓から外を見るが、闇夜に包まれたホトロゼナン山脈に異常はまったく感じられない。

足音が聞こえる方に対して片足を引き、念のためいつ何が起きてもいいよう臨戦態勢を整える。

「さて、なにが起きているのや……？」

暗い廊下をわずかに照らす燭台の火に照らされて、足音の主が姿を現した

しかしそれは漠然と予想していた物よりも遙かに小さく、そして一人が知る存在でもあった。

暗闇の中から飛び出してきたそれは、隼人のことを認めるや否や渾身の力で地を蹴り砲弾のごとき勢いで隼人の胸へと飛び込んできた。

「のあ、お、お前は……」

飛びつかれた勢いに思わず仰け反つてしまつた隼人にしがみつくのは、奴隸市場で彼が助けた狐の獣人の少女だった。

「この娘は……。グアラアンに任せて村にドワーフの村に避難させたはずだが……」

「それがなぜここにいるんだ?」

グアラアン^{ルガルウ}というのは先日奴隸市場で隼人に少女を助けてくれと懇願していた人狼族^{ルガルウ}の青年のことだ。元々彼は村で薬剤師の仕事をしており、戦う力が無いためホトロゼナン山脈の山頂付近にあるドワーフの村へと避難しており、そのときこの少女のことも彼に託したはずだったのだが……。

「最初のころからいやに懐かれておられたしの、まさかハヤトを探して戻ってきたのか?」

抱きつく少女に顔を近づけリリイが問いかけると、少女は隼人の腹部に顔を押し付けたまま口クリと頷いた。

「マジかよ…………」

少女の返答についつい天を仰ぐが、それでどうこうなるわけもなく、少女はより強く隼人にしがみつく。

「のおそらく、なぜハヤトのそばにいたがる。理由を教えてはくれぬか?」

「…………おなじ。このひと、わたしとおなじ…………」

消え入るような小さい声で告げられた言葉に隼人とリリイは顔を見合わせた。

同じ、などと言われても一体何が同じなのかさっぱり理解できなかつたからだ。

どこからどう見ても10歳前後といった風の少女に対し、隼人はすでに19才。どこも同じなどではない。性別も違えば身長も、ましてや体重など同じはずもない。髪の色だって黒と赤茶色と違っているのだ。そして種族など考へるまでもなく違う…………。

「ん？ そういうえばこの娘、種族はなんだ？」

種族が違う。そこまで考えて気付いたこと事実にリリイは首を傾げた。

「種族？ どこからどう見ても狐の獣人にしか見えないぞ？」

ピンと尖った耳にフサフサな大きなしっぽ。もとの世界においてはテレビなどでよく目にした狐そのものだ。

「きつね？ そのような名の生き物は聞いたことがないが？」

「え？」

思いも寄らぬリリイの言葉に驚きの声を上げて少女を見下ろした。少女は隼人にしがみついたままだ無言で見上げて来るばかりだった……。

「ふむ、見たこともない種族……か」

思わぬ事態に陥った隼人トリリイは、この砦一番の知者の助力を得

るため賢将と呼ばれしダロスの下を訪れていた。

隼人にしがみついて離れぬ少女をなんとか椅子に座らせ、その正面に座ったダロスが目を細めて少女を観察する。少女は逃げ出しあしないものの隼人の手を握つて離さず、不安と緊張に尻尾を大きく膨らませている。

「たしかにこのような特徴の種族はわしも聞いたことがない。人間の顔に獣の耳、何かと人のハーフのようにも思えるが、片親の種族がはつきりとせぬな。耳は尖り人狼族の物に似ているが、尻尾は全く違う。ルーガルウのような巻き尾ではなく、人虎族ティーグや人豹族レパードウオのような長くしなやかな尾でもない」

鱗に覆われながらも皺だらけとなつた手が、少女に断りを入れてから尾に触れる。

「ふむ、触れた感じではルーガルウの物に近いと言えば近いか。芯となる尾の周りに長い獣毛が生えてある」

「まあ、狐も狼も犬科の動物だしな……」

「む、きつねとな？」

隼人がどことなく呆れた感を出しながら呟くと、ダロスはそこにでた聞き慣れぬ固有名詞に反応する。

「リリイの話を聞いた限りじゃこの世界にはいないそうだったけど、ダロスさんも知らないんじや確定か……。

狐っていうのは俺の世界にいた犬や狼の仲間だ。こいつふさふさの尻尾と尖った耳が特徴的なね」

椅子に座る少女をよく見れば、彼女は以前着ていた奴隸の服ではなく白い着物に赤い袴、いわゆるところの巫女装束を身に纏っている。この世界に巫女服などあるのだろうか首を傾げると、またもやリリイの口から思わず言葉が発せられる。

「そういうえばこの娘が着ている物も見たことがないな。ハヤトは知つているか？」

「…………知つてゐる。少なくとも俺の生まれ育つた国には同じ物があつた」

「ふむ、これは興味深い。」ヒは一つ観てみるとするかの

ダロスは棚に置かれた宝石箱から幾つかの宝石を取り出すと、それを少女に持たせて呪文を唱えはじめる。その様子を不安そうに見ている少女は隼人の手をより強く握りしめた。

ダロスが行つているのは過去に隼人も受けたことのある物だつた。対象者資質やスキルを調べるための術式で、上位魔法の扱い手でも行使できる者がなお少ない高等魔法。

「物理属性資質はアンフリュクルー（やや柔らかく平均）、魔力量はC、魔力属性資質…………ほう、特異特化型とは珍しい」

この物理属性資質といふのは対象者生来の成長資質を指し、この少女を例にあげて説明すると、アンフリュ（やや柔らかい）と言つのが体の柔軟性や頑健性を示し、後者のクルー（平均）というのが対象者が力と速さ、どちらが成長しやすいかを示している。ちなみに隼人の物理属性資質はノアファイス（硬く速い）で、彼のように武器ではなく己の肉体をもつて戦う武闘家のような職に向いた物理属性資

質だと言える。この物理属性資質を初めて聞いたとき、まるでラーメンの茹で方のようだと思ったのは本人だけの秘密であった。

そして魔力量、魔力属性資質。前者については言わずともわかると思われるが、書いて字の通り保有する魔力量を示している。そして魔力属性資質というのが火水地風光闇と系統分けされた属性のうち本人と相性のいい属性を表している。この少女の魔力属性資質である特異特化型というのは先に記した六属性には当てはまらない属性等を示し、同じ特異特化型の魔力属性資質を持つ隼人等は魔法を扱えぬ代わりに異能力《異常再生能力》を得ている。

「特異特化型とは珍しいな」

感心したように腕を組み頷くリリイだが、それが胸を強調するように下から押し上げてているのは無意識のことなのだろうか？そんなことを考えながら視線を少女に戻し、強く握りしめられた彼女の手を優しく握り返してやる。

「ふむ、どうやらこの子は人ですらないようじゃな」

「どうこうことだ？」

聞き捨てならないダロスの言葉に目を細め、睨むような視線を送るが睨まれた本人は気にして様子もなく羊皮紙を手に取り、そこに魔力を流し込む。これは魔力の扱いに長けたものであれば行える特殊技能で、脳裏に描いたものを写す一種のコピー機のような物である。写しの終わった羊皮紙を受け取り、それに目を通した一人の表情が変わる。

「じい、これは……」

「間違いないでしょ。この娘はハヤト陛下と同じ来訪者じゃ」

羊皮紙に書かれた一つの単語『異能力』が表すのはまさしくその事実だけであった……。

「異能力『妖化』、動植物に人に近い姿を与える、その他特殊な力を発現させる異能力か……」

羊皮紙に書かれた説明文を読み上げ、隼人は盛大にため息をつく。ソファに座った彼の膝の上には、“子ぎつね”的姿に戻ったあの少女が丸くなつて眠っている。恐らくこの階にもこの姿で侵入したのだろう。

「異界者召喚儀式魔法は一百年前に一度失われ、数年前によくマグガディア王国で再現されたと聞く。当然あれを使えるのはマグガディア王国のみのはずであろう?しかしマグガディア王国が召喚した来訪者は今ここにいるハヤトだ。この娘が来訪者であるなどありえるのか?」

「リリイアネイラ様の疑問ももつともありますよ。しかしそれがあり得るのですじや。

サモン・エトランジエ事態原理などが解説された術ではござらん、

故になにが原因で起るのかはわかりませんが、儀式の結果その近くに別の来訪者が、それも人ではなく動物の来訪者が召喚されたと言つ話が僅かではありますですが存在します。

そして彼女の話では、この世界に着てから訪れた雪の季節は一回。ハヤト様が召喚された二年前の皆既日食と重なります。このことから考えて彼女が一年前にハヤト様が召喚された《異界者召喚儀式魔法》の際、同時に召喚された来訪者である可能性は大きいと」

「だから同じ、か……。」いつは一年間もたつた一人で生きてきたつてつてことなのか？」

そつと頭を撫でてやると吃驚したのか一度大きく体を震わせ、しきしきぐに静かな寝息を立て始める。

羊皮紙に書かれた異能力の説明によると、《妖化》には能力会得時から老いが非常に遅くなる、つまり不老とまではいかずとも長年益寿となるという。

召喚されて一年経つても姿が子ぎつねのままなのもそれが原因なのだろう。

「《異界者召喚儀式魔法》か、なんと残酷な魔法もあつたものだな

.....

子ぎつねを撫でる隼人の姿に、リリイは小さくうごぼす。

「ですな。歴代の来訪者達も同じ思いでありましたでしょう。

まあ中には死の間際に召喚され、第一の人生じゃと楽しんでいたノブナガのような来訪者もおつたものじゃが……。あやつのような来訪者は特別じゃしの」

何かを思い出し、いささかげんなりするダロスを無視し、リリイは隼人の隣に腰掛けると、子ぎつねを優しく胸に抱きかかえて背を撫でる。

「この娘にとつて、そなたはようやく見つけた同胞なのだな。なれば無理に引き離すのは酷というもの。少なくともマグガディア軍が近づくまではそなたのそばにいさせてやるが良からう。よいな？」

リリイの提案に小さく頷き、それを見たリリイは静かに笑みを浮かべる。

「しかしこの娘はそなたの同報とはいれつきとした女子、夜は私が預かるう。

部屋を与えて一人で寝かせるよりは寂しくないだらうからな

温もりを求めているのか、頭をリリイに押し付ける子ぎつねに苦笑しつつそう言って彼女は席を立つ。

ダロスに礼を言つて部屋を辞していく彼女を見送り、隼人は大きくため息を吐いた。

「まさか、俺以外に^{エトランジエ}来訪者^{エトランジエ}がいたなんてな……」

もしもあの時、自分が元の世界に戻ることができていた場合、あの子はどうなつっていたのか。間違いなくグアラアンが言つていたとおり、魔獣の餌にされていたはずだ。

その事実に怖気が走る。

「なあダロスさん。召喚されたの俺と彼女だけなのか？」

「…………わかりませぬな。わしの知る限り一度の儀式で召喚された

来訪者エトランジエは最高で一人。しかし昔は各地で儀式が行われていたことと、巻き添えで召喚された場所が儀式の場所から離れていたこと。そして必ずしも召喚されたのが人だけではなかつたことを考へると、ハヤト様やあの娘以外に召喚されている可能性も〇ではあるまいかと……」

「そりゃ……」

自分以外にも、あの子ぎつね以外にも同胞がいる。その可能性を聞いた時、彼は一体なにを思ったのか。それを知る術は無い……。

迎撃準備（後書き）

・グリミナ

32才
レバドゥオ

人豹族と人間のハーフ。異母兄に人豹族のブルフグスがいる。魔王ネスファイアムに剣の腕を買われ、四魔将の地位についた女傑。ネスファイアムに心酔、とまではいかずとも深く忠誠を捧げていたため、それを討ち取った隼人に対していい感情は持っていないが、一対一で魔王と戦い買ったという隼人に剣を向けることは、魔王の死力を尽くした戦いに泥を塗るのと同じ行為として自らを諫めている。そんな彼女であるが本質は公明正大を旨とし、配下からの心棒も厚い。勇者時代の隼人と剣を交えたこともあり、その時彼の首から下を吹き飛ばすという功績を上げているが、その後その死の確認をせずに引き上げたりと（普通は生きてるなどと思わないが）たまにうつかりとドジを踏むことがある。

物理属性資質：ノアピア（硬い強い）

魔力量：C

魔力属性資質：火闇《二重属性者》

・固有スキル《闇炎の理》

母親の生まれがとある邪神と呼ばれる者の巫女の一族で、グリミナには生まれついてその加護を受けている。

会議を終え天幕から外へ出たり、ゼルダは空を見上げて小さく舌打ちする。

「満の白月か、嫌なタイミングだぜ…………」

優しい光を振り下ろす丸い月。しかしこの月が登る翌晩からは魔族に力を与える満の赤月が三日も続く。

四十万の大軍である自軍がその程度のことでの敗れるなど毛頭も思っていないが、それでも普段以上の力を振るう魔族に対してどれだけの被害を受けるかと思うと胃が痛くなりそうだ。

「リゼルダ様」

名前を呼ばれて背後を振り返れば、そこには緑色のライトメイルに身を包んだ若い女性の姿があった。

リゼルダと同じ風を司る四将軍の一人、サリュアナだった。

二十そこそこという若さで今の地位についた王国一の使い手は、不安そうな表情を隠すことなく近づいてくる。

「どうしたんだ？ 上が不安がってたら下も意味なく不安を覚えることになるつて以前にも教えたはずだが？」

「すみません。ですがこの戦い、嫌な予感がするんです」

空に浮かぶ白い月に、彼女も彼と同じように明日から続く赤月のことを思っているのだろうか。

「…………とは言つても陸下の命令だ。俺らの判断で勝手に軍を退くわけにもいくまい。

それにそう心配するな。奴らは今魔王を失った鳥合の衆だ。元々組織だって動く」とのない魔族が、今更一丸となつて向かつてくるわけが無い。

そんな連中に我が四万の軍が負ける理由も無いだろ？

おどけたように肩を竦めてみせる。しかしサリュアナの表情が変わることとは無く、落ち着かな^{トランジ}白龍連峰の方を見上げる。

「もしかしてあの^{トランジ}来訪者のことを考えているのか？」

その考えが正しいと確信しているのかどこか呆れたよ^ウうと、サリュアナは表情を変えることなく小さく頷ぐ。

「彼は、私達の都合で家族や愛する者と引き離された。だといふのに私達は……」

「今更だろ？。儀式を行つ際にそれを止めよ^ウとしなかつた時点で俺達は同罪だ。それこそ同情する資格すらない。俺達が同情する」と事態が罪だろ？

同情するくらいなら儀式なんて止めるべきだったんだからな

馬鹿馬鹿しいとばかりに彼女に背を向ける。

「彼は今どうしているのだろうか？」

「さあな。あの数の魔族を逃がしたんだ、行き先は白龍連峰だろ？が、奴は魔王を殺しているんだ。快く迎え入れられることだけは無いだろ？。よくて白龍連峰を追い出されるが、最悪動くことが出来

ないようすに牢かどこかに張り付けられてるだろつな。ハヤトに普通の拘束は意味がないからな」

それだけ言つとリゼルダは自分のテントへと去つて行く。
サリュアナはそれを見送り唇を噛む。

「国のためとはいえ、私達がしてこることは正しいのだろつか……
……」

あの日、もとの世界へ帰ることができないと知つた時の彼の絶望に満ちた表情を思い返す度、彼女の胸に痛みが走る。
リゼルダが言うように、それが当然のように異世界者召喚儀式魔法ワザワザ・ソトラニジンを見守つていた彼女に、彼に同情する資格は無いだろつ。しかし召喚された彼の運命を思うと、自分達の行つた罪の大きさに潰されそうになる。

「もし、リゼルダ様の予想が当たつているのなら…………。
真にその場にあるべきは私達の方だ……」

満の白月が白龍連峰にかかる。

明日はついにその白龍連峰に攻め入ることになる。サリュアナは思考を切り替えようと頭を振り、それに失敗しながらテントへと戻つていった。

「いよいよだな」

月夜のテラスから見下ろす広場では、準備を整えた隊から山を降りて行く様が見える。

今日の昼過ぎ、マグガディア軍がホトロゼナン山脈の麓に天幕を張つているという報告がブルフグスによりもたらされた。恐らくマグガディア軍はそこを拠点に各山脈を制圧して行くつもりなのだろう。

さらに受けた報告では、連中は当然ではあるが隼人が王位に着いたとは夢にも思っていないらしく、魔王不在の統率のとれていらない内に攻める氣でいるらしく、警戒心も薄いらしい。

その報告を受けた隼人は即座に夜襲を行うことを決め、急遽夜襲の為に軍を動かし始めたのだ。

「奴らは油断しきっている。今は数で圧倒的に勝る奴らに大打撃を与えるチャンスだ。

だが奴らに大打撃を与えたとしても、こちらまでダメージを受けては元も子もない。役目を果たしたら速やかに撤収する事を徹底してくれ」

「わかった」

最後の部隊が出発するのを見送りながらの言葉に、鎧姿のリリイは静かに頷いた。

彼女の姿は普段着ている服とあまり違はない。例のレオタードのようなそれに胸元を守る胸当てに籠手を着け、鉄製のブーツを履くという軽装である。

「しかし、この奇襲に王であるそなたまで出撃する必要はあるのか？夜襲の成功の報をここで待つてもよいのではないか？」

隼人の身を案ずる言葉に、彼は頭を振りながら振り返る。今のはリリイの言葉通り完全武装の状態であった。完全武装といつても戦闘スタイルがスタイルのため、動きやすいよう軽量の胸当てや手甲をしているだけなのだが、それこそが魔王ネスフィアムと闘った時の姿なのだ。

「俺が全ての将兵に認められているんならうんなんだろうな。けど実際のところ、俺を王として認めているのはお前やライオッシュス、ダロスといった一握りだけだ。だから俺はより多くの皆に認められ信用を得るためにも大きな功績を打ち立てて見せなきゃいけない」

テラスから室内へと入り、彼のベッドで寝息をたてる来訪者エトランジエたる子ぎつねの背を撫でる。一瞬びくりと反応するものの、害意がないことがわかるのかすぐに静かな寝息を立て始める。

この子が来訪者エトランジエだと分かった翌日、この子ぎつねに名前を聞いたが逆に名前とは何かと問い合わせられたことを思い出す。

もとの世界ではただの狐であり、この世界に来てからもほとんど一人で生きてきたらしいことを考えれば、名前が無いのも当然なのかもしれない。リリイの提案で隼人が名付け親になることになったのだが、そこで自分のネーミングセンスの無さに愕然としたのを思い出し、少々陰鬱な気分になりかけるが、この後のことと思い無理矢理思考をそこから引き剥がす。

何にしてもこの子にまだ名前はない。この戦闘が終わったら、今度こそ名前を付けてやらなくてはと心に決める。

彼女おかげで自分がなにをすべきか、それが膽気にだがわかつた

ような気がする。そしてそれをちゃんとした形にするためにも、自分はこの戦いでより多くの人に認めてもらわなければいけないのだ。子ぎつねから手を離し、隼人は寝室を出る。リリイを引き連れて階段を上って行き皆の屋上へと出ると、そこには数頭の竜と武装した魔族が十五人ほど整列して待っていた。

「準備は？」

「はっ、じ命令があればいつでも出撃できます」

答えたのは戦闘で槍を持つ純潔の竜魔族^{ドラグクリフ}だつた。暗いため見た目では判別しづらいが、声の高さからいつておそらくは女性だろう。彼女の背後には同じように飛行能力を持つ鳥人族^{ショラミヨーカー}や鳥獸族^{ハルフォルク}、素早い動きが特徴の人豹族^{レバドゥオ}やデックアルヴ達が黒など闇に溶け込みやすい色彩の鎧を着て整列している。

「皆聞いているとは思うが、俺達はこれから麓で野営をしてくるマグガディア軍に奇襲をかける。

この奇襲は連中を倒すためのものではなく、確実に力を削ぐことが目的であることを胸に刻み込んでくれ。向かってくるならばともかく、逃げる敵を無理に追つて殺す必要は無い

そこで言葉を切ると案の定兵士達の中から不満の声や戸惑いの声が挙がる。今までの魔族の戦い方との違い故だろ？

「この中に狩りを行つたことのある者は？」

隼人の質問に兵士の半数以上が手を挙げ、その中の一人を前に呼び出す。

それは隼人の言葉に不満を挙げていたテックアルヴの一人だった。

「名前は？」

「ベ、ベラルです……」

不満を挙げたことで罰せられるのではないか、といつ様子の彼に苦笑しながら質問する。

「ベラル、一筋縄でいかない獲物をしとめる時まずどうする？」

「え、狩り、ですか？」

「そうだ。獲物だつて馬鹿じやない、ただ狩られるわけじやないだろ？」「うう

「そ、うですね。罠へ追い込んだり、繰り返し攻め立てて体力を奪うとか……」

「それと同じだと思え。マグガディア軍という獣の体力を、反撃能力を奪い確實に仕留めるための攻撃だと」

隼人は満足そうに頷いて言葉を続けた。

「今回の奇襲で重視することは奴らを確實に弱体化させること。敵を殺すことよりも物資を始末すること重視しろ。物資を破壊し使えないし、食料を燃やして食べる物を奪つてやれ！」

狩りを例に出したことが効いたのか、全員が納得したわけではないにじり不満の声は少なくなつた。

「いいな、退き際を間違えるな」

ベルルを列に戻し再び一同を見回して告げる。

「いいな、これは命令だ。絶対に死ぬな。

そのためにも退き際を間違えるな」

隊長らしき先ほどの竜魔族の女性に目配せし、それを受けた彼女の命令で飛行能力を持たない者達が竜に騎乗して行く。
隼人もリリイに一頭の雷竜の下へと連れられる。

「ヒュートウ、またそなたと飛べることを嬉しく思つぞ」

リリイが下ろされた雷竜の首を撫でると、ヒュートウと呼ばれた雷竜は嬉しそうに口を細め、背中に設けられたら鞍に乗りやすいようにと身体を低くする。

「リリイの竜なのか?..」

「うむ、卵のころから私が世話をしてきたからな。有る意味、息子か弟のようなものだ」

先にヒュートウの背に乗つたりリイに手伝つてもらい、隼人も彼女の後ろへと座る。鞍につけられたベルトで身体を固定して号令を発した。

「行ぐぞ!」

号令への返答は大氣を叩く幾つもの翼の音。

ヒュートウを先頭に皆の屋上にいた者達が次々と月夜に舞い上がる。

風を切り空を飛んでいることに少なからずの高揚を覚えながらも、隼人の意識はこれから行われる戦闘へと向けられる。

僅かな月星の光が注がれる暗闇の中、遠くに小さく見えるマグガテイア軍の陣地へ向けて、彼らは空を駆けた。

見張りの兵が一番最初に知覚したのは田を焼き尽くさんばかりの光だった。

とつさに田を底うこともできずに次の瞬間には轟音が耳を突き抜け、遅れてやつてきた衝撃に地面に転がされる。

突然の出来事になにがなんだかわからない兵士は、それでも緊急事態であることは理解したのか身体をふらつかせながらも立ち上がり、腰の剣を引き抜いた。直後生まれる灼熱感は一体何だったのだろうか？

自身の胸元、いやこれは体内だろうか？

胸の奥からこみ上げた何かを口から吐き出し、見張りの兵士はその生涯を終えた。

事切れた兵士の身体から剣を引き抜き、ベラルは頭上を見上げた。そこでは彼をここまで運んできた火竜の姿があり、彼と同じように運ばれてきた仲間たちが地面へと飛び降りるところだった。そして敵陣のさらに奥の方では、この場所にあつた篝火に雷撃のブレスを放った雷竜が、その身を地面すれすれにまで降ろすのが見える。おそらくあの竜に乗っていた人間の魔王が地面に降りようとしているのだろう。

つい先ほどのことと思い出し複雑な気分になる。

ベラルの兄は魔王ネスフィアムの居城の兵士の一人だつた。そのたつた一人の兄弟の死が伝えられたのが一週間ほど前。今の王が勇者として城に突入したとき、その前に立ちふさがり命を落としたという。

それを聞いて、当然彼は隼人のことを憎んだ。そして今も彼を憎む気持ちはある。しかし先ほど間近で彼の姿を見たとき、その気持ちが揺らいだ。正確にはその目を見たときだ。

デックアルヴはリヨースアルヴと同じ様にランクBの『精霊対話』を種族スキルとして持つている。それ故に見えた彼を取り巻く精霊の姿。孤独と後悔を司る名も無き精神精霊、怒りや決意、激情を司る精霊が彼の周囲を取り巻いていたのだ。そして通常ではあり得ない数の孤独と後悔の精霊達はそのまま彼の孤独感、後悔の大きさを表している。

だというのにともにある正反対の質を持つともいえる激情の精霊は？隼人は怒っているわけでも激情に駆られているわけでもなさそうなのだ。ならばあの精霊は彼の決意の表れなのか？ならば何の決意なのか？

あれほど大きな後悔を背負いながら、いつたい何を決意したのか。ベラルはそれが知りたくなった。兄を殺したあの王がなにを後悔しそのうえで何を決意したのか……。

ベラルはそこで思考を止める。今いる場所は戦場なのだ。余計なことに考えている場合ではない。

ベラルは目の前のテントに剣を振るい、布を切り裂き中を確認する。運良く彼が着地した場所はマグガディア軍の食糧を保管しているテントの前だつたらしく、それを確認した彼は革製の籠手に唯一装飾品のようにぬめ込まれたルビーに触れる。

「出番だぞ、サラマンドラ」

その呼び声に応えてルビーが赤く煌めき、そこから全身が青い炎で構成された蜥蜴が現れる。

『精霊対話』のスキルを持つ者のみが扱える精霊術。彼は精霊術を扱う精霊師の一人なのだ。

ベラルの頼みに答えてサラマンドラが地を駆ける。たつたそれだけでテント内の食糧は燃え上がり、そのまま直ぐにテントそのものを業火で包み込んで行く。

ここまで燃やせばちよつとやそつとでは消すことはできないと判断し、ベラルはサラマンドラを呼び戻す。近寄つただけで食糧を燃やすほどの高温を放っているはずが何でもないよう肩に乗せると、ベラルは次のテントへと走る。後一つか三つも燃やせば十分だろうと、こことは違う場所で仲間達が同じ様に成果を上げているのを見ながらそう思った。

マグガディア軍の陣地はホトロゼナン山脈から流れる川のそばに作られていた。

「おー、なんだよありやー！」

「ゾゴンだー・ゾゴンの襲撃だー！」

川で見張りをしていた兵士や、ちよつと水を汲みに来ていた兵士達は、突如襲いかかった音に一斉に振り返った。そして見た物は燃え上がる陣を眼下に夜空を舞うゾゴンの姿だった。

「なんでだ、何でこんなとこにゾゴンがいるんだ！奴らの餌場は北の平原のはずだろー！」

見張りの兵士は武器を手に陣へと戻ろうとして、ふとつい今までそばで騒いでいた仲間の声がないことに気づく。

「ゾゴンという存在に恐怖を覚えているのは自分も同じであるが、今燃えているあそこには仲間がいるのだ。それを救出しなくては。そう思い仲間に振り返り、彼は見た。つい今まで騒いでいた仲間達が田舎鳥の早贅の「」とく槍に突き上げられている姿を。

「な……ー？」

そしてその槍を持つ魔族の姿に身体が硬直し、それが致命的な隙となつて彼を襲つた。

「まったく恐れ入つたな」

槍を振るつて血を払うと魚人族の男・ジャウラは目の前に転がるマグガディア軍の兵士を見下ろす

「ええ、最初は何を言つているのかとも思いましたが、確かにこれは効果的なようです」

共に川から上がった水魔族の女性、ジャウラの相棒のネリアシユは混乱状態に陥つていてマグガディア軍を見ながら同意する。

「たしか俺らの仕事は、奴らが落ち着きを取り戻したときに背後から一当てすることだつたな」

総勢五十人からなる魚人族と水魔族の混成部隊を率いることになつたジャウラは、この部隊を編成させた新しき魔王の知恵に感心する。

彼らはこの奇襲が決まる前からこの部隊の編成を行つていた。それは今回と同様に川からの奇襲を行うことを考えていたのだろう。彼もその仲間も戦うとすれば如何に自分達のテリトリーに引き込むか、それか他の仲間に混じつて真っ正面からぶつかることしか考えたことがなかつたため、この戦い方は非常に新鮮な物だった。

最初は自分達だけでわざわざ敵のテリトリーに突撃することに不安を覚えていたのだが、今の敵の状態を見ているとその不安はいくらか解消していた。むろん今でも多少の不安が有ることに変わりはないが、突然のことに対する敵の混乱ぶりを見ればそれもそこまで心配することでは無いように思えてくる。

「一当てといつてもやる」とは彼らとあまり変わらないことを忘れないで下さこよ?」

「わかつてるよ。ちょっとつづいて反転。テントに火を放ちながら川へと撤退だろ?」

新しい陛下にも生き残ることを優先しろと言われてるんだ。余計な欲だして死ぬなんて馬鹿な真似できるかよ

彼の言葉に同意するように仲間達も頷き、それに満足したのかネリアシュは引き下がった。

「それじゃ俺達はもう少し様子見をせてもらいますか」

ジャウラの不適な笑みを浮かべながらの言葉に全員が頷いた。

「くそ、一体どうなってるんだ!」

各所から上がる火の手にリゼルダは苦々しげに怒鳴り声を上げる。専用のテントの中で寝ていた彼は突然の爆発音で目を覚ました。鎧も着けずに飛び出した彼が見たのは頭上を飛びすぎて行く火竜の姿だった。

そしてさらに彼を襲う熱気に彼らの陣が燃えていることに気付かされた。

「リゼルダ様！」

「サリュアナか！」

声に振り返ると思ったとおりの人物が駆けてくるのが目に入る。こちらは寝ていなかつたのか鎧を着け、得物の弓を手にしている。

「何が起きた！」

「襲撃です！」

先ほどドラゴンの背から魔族が飛び下りるのが見えました。まさか魔族が夜襲を仕掛けてくるなんて……

「くそ、油断していたな。

連中はなまじ俺達よりも強え連中が多いからこういつ手に出るなんて考えもしないって聞いてたんだが……」「

「私も魔族が夜襲や奇襲を仕かけて來たと言つ話は聞いたことが……。

とにかく兵を集めて事態の収集を……！

「サリュアナ、どうした……」

表情を驚きに固めて自分の背後を見つめる彼女にリゼルダは訝しげに背後を振り返り、そこに思わず姿を認めて言葉を失う。

「この間の晩は世話になつたな。

それとサリュアナは久しぶりっていうべきか

テントを燃やす炎に照らされ、マグガディア王国の元勇者祭隼人が姿を現したのだ。その背後にリリイを従えて対峙する隼人に一人は自分達が幻を見ているのかと動きが止まる。

「…………お、お前があの魔族達を率いているのか？」

「ああそうだ。俺が白龍連峰の魔族達を率いている」

やつと絞り出された問いに答えた隼人は一人に順に視線をやると、静かに口を開いた。

「この夜襲はほんの挨拶代わりだ。

王に伝えておけ、マグガディア王国は俺が、白龍連峰の魔王ハヤトが滅ぼすとな

その言葉にサリュアナはビクリと身体を振るわせる。彼の言葉から滲み出る殺氣を肌で感じ取つたから。

彼女はたしかに隼人をこの世界に呼び出したことを悔いていた。自分達のせいで彼の人生を歪めてしまったと。それでも彼女にとつてその言葉は見逃せるものではなかつた。彼女にとつてマグガディア王国とは何物にも代え難い故郷だからだ。

故に彼女は気付いたときには、無防備にも自分達に背を向けた隼人

に弓を向けていた。流石はその若さで風の将の地位に就いたと思われる素早く綺麗な動きで矢を構え弓を引いた彼女は間を置くことなくその矢放っていた。

空気を引き裂き飛ぶ矢に、隼人は反応することもできずに胸を貫かれた。

「ぐつ！」

「ハヤト！」

隼人のうめき声でそれに気付いたリリイは、素早く隼人の背から矢を引き抜き腕を振るう。

呪文を紡ぐこともなく完成されるのは闇属性下位攻勢魔法。魔力で生み出した闇の魔弾はまるでショットガンの「ごとくサリュアナ達に襲いかかった。

「ちいっ！」

サリュアナとリリイの間に身を割り込ませたりゼルダのタワーシールドに防がれる。

「ちっ、背後から仕掛けてくるとは思ってたけど、まさかサリュアナの方とはな」

油断したと口端から垂れる血を拭いながら振り返る。背から貫かれた傷はリリイが矢を抜いたことすでに《異常再生能力》が完治させている。

周囲を見回し陣の様子を探り、未だマグガディア軍が混乱のさなかにあることを確認すると、構えをとりながらリリイの前に出る。

「なら、もう少し時間を稼いでいくか」

「そうはさせません。マジリハヤト、あなたはここで討ち取らせていただきます」

サリュアナが第一矢と三矢をほぼ同時に放ち、隼人はそれを拳で打ち払う。その隙をついてリゼルダが魔法で凍らせた地面を滑つてチヤージを敢行し、突き出されたランスを脇に掠らせながらも回避する。

そして回避した隙を狙つて矢を放とうとするサリュアナにリリイが光弾と闇弾を放つて牽制する。

「ふん、そなたら」ときにハヤトをやらせはせぬよ

「貴女は、魔王ネスフィアムの……。まさか父親を殺した勇者につくとは思つても見ませんでした」

挑発するようなサリュアナの言葉に不機嫌そうに眉をしかめると、早口に呪を紡ぎ掌の上にバスケットボール大の火球を作り出す。

「何を言つかと思えば……。もとより魔族は力持つ者が頂点となる力社会。父が敗れた以上は勝者たるハヤトが王の地位に就くのが自然の流れ。

そなたらこそ無理矢理召喚したハヤトを騙し利用した罪、その身に刻むがよい！」

「つー？」

リリイの言葉に動搖を見せたサリュアナに火球が放たれる。

表情を歪めながら、魔力を込めた矢を火球へと放つ。魔矢は火球を貫くも一瞬で焼失し、貫かれた火球もゴルフボール大の小さな球となつてサリュアナの周りに降り注ぎ、周りを炎に囲まれる。

「しまった！？」

自身を囲む炎の熱気に顔をしかめながら、サリュアナは火の勢いの弱いところへと飛び込んで炎の囲いから脱出する。

硬い物を殴りつける音とともにリゼルダの身体が地を滑る。盾で受けた隼人の蹴りの威力に舌打ちし、リゼルダは再び槍を構える。

「サリュアナ、大丈夫か？」

「はい、しかしこのままでは……」

「ちつ、他の連中は何してんだ。報告も何も回つてきやがらねえ」「

盾を構えるリゼルダの背後からサリュアナが矢継ぎ早に矢を放つ。しかしそれはリリイの操る風の壁に散らされ何にも刺さることなく地に落とされる。

「リゼルダ將軍、サリュアナ將軍！！」

「やつと来やがったか！」

炎の向こうから数人の兵士が駆けてくるのを見た隼人はリリイとともに大きく後方へと飛び退る。

「将軍、魔族が…………！」ここまで！？」

口早に報告しようとした隊長らしき兵士が隼人に気付き、兵士達は一斉に武器を構える。兵士達の中には鎧を着けていない者もあり、寝起きからそのまま飛び出してきたことを伺わせる。

「リリイ退くぞ」

小声でそう告げられたリリイが笛笛を吹くと、頭上を旋回していたヒュートウが一人の背後へと着陸する。目の前に現れたドラゴンに兵士達が動搖するが、リゼルダが一括し逃げ出す者は出ない。サリユアナが最後の矢をヒュートウに掛けて放つが、それはヒュートウ自身が放った雷撃のブレスに撃ち落とされる。

隼人とリリイは素早くその背に飛び乗り、二人が乗ったことを感じたヒュートウは即座に空へと舞い上がる。

「レーデに伝えろ！首を洗つて待つてろとな！」

空へと登る雷竜の背からそれだけ告げると、ハヤト達は他のドラゴンと魔族を引き連れ飛び去つて行く。

「い、今のは勇者ハヤト！なぜ彼が魔族と一緒に！？」

兵士の一人が飛び去る隼人に気付き悲鳴に近い声を上げる。

「奴がマグガディアを裏切ったのは周知の事実だ。誰と一緒にいたところで不思議はない。まあ、その“誰”が魔族だったのは俺も驚いたが……」

「それよりも、今の状況はどうなつてますか？」

「は、はい！」

現在各所で上がっている火の手は魔族の手による物と判明、その魔族達は飛行能力を持つ者は空に逃れ、それ以外はホトロゼナン山脈へと逃走！

大半の兵は火事の消化に掛かり切りの状態です！」

「今動ける兵は」

「混乱のため正確な数はわかりませんが、ここにいる以外にも隊長各の者が兵を集めています！」

「わかつた。お前達は他の隊長各に連絡を入れて至急一、三小隊分兵を集めろ。

サリュアナ、集まつた兵を連れて逃げる魔族を追撃しろ。さすがにやられっぱなしじゃ志気に関わる」

「は！」

「俺はこのまま消火の指揮をとる。そつちは頼んだぞ」

「わかりました」

伝令のために散つて行く兵士を見送り、サリュアナも兵を集めに走り出す。

「さて、俺は消火に移るわけだが……。
ちつ、川の水を使うしかないか」

川へと向かう道すがら、兵に指示を出しながら走るリゼルダ。
しかしそんな彼らをあざ笑うかのよう川の方から雄叫びがあがる。

「今度は一体なんだ！」

半ばやけくそ氣味怒鳴つた彼が見たのは、およそ五十人ほどの魔族の群れだつた。魚人族^{シラカーラ}や水魔族^{フィシャール}で構成されたその群れは、手に武器と松明を持つてようやく当初の混乱から立ち直りかけていたマグガディア軍の中に飛び込み、たちまちマグガディア軍を再度混乱の坩堝へと叩き込む。

この再度の混乱によりマグガディア軍は消火活動は致命的な遅れをとることとなり、持ってきた物質、食料の八割を失うこととなつた。さらに人的被害も甚大で、死者の数こそ四百人ほどと全体の1%ほどだったものの、火傷などの負傷者の中で重傷を負つた者は約二万五千人と全体の半数以上に上ることとなつた。

「将軍、敵を補足しました！」

「全軍突撃！敵を逃がさないで下さい！」

兵士の声に前方を睨みつけるサリュアナの目にも月明かりの下を走る敵の姿が見つけられた。

矢を補充できなかつたため置いてきた弓の代わりに、敵に近づかれた時に使用するレイピアを掲げ、なんとか揃えることの出来た五十人の兵士に命令を下す。

それに答えた兵士達が雄叫びを上げて逃げる魔族の背中掛けて走り出す。

しかし彼らが最後尾を走る魔族に追いつくよりも早く、前方の岩場から雨のよつな矢が降り注ぎ、運の悪い一人が喉に矢を受け息絶える。

「な、全軍止まれ！」

再度サリュアナの下した命令に足を止めた兵士達は闇夜に紛れて放たれる矢に後ずさる。

盾を持つ兵が前に出て、それを構えて矢が降り止むまで耐えるが矢が止む頃には追っていた魔族は見失い、悔しさに歯を食いしばる。

「サリュアナ将軍……」

「悔しいですが退きます。このまま追つてもあの矢の雨に討たれるだけです」

先の矢に倒れた仲間の死体を回収してサリュアナ達は引き上げて行つた。

・シャナンクル

百二十四才

リヨースアルヴの女性であり、前魔王ネスフィアム配下四魔将の一
人で妖将の地位に就いていた。

稀代の精霊使いであり、平時は常にデックアルヴのメイドをそばに
侍らすレズビアン。グリミナ同様、ネスフィアムには召し上げて頂
いたことに恩義を感じ強い忠誠を捧げている（レズであるがネスフ
ィアムになら抱かれてもいいと思つてゐるほど）。ネスフィアムの娘
であるリリィアナエイラのことは敬愛すると同時に“女”としても見
ることがあり、ネスフィアムを殺したことと合わせて、よくそばに
いる隼人に対していい感情を持つてはいない。

物質属性資質：フリュアンフィス（柔らかいやや早い）

魔力量：A

魔力属性資質：風

・種族スキル『精霊対話』

ランクS

リヨースアルヴとしての種族スキルである『精霊対話』だが彼女の
資質と修業によって最高ランクのSにまで高まつてゐる。

滅亡

マグガディア軍への奇襲を行つた翌日。隼人はブルフグスよりもたらされた報告に一瞬耳を疑つてしまつた。

「マグガディア軍が、撤退？」

「それは本当なのか？」

同じ思いなのだろう、ともに報告を聞いたリリイも信じられない様子で聞き返すが、やはり返つてくる報告に変化は無かつた。

「原因は分かるのかの」

「原因は簡単だ。昨晩の奇襲、あれによる被害が大きすぎて戦いどころじゃなくなつたからだ。

物質の大半は消失し、死者こそ少なかつたが重傷者は全体の半数を超え、負傷者に至つては……。無傷の者を探す方が大変なぐらいだ。これを受け水と風の両将は撤退を決め、昼過ぎにはこの地を離れるはずだ」

「まさか、あの奇襲がこれほどの戦果を上げるとは……。

じい、私の記憶違いでなければこれほどの大勝利は白龍連峰に魔族が住み始めて初めてのことなのでは？」

「うむ、それどころか有史以来百にも満たぬ寡兵で四万の軍勢を擊退したという話は有りませぬな」

百にも満たぬ寡兵。たしかにその通りである。

しかし。

「たったあれだけの数で出来たのは偶然だ。奴らの警戒がもう少し高ければそこまでの被害は出てなかつたはず。今度のようないつは二度と無いと思つておけよ。

それよりブルフグス、リティブルにはどれだけ兵が残つている?」

一応、釘を差しながらブルフグスに問いかけると、彼は戸を開じて何かを考えた後に答える。

「マグガディア軍は今度の遠征を短期間かつ確実に成功させるためにほぼ全戦力を注ぎ込んできた。おそらく首都には千も残つていればいい方だろう。各地の都市にしてもリティブルを超える数の兵は残つていなければだ」

「ありがとう。ダロス、マグガディアに今撤退中の軍を受け入れられる都市はどれだけある?」

「首都リティブルを除けば二つじゃな。

近いのは都市でコーラル湖の畔にあるジヨラハル。ここから一日の場所じゃが、今のマグガディア軍の状態なら三日から四日はかかるじゃろ?」「

彼らが囲むテーブル上に広げられた地図に記された場所を確認し、隼人は小さく頷くと、ホトロゼナン山脈から首都リティブルを結ぶライン上の一地点。マグガディア王国のほぼ中心ともいえる場所を指差した。

「撤退中のマグガディア軍よりも早く、こちらの全軍をこの地点に輸送することは可能か?」

無茶な話である。マグガディア軍がジョーラハルに立ち寄ることを考慮したとしても、万を越す軍を先回りさせるなどどうやつたら出来るというのか。

しかしダロスは顎に手を当てて思案すると、なんと条件付きなればと首を縦に振つて見せた。

「どれくらい早く輸送できる」

「準備に一日かかりますが、準備さえ整えば一瞬で」

「よし、ならば…………！」

隼人の口から無謀ともとれる命令が発せられる。

この世界の歴史上初めての魔族による大規模軍事行動が始まった。

コーラル湖はマグガディア王国にとつて貴重な財源の一つである魔珠の产地である。魔珠というのはノロル貝という貝からとれる魔力の籠もつた真珠で、魔結晶と並ぶ魔術補助具の一つとして知られている。理由は解明されていないがノロル貝はコーラル湖のみに生息する魔獸であり、性格は極めて温厚。すくなくとも過去百年ノロル貝が人を襲つたという報告は出でていない。

このノロル貝の精製するため魔珠を目的として造られた都市が繁栄

しないわけもなく、マグガディア王国でもリティブルに次ぐ、または比肩する都市に成長している。そんな都市に配備される兵の質も量も本来ならば他の都市と比べられる筈もないのだが、今度の遠征ばかりはそうも言つていられなかつた。レード王の命により兵の九割が連れてゆかれ、過去最悪ともいえる警備状況。そんな状況で空と湖から襲いかかる魔族に抵抗することは事実上不可能であつた。

「まさか、遠征軍が敗北していたとは…………」

水中と空からの強襲。警備兵は瞬く間に制圧され、敵将から告げられる先の奇襲の結果にジェラハルの領主は力無く椅子に倒れ込む。告げられた情報の真贗を確かめる方法は無く、しかし眞実であれ遠征軍に力が残つていないことは明白。例え虚偽であつてもそれならば当面ジェラハルへと戻つてくることはなく、結局今の彼らに魔族軍に抵抗する力はなく領主は降伏すること決意。湖畔都市ジェラハルは都市、魔族どちらにも対した被害を出すこともなく白龍連峰の魔族達の支配下に下ることとなつた。

そしてその翌日。マグガディア王国中央に広がるカナート平原に魔族軍一万が突如として現れる。行進する彼らの背後には大規模な空間の歪みが発生し、そこはホトロゼナン階と繋がつていた。

「まさかあの時の魔法でこれだけの数を移動させられるとはな……」

自分で命令しておきながら呆れたように呟く隼人に、同じ様に呆然としたリリイが同意する。

…

「じいが大陸でも五指に入る魔導師だとは知つていたが……、まさかこのようなことまで」

彼らの視線の先では額に脂汗を滲ませながら呪文を唱え続けるダロスの姿がある。当然とはいえこれだけの術の維持は相当な重労働のようだ。彼の周囲では彼の部下である魔導師が十人、五つの頂点を抱く大規模魔力增幅陣を多重に展開することでダロスのサポートを行っているほどだ。

「これだけやつてるんだ、失敗なんて絶対に許されないな」

次々ともたらされる報告を聞きながら、次の指示を出して行く。隼人の指示に従い出立する中隊達。

この世界の中隊とは千人規模の軍を指す。十人で一小隊としてそれが十小隊で小連隊。その小連隊が十小連隊で中隊となり、中隊が五つで中連隊。中連隊が四つで大隊に至る。さらにその五大隊で大連隊となるのだが、大連隊を組める国などレントリシア大陸では僅か一国、メダクトリ帝国だけである。大概の国が三大隊、を揃えるのがやつとというのがこの世界の軍事状況なのである。

出立して行く中隊を見送った隼人は、全軍の輸送が終わったことで閉じられる空間の歪みを背に、目の前に並ぶ三中隊に向き合つ。すでにそこが定位置となつた左背後に立つリリイに頷き、軍へと号令を下す。向かう先はマグガディア王国首都リティブル。

魔族の手による史上初の侵略戦争が幕を開ける。

「なぜ、なぜだ……。なぜこのようになった……！」

レード王の悲鳴じみた叫びに答えることができる者はいなかつた。今の叫びが嘘のように脱力して玉座に崩れ落ちたレード王は一体どこで何を間違えたのか考え始める。

すぐに行き着くのはたつた今この都市を攻める魔族を率いる男の存在だ。
エトランジエ

来訪者エトランジエという圧倒的戦力を得るために呼び出された祭隼人とという男。マグガディア王国の勇者の地位を与えられながらも、国を侮辱し国賊となつた男。

あの男を召喚するために自分は、マグガディア王国はどれだけの費用を、時間を消費したのか……。しかしせつかく召喚した男は言うこと聞くことはなく、なんとか利用しようつとあらゆる手を使つたが、結果はこの様である。

マグガディア王国の滅亡。それが目の前に迫つてきている。自分達が召喚した男の手によつて。

そう、全てはあの男が原因ではないのか。

何度も繰り返される思考は常に隼人へと辿り着き、そこでループを繰り返す。

あの男さえ、あの男さえ召喚されなければと。

自分達が召喚したことを棚に上げ、レード王は隼人へと憎悪を募らせる。

そんなどこかに兵士が駆け込み、都市の門が破られたことを報告す

る。謁見の間から出られるテラスの向こうになるほど街へと雪崩れ込み、城へと向かってくる魔族の姿が見える。首都に残された兵士のほぼ全ては正面の城門へと纏めて配備されており、そこを破られたとあれば後はこの城まで連中を遮る物はなにも無い。

レード王は城へと進撃する魔族の中にいるだろう隼人へと憎悪にまみれた視線を送る。

あの男、あの男だけは許せぬ。

およそ半月ぶりのエルメティア城の廊下を歩く隼人は、城の各所を制圧したという報告を聞きながら謁見の間を目指す。

護衛としてついてきているのはリリイとライオックス、グリミナの三人。グリミナは名目上隼人の護衛だが、もしもの時は隼人よりもリリイを護るだろうことが容易く想像できてしまい。そのことに苦笑してしまいそうになるのを抑えながら、彼らは漸く謁見の間へと辿り着く。

本来ならば扉の前に並んでいる衛兵が仕掛けを動かすことで開かる巨大な扉を、ライオックスは己の臂力のみで軽々と開いてみせる。

「久しぶりだな、レード」

「無礼者っ、陛下に向かってなんて口を！」

室内にいた護衛の騎士が剣を抜く。数は十人と多いが、それは決して彼らにとつて有利となれる数では無かつた。

最初に向かつてきた騎士は、ライオックスが振るう金棒により一撃で絶命し、続く二人目も同様の末路を迎える。

逆の方向から同時に襲いかかる三人の騎士の前にグリミナが立ちふさがり、背負っていた大剣をまるで小枝のように操り瞬く間に惨殺してみせる。残る五人は武器を構えるも、リリイが唱えた魔法により闇に呑まれて事切れる。彼女がどうして捕まってしまったのか非常に疑問を覚えざるをえない強さである。

玉座に座るレード王の前に立つた隼人は、能面のような無表情で彼を見下ろす。拳を握るでも何を言つてもなく無言で見下ろした。

「何か、言つたらどうだ……？」

痺れを切らしたレード王の悲鳴のような声にも、隼人は動かず只見下ろす。

今彼の内心で何を思つているのか誰にもわからないだろう。ただただ無言で見下ろす彼にレード王の神經が保たなかつた。

懐から引き抜かれた短剣が、レード王の悲鳴混じりの叫び声とともに隼人の心臓目掛けて突き出される。

護衛としてついて来た三人が間に合う間合いではない。

短剣の切つ先が隼人に突き刺さる寸前、ようやく彼が動いた。ほんの僅か前にでれば傷つけられるかというギリギリのところで手首を掴んで短剣を止める。つかむ手に相当な力が込められているのか、レード王は悲鳴を上げながら手を離し短剣が床に転がる。

「リゼルダには伝えろと言つたが、それが届く前に滅ぼすことになつたな」

少しの感情も込めず呴かれた言葉はすぐそばにいたレーデ王の耳にも届かずには消えていった。

隼人の右腕が閃く。全身の力を身体を捻ることで最大限に使用した右の肘打ち。鈍い音とともにサッカーボール大の“何か”が宙を舞い、謁見の間に赤い雨が降り注ぐ。

この翌日、マグガディア王国の主要都市が全て魔族の手により制圧されることとなる。各都市に大きな被害を出すことなく、実にあつけない一国の滅亡劇は瞬く間に終幕を迎える。

湖畔都市ジエラハルに辿り着いた元マグガディア軍に届けられたら王家の滅亡に、軍を率いていた水と風の両将軍は一体何の冗談かと耳を疑つた。自分達が撤退を開始して僅か四日。その僅か四日の内に起きた事態に彼らはまだ混乱するばかりだったが、各地から次々に届く報によりそれが真実だと理解させられることとなる。

間をおかずして魔族軍から降伏勧告を受けた両将軍は自軍の状態、そして何よりも首都より送り届けられたレーデ王の生首を前にこれ以上の戦いは無意味と降伏を受け入れる。

帝国前歴五十一年、七月八日。

マグガディア王国滅亡。

マグガディア王国領全土が白龍連峰の魔族の土地となる。

同年、七月二十八日。

帝国の前身となる魔族の国、スカイル王国建国。

白龍連峰に君臨した初代魔王の名を冠するこの王国の初代国王マツリハヤト。

彼の物語はまだプロローグにすぎない。

滅亡（後書き）

・ブルフグス

65才。

前魔王ネスファイアムの配下だった人豹族レバドゥオの青年。魔族軍の密偵であり、情報収集のために常に世界を駆け回っている。剣将グリミナの異母兄。兄妹仲は良好。

物理属性資質：フリュフィズ（柔らかい速い）

魔力量：C

魔力属性資質：闇

・固有スキル『シャドウウォーカー』

影から影へと渡り歩く固有スキル。先天性スキルであり、祖先に闇の下位精霊族であるシャドウの特異個体を持つ者のみが低確率でえることができる。このスキルの使用条件は深夜であることのみであり、移動距離はスキル保持者の力量次第。

スカイル王国軍

マグガディア王国滅亡から半月。

隼人はホトロゼナン砦のテラスで一人月を眺めていた。季節は地球で言うところの夏。遠くから聞こえてくる狼系の魔獣の遠吠えを聞きながらこの一週間のことを思い返してみる。

この一週間は忙しくこの一年間でも最も時の流れが早く感じられた。

元マグガディア王国領土各地の制圧、領土の再分配、捕虜の処遇、近隣諸国、といつてもメダクトリ帝国とその属国とも言える小国達にスカイル王国建国の宣言等々。戦後処理のやることの多さに西東。この階に戻ってきたのも出撃以来だ。

元マグガディア王国領土の制圧は僅か一日ほどで終わった。これは国の護りである軍がすでにハヤト達に下っていたからだ。その後の再分配に関しても、こちらから監査役を送ることで今まで通り領地運営をさせることに決定したのだが、各地に送る人材を決めるのに相当時間がかかってしまった。

その理由の一つは白龍連峰に文官等の仕事ができる者が少なかつたことが挙げられる。もともと前魔王ネスフィアムがそういう仕事にも長けていたため補佐数人を側に置くだけで一人でこなしてしまい、そういう人材が育たなかつたのだ。そのため数少ない文官達にはそういう知識の無い隼人の補佐または代わりを勤めてもらわなければならず各地に送るわけにもいかず、白龍連峰に住まう魔族達の各集落に募集をかけ、さらにそこから信の置ける能有る者を選別しなければいけなかつたのだ。

取り敢えず苦労したおかげで有意義な結果となつたが、それでも時間がかかったのは事実だ。

そして捕虜の処遇だ。これも決定するまでにそれなりに時間がかかってしまった。何せ今まで敵同士だったのだ。あまり被害の出でない魔族側はともかく、元マグガディア軍側には恨みを持つ者が少からずいるはずなのだ。

敗軍の将となつたりゼルダとサリュアナを交えて話し合つた結果、取り敢えず兵役を解いた上で故郷に戻し、望む者はそのままスカイル王国軍に組み込むことに決定した。細かな条件などもあるが大ざつぱにはこのような感じであった。

その後メダクトリ帝国等近隣諸国に建国を宣言したのが四日前。昨日にはメダクトリ帝国から祝の品などが届きはしたが、使者からにじみ出ていた嫌悪感などを見ると、いつ敵に回つてもおかしくはなさそうだ。恐らくしばらくなれば様子見するつもりだろうと言つのがダロス達の意見であり、隼人もそれに同意していた。

と、そんな忙しい日々を送り終えて彼はこの眷によつやく戻つてくれたのだ。

「二年前まではただの高校生だったはずなんだけどな」

空手とかムエタイとかやつっていたが、まあ普通の範囲だらうと自己完結して部屋へと戻る。

現在寝室には彼以外にはいない。隼人よりも一足先に戻つてきているリリイにはリゼルダの方から連絡がいつているはずだが。あの子ぎつねの少女も今はリリイの下にいる。彼が聞いた話では隼人とリリイがいない間あの子ぎつねの少女は相当不安定だつたらしく、何度も簪を抜け出そうとしていたらしい。

隼人はテーブルに近づくと、そこに乗せられた生徒手帳を手にとった。エルメティア城から回収してきた元の世界からの持ち物だ。開いたページに挟まれていた写真は彼と悪友とその彼女、そして幼な

じみの四人でとつた物だ。

隼人はその写真を生徒手帳から抜き出し、脇に寄せると、生徒手帳とその他幾つかの持ち物を手に暖炉へと向かうと、それらを放り込み火をつける。

テーブルの上に残されたのは何かの役に立つかもしれない教科書と、生徒手帳から抜き取った写真が一枚。

隼人は静かにかつての持ち物が燃え尽きて行くのを見届けるのだった。

暖炉の中に入れた物が灰になつてしまらぐ。火も自然と消えてゆき、夜も更けたため床に入るかと思ったところで背後で扉が開く音が聞こえ振り返った。

「三日ぶりだの」

いつも通り過激なドレス姿のリリイが扉をくぐると、彼女の脚の合間をすり抜けて子ぎつねが駆け寄つてくる。途中でコマ送りのような唐突さで子ぎつねからあの巫女装束へと変わった少女は、駆け寄る勢いそのままに隼人に飛びついてくる。少女を受け止めた彼の服の裾を握りしめ、少女は服の上からでも鍛え上げられているのがわかるぐらい堅い腹筋に顔を埋める。

「ようやくしばしば落ち着けるといったところか。

この娘もそなたの帰りを今か今かと待ち望んでいたぞ」

「さうか、そうだな。すまないな待たせてしまつて」

少女の頭を撫でてやり、部屋のど真ん中に並べられたソファに腰を降ろす。

「それで決めたのか？」

考える時間ならそれなりにあつたと思つが？」

その問い合わせに一瞬首を傾げかけるも、彼の身体にしがみつく少女の存在がその意味に気付かせる。

名前を付けると言つてすでに三週間近くが経っていることに気付き、頭を抱えくなつた。

「ああ、トモヒ。俺の世界の、たぶんこの娘にとつても故郷である国にいた武将の名前だ」

「む、そなた。この娘に男の名を付けるつもつか？」

武将という単語に食い付く彼女に、言葉が足りなかつたかと苦笑しつつ問いを否定しつつ、昔教科書に載つていた巴御前の人物評について思い出しながら説明する。

「いや、その武将は男じゃない。巴御前つて言つて、たしか5、600年前に活躍した女傑だよ。

別に巴御前のみたいに強くなれつて意味じやないんだけど、巴御前のように強く生きればと思つてわ」

「さうか。

まあなんにしてもそなたが決めたのならばな

きょとんとした表情で隼人を見上げる少女・トモエに笑みを浮かべ、リリイはそつと暖炉に目を向ける。

暖炉の中にある季節外れの灰。隼人が何をしたのかは分からぬが、それには触れずに視線を戻す。

隼人に名付けられた少女が与えられた名前を呟く。

この二人の来訪者にどのような未来が待っているのか。それが幸在るものであればと静かに祈った。

隼人が皆に戻つた翌日。皆のある一室に隼人を含め六人の人物があつた。

赤黒い鎧に身を纏う、人豹族レパードウオと人間のハーフである剣将グリミナ。腰の辺りまで大胆なスリットの入つた蒼いカクテルドレス姿のリヨースアルヴ、妖将シャナンクル。

いつも変わらぬロープ姿の水魔族フィシャールの老人、賢将ダロス。

グリミナの異母兄である人豹族レパードウオの密偵ブルフグス。

ドラグクリフ シュラミゴーア
竜魔族と翼人族のハーフで前魔王ネスファイアムの娘リリィアネイラ。

そして隼人を含め建国したばかりのスカイル王国の首脳陣とも言える存在が一同に参じたことになる。

「…………問題だらけだな」

「なんだと…………！」

室内にそろつた顔ぶれを見回し、ついこぼれてしまつた隼人の言葉にグリミナが恥を上げる。

しかしその横に座るダロスは彼の言つところの意味を正しく理解して息を吐きながら確かにと同意する。

「政治に疎く武に偏る王に、軍務に関わる将が三人。俺とて暗部の人間であり、リリィアネイラ様もどちらかといえば武力の側の方。見事なまでに文に関わる者がおらんな」

ダロスと同じく隼人の言葉の意味を察したブルフグスは、言葉の表面しか捉えていない妹に長いため息を吐く。

片親が違うとはいえ、どちらの親もグリミナの幼き日に没してから、魔王ネスファイアムの兵士となるまで幼少の彼女を育ててきたブルフグスは情けなさでもう一度溜め息を、今度は隠すことなく盛大についてから隼人に頭を下げる。

「陛下申し訳ありません。この愚妹はあとで教育しておきますので今はご容赦を」

「な、兄上！？」

「別に気にするな。

ダロス、どうにかならないか？」

「さて、わしは今まで文武を兼業してきましたからな。有る程度のことはわかりますが……。やはり各部族の長にもう一度人材について打診するしか無いでしじうな」

「それまでは私達のほうでできる限りするしかないのぉ

「ダロス、すまないがしばらくは丸投げしちまつてもかまわないか？」

「しかたありますまい。ただし、陛下にも一刻も早く政治について学んでもらいますので覚悟してくださいされよ」

今後のことには頭を痛めながら承諾するダロスに礼を言い、隼人は表情を切り替えて一同を見回して会議を始めた。

隼人が皆に戻つてから一ヶ月が過ぎた。

ホトロゼナン^{皆内}に造られた竜舎の前で一人の竜魔族の男が鞍を付けられた山竜^{さんりゅう}『イクルロドン』の世話をしていた。

山竜^{イクルロドン}というのはこの世界の山岳地帯に生息する小型の竜で、羽を持たないため空を飛ぶことは出来ないが、強靭な後ろ足で一足歩行を行い、跳躍力と走行力に優れた竜である。

緑色の鱗を持つ軍用の山竜^{イクルロドン}の小さな前足を掴み、伸びすぎた爪を切りそろえる。

男はそれが終わると甘えてくる山竜^{イクルロドン}の顎下を軽く搔いてやって竜舎へ戻るよう促した。

名残惜しみながら竜舎へと戻る山竜^{イクルロドン}に苦笑しつつ、竜舎に戻ったのを確認して扉を占める。

竜魔族^{ドラグクリフ}の男は近くの柵にかけてあつたマントを羽織りながら、半年前ならば想像すらできなかつたに違いない自らの境遇に苦笑を漏らした。

「ヴェルベリオン様！」

「どうした？」

皆からかけてくる口の部下に、竜魔族^{ドラグクリフ}の男・スカイル王国軍三頭九将の一頭、騎頭将、ヴェルベリオンはいつもと変わらぬあまり感情のこもらぬ声で訪ねる。

三頭九将^{三頭九将}というのはスカイル王国軍の最上部である十一の位のことで、王である隼人の下に三頭将と呼ばれる三人。さらにそのそれぞれの下に合計九人の将を置くという形を取っている。

彼、ヴェルベリオンはこの三頭九将を決めるにあたり魔頭将となつたリリイの推薦で竜魔族の村からスカウトされるという異色の経歴を持つ。彼はリリイの従姉弟にあたりその腕を見込まれての徵兵であつたが、騎頭将の地位についた当初は当然のように不平の声が挙がつたが、今では皆彼の実力を知り誰もが彼を頭将と認めていた。

「はっ、陛下がお呼びです。すぐに参上するよつことのことです」

「場所は軍議の間か？」

「はい、その通りです」

部下にこの場の片付けを任せ、ヴェルベリオンは軍議の間へと向かう。

途中呼び出される理由を考えてみるが、王に呼び出されるような失態を犯した覚えはないのでおそらくはその類の話では無いはずだ。例え知らず知らずの内にそう言つたことをしてしまつてしまつたり、パツと出の自分のことであらぬことを告げ口されていたとしても隼人は公正な方だ。弁明することも可能である。

それよりも未だ席の空いている飛空将や重兵将などの地位に就く者が決まつたのかもしれない、と足を急がせる。

三頭九将の九将の内一将はヴェルベリオンの配下であり、騎乗将の地位には元狼将ハルトシャンの配下にいた人熊族の男ハイブケアが就いている。そしてもう一方の飛空将は未だ空席のままであつた。これは飛空将を含めその配下には飛行能力または竜種をティムできる者で構成されており、その中から選出するのに手間取つてゐるのだ。

ヴェルベリオン自身もランクしながら『ティム』のスキルは持つており、竜種と馬種を手懐けることができる。騎頭将に彼が選ばれたのも実力はもちろんのこと、その点も考慮されてのことである。

他に三頭の中でも最も大きな規模を誇るのが剣頭将グリミナであり、彼女の下には実に五人の将が就けられている。その中でも最も兵数が多いのが歩兵将ライオックスの部隊である。それに次いで弓兵将の舞台であるが、この地位には元マグガディア軍將軍風のサリュアナが監視付きで就いている。これは元マグガディア軍兵士に対する人質的な配属であり、スカイル王国軍に組み込まれたり、故郷に戻されたマグガディア軍兵士が反乱等を起こした場合彼女が全ての責をとることになっているのだ。

そして彼女の補佐兼監視役の任に就いているのはリシア、アレフという双子のデックアルヴである。

そして水兵将の地位には先の戦いで水中からの奇襲部隊を指揮したシーラカーラ魚人族の男ジャウラが就いている。

残る一将である重兵将、工兵将はまだ空席なのだが、先の飛空将と含め今回の呼び出しへそれが決まった可能性もある。

そして最後に魔頭将リリィアネイラの配下に妖将と賢将が配され、それらは前魔王のころから変わらずシャナンクルとダロスがその任に就いている。

これがスカイル王国軍の現在の枠組みである。

現在空席となつていて三将の席を埋めることは軍部に置いて急務となつていて。それを考えればこれが呼び出しの理由であるだろう。そういう考えている内に軍議の間へと辿り着き、ヴェルベリオンは少し強めに扉をノックする。

中から入室するよう返事があり、ヴェルベリオンはそれに従い入室した。

「騎頭将、ヴェルベリオン。お呼びと聞いて参上いたしました」

頭を軽く下げる一礼し、面を上げるとそこには他の一頭将に妖賢の一将。そして見知らぬ竜魔族の姿があつた。

胸の膨らみから女性らしいその竜魔族の、頭部を囲うよう前方へと向けられたら巻角は竜魔族共通の物。そしてその彼女と彼の最大の相違点がその背に生える翼だろう。

竜を思わせる翼膜が張られた翼は純血の証であり、対するヴェルベリオンの背にあるのは水でできた布を纏めたかのような昆虫の薄羽を思わせる物。これは彼がこの世界でも珍しい水の下位精靈であるウンディーネの特異個体を母に持つ竜魔族だからである。

「仕事中にすまなかつたな。空席だつた飛空将の選別が終わつたんでな」

ヴェルベリオンの予想していた通り話であつた。

隼人の目配せを受けて竜魔族の女性が前にでる。

身長は竜魔族の女性としては少々小柄な体躯であり、やや童顔な気がするものの纏つた気配に隙はなく見た目に油断できる相手では無いことが容易に想像できた。

「この度、飛空将の任に就いたクリヨーシカです。今後よろしくお願いします」

「騎頭将、ヴェルベリオンだ。活躍を期待をせてもう一つ

差し出された右手を力強く握り返した。

「これで残るは重兵将と工兵将の一席か……」

「どちらも今までの我々では聞かぬ兵種だからな」

隼人の言葉にリリイが答える。

戦争といえば人間に勝る肉体的ポテンシャルに任せた力押しが基本である魔族達にとって、確かに鎧で身を固めた重歩兵や陣地の作成から罠の設置などを主任務とする工兵という兵種は確かに未知の分野なのだろう。

「うむ。工兵将についてはドワーフ達に打診して、後は選考を行って段階まで来るのでじやがのう。

重歩兵に関してはノウハウがない。いっそ元マグガディア軍の者から選ぶ事も視野に入れるべきじやう」

顎鬚をいじりながら述べるダロスに隼人は静かに頷く。

「それか、ドワーフの者を使うのもよいのでは？」

彼らの戦い方は全身を鎧で固め、それで敵の攻撃を弾き反撃を行うところのもの。陛下から聞く重歩兵の戦い方とそう違はないかと」

妖艶に微笑みながら提案するシャナンクルに対し、隼人は溜め息を吐きながら頷いた。

「最悪そうするしかないかもしけないか…………。

確かに聞くだけではドワーフの戦い方は重歩兵のそれに通じる物がある。だけどドワーフ達のそれは敵の攻撃を弾きつつも前進し続けるという蹂躪戦法がメインなんだろう？

そういう攻め方が有効なのも確かだけど、俺が求めてるのは重歩兵による陣地の守備力だ。同じ重歩兵でも攻めと守りではまるで違うと俺は考えている」

ドワーフのそれは現代で言うところの戦車の戦い方であろう。敵の

攻撃を弾く装甲を盾に敵陣へと進行し、圧倒的な火力で敵歩兵を蹂躪してゆく。

しかし隼人が求めるのはそうではなく、後衛を守るための盾としての重歩兵なのだ。

「それは失礼を……

「いや、どちらにしてもドワーフ達の協力は必要だろ。そういう戦い方もあるんだし両方の戦法をとれるようにしておけば戦い方に幅が広がる。少なくとも重兵将の補佐にはドワーフをつけるよつてしよう」

その言葉にグリミナが頷き、この話はここで終了した。

ヴェルベリオンとクリヨーシカは諸々の手続き（文官の育成もかねて隼人が提案した）のために部屋を辞し、室内にはブルフグスを除く先日の会議のメンバーが残されたこととなつた。

「そりいえば、例の計画の進み具合はどうなのだ？」

リリイがふと思いついたようにダロスに問いかける。

「ハヤト様立案の『エリ 88計画』のことですかな」

『エリ 88計画』。半壊した魔王ネスフィアムの居城をどうするかという話の際に隼人が立案した計画である。

計画名からその内容を推し量ることは不可能だが、内容はまさに言うは易し行うは難しを地で行く代物である。その内容は、ホトロゼナン山脈をくり抜きそのまま城へと改造する計画である。

元々ホトロゼナン山脈の地下には魚人族シーラカラや水魔族フィシャーの住まう地底湖や、

士の上位精靈であるドワーフ達の地下集落があり、特にドワーフ達の地下集落は必要に応じて拡大を行つてゐるためその技術を応用しよつといつ計画であり、一見無謀そうではあるものの時間をかけば十分に実現可能な計画なのである。

これが可決した理由の一つにこのホトロゼナン山脈が多種多様な金属がとれる鉱山であることが上げられる。城を造るに当たつて掘り出される土や石の中には当然鉱石も含まれることになる。その鉱石の中には鉄鉱石の他にも金などのレアメタルがあり、国庫を増やすことにも繋がることになる。他にもホトロゼナン山脈を城に改造し、出入り口を各所に設置する事で城を包囲することが事実上不可能にする事ができるのだ。

そういうつた諸々の事情で可決したこの計画。なぜ名前が『エリ 88計画』なのかといふと、隼人にとってある種の憧れがそこにあつたからといつリリイ達他の皆には首を傾げる理由だつたりする。

「あの計画なら順調じやよ。このままなら後一円もすれば大半の機能は城に移せるはずじや。そうなればこの皆もようやく本来の役目に戻ることになるの」

「そうですか。陛下があんな事を言い出したときはどうなるかと思つたが……」

「そういえ、近頃ドワーフ達の集落では鎌を振るつ音が絶えないそうですね。採掘された鉱石のおかげで質のいい武具や耕具などが連日作られているとか」

「ああ、私のところの兵達も武具が以前よりも充実してゐる。まさかホトロゼナン山脈がこれほど鉱石が豊富だとは思いもしなかつた」

採れた金の一部はダロスの部下の魔法使い達が、魔法儀式を用いて魔金と呼ばれる特殊な金へと精製を行っている。魔金の精製には一定量の金が必要なため、今回のように大量にそれたりしなければ精製する事はできなかつただろう。

その報告を受けていた隼人は計画が軌道に乗つてることと含めて心の底から安堵の溜め息を吐いていた。

とはいへこの計画には、山をくり抜くという性質上落盤等の危険は常につきまとうことになる。ドワーフ達の技術があれば安心だとは思うものの、その点だけは本当に注意してくれとダロスに告げてその場は解散となつた。

深夜のホトロゼナン皆。

隼人の寝室に一人の客が訪れていた。

魔頭将リリィアネイラとその配下賢将ダロスの一人だ。

「一月か、思つてたよりも早かつたな」

「わしも以前興味を持つて調べたことがあつたからのう。当時の資料をひっくり返したら案外簡単に出てきたんじやよ」

そう言つてテーブルに乗せられた資料の中から幾つかを取り出すと、それを順番に並べてゆく。

「…………共に来るよう言われて来たのだが、一体なんの話なのだ？」
隼人とダロスの主語の抜けた会話に、ハヤトの隣に腰を降ろすリリイが首を傾げる。

「ヒトランジ来訪者についての話じやよ」

懐から取り出した眼鏡をかけたダロスは、並べた資料の中から一枚を拾い上げて目を通す。

「この世界で確認された最古のヒトランジ来訪者。これが如何にして召喚されたのか。それを調べてくれと頼まれての」

「調べるもなにも異界者サモン・ヒトランジ召喚儀式魔法で呼ばれたのだらう？」
一体それがなんだというのだ？」

ますますわからないといつ様子の彼女に苦笑しつつ、ダロスは首を振つて資料を差し出してくる。リリイはそれを受け取りながら次の言葉を待つようにダロスに視線を送る。

「といひがの、異界者召喚儀式魔法サモン・ヒトランジが開発されたのは1500年程昔とされておるが、最古の来訪者の記録は更に250年も遡るんじゃない」

「なに？」

「やつぱりあつたんだな。『異世界』を知るに至るきっかけが」

隼人がダロスに来訪者エトランジエについて調べてもらつ至つた理由は、サモン・エトランジエを開発した存在はどうしてこの魔法を開発したのだろうか、と疑問を抱いたからだ。この世界は魔法など隼人の元の世界には無いものがあるとはいえ、全体の文化レベルは現代の地球と比べて非常に低い。

たとえばこの世界には、貴族ならばともかく下級市民や農民の子供達が通うよつな学校は存在せず、子供達は毎日を親の手伝いをして過ごす。

そのような文化の中で“物語”という娯楽はどれだけの文化を遂げられるだろうか？

現代においてならば漫画やアニメなどで普通に取り上げられる異世界という題材。しかし時を少し遡つた時代にそのよつな題材を扱つた作品は存在するだろうか？

例えば日本ならば歌舞伎などの劇に使われる物語。西洋ならばショイクスピアなど。そこに異世界、自分たちの世界と完全に切り離された世界觀を持つ物語は存在しているだろうか？

実際には存在しているのかもしれないが、それは全体と比べてもほんの一握り、いやむしろほんの一摘みかもしれない。

現代だからこそ考え、想像する余裕がある異世界という存在。日々、暮らしの糧を求めるこの世界でそのよつな発想を自ら導き出せるのだろうか？

隼人はその可能性よりもなにかしらの偶然で異世界の存在を示すものがこの世界に存在したのではないかと考えた。そう、魔法と違う

方法で召喚された来訪者エトランジエなどが……。

それゆえにダロスに確認される最古の来訪者について調べても、さつていたのだが、どうやら彼の予想は当たつていたらしい。

ダロスの説明は続く。

記録された最古の来訪者エトランジエの確認から異界者召喚儀式魔法の開発までの約250年の間、更に十五人もの来訪者エトランジエが存在していたという。彼らが召喚された原因はまだ調べ終えていないものの、これは隼人を召喚した異界者召喚儀式魔法の他にも来訪者の召喚方法が存在しているということもある。それがさらに古い儀式なのか、はたまた自然現象という可能性も存在するが。もしもこれが自然現象だったとした場合、表に出ていないだけで今も複数の来訪者が存在する可能性もあるのだ。

「まさか…………。

だがありえるのか、来訪者エトランジエが誰の意志とも関係なく召還されるなど。台風や地震では無いのだぞ？」

「リリィアネイラ様のおっしゃることも、もつともですが、結論としてはありますのじゃ。

古くから存在する魔力溜まりでは、満の赤月の魔力が作用し遠方へと不安定なゲートが形成されるのはご存知でしょう。

そのことを踏まえて考えれば、この世界にある五つの大陸に一つずつ存在すると言われる魔窟のような高濃度の魔力溜まりが、なかにかしらの要因と絡まり異世界へのゲートとなつうる可能性もあるじゃね?

ダロスの説明にリリイは押し黙り、しばし思考を纏めるのに時間を費やした後、ダロスとともに隼人へと視線を向ける。

「それで、このことを知つてそなたはどうするのだ？
私をこの場に呼んだということは知的好奇心だけでじいに調べさせたのではないのであるう？」

「当たり前だ。

ダロス、調べてくれてありがとう。

今後も最古の来訪者が召喚された原因を調べてほしい。特に異界者・召喚儀式魔法以外にも召還魔法があるかどうかは徹底的にだ。それと来訪者を元の世界に戻すための魔法の開発もお願いしたい。これらに関することは賢将以下魔導師隊の最重要任務として極秘裏に進めてほしい」

「御意に」

「やはり元の世界へ帰りたいか……」

ハヤトの命令を聞いていたリリイはどこか寂しげに、しかし割り切つたように小さく呟くが、それを聞いた隼人は静かに首を振つて否定した。

「そうじゃない。ダロスに帰還方法を調べてもらうのは俺が元の世界に戻る為じやない。

もしも他に、トモエのようにこの世界に召喚された来訪者がいるなら、彼らを元の世界に帰してやりたいと思つたんだよ。
俺が地球に戻るのは、もう諦めたからな。

第一の王になつておいて、そう簡単にそれを捨てるなんて無責

任な真似できるわけがないだろ？」「

どことなく自虐的笑みを浮かべると、隼人は立ち上がり部屋の隅に置かれた机の中から写真を取り出し静かに眺める。

「リリイ、俺に言ったよな。償つてくれって。

俺にはまだじゅうつて償つていけばいいのかわかつちゃいない。けど、俺にできることをしていくつもりだ。今回のこれもその一步のつもりでいる。一度と俺みたいな存在を出さないよう、^{エトランジエ}来訪者を生み出す原因を探しそれを潰す。そしてすでに他にも^{エトランジエ}来訪者がいるのなら、彼等を元の世界へと返してやる。それが俺にできることの一つだと思ってる。

国なんて大きな力を得た俺にできるな」

スカイル王国軍（後書き）

・トモエ

三才未満（外見年齢十才弱）

隼人が召喚された儀式魔法の余波で召還されたと思わしき子ぎつね。得た異能力によって獣人の姿に化けることができる。しかしこの世界には狐が存在しないため、周りには何の獣人か理解されず、物珍しげに見られることが多々ある。

奴隸として捕まっていたところを隼人に助けられ、同郷でもある彼に懐く。

物理属性資質：アンフリュクルー（やや柔らかく平均）

魔力量：C

魔法属性資質：特異特化型

・異能力『妖化』

動植物を妖怪化させる異能力。

妖化した者は魔力ではなく妖力を扱うため魔力量は低くなる。

妖怪化した動植物は一に近い姿をとれるようになるが、トモエの場合、妖化することで得られる“変化”的力と相性がよく、より人間の姿に近づいている。また『妖化』を得た者は老いが非常に遅くなる。狐であるトモエが二才を過ぎても精神が幼いのはこれが原因。

・固有スキル『狐火』

狐であるトモエが『妖化』を得たことで習得した固有スキル。青白い炎を生み出し操ることができる。トモエの成長に伴い威力を増す。

・固有スキル『変化』

人や動物、無機物に化ける能力。古来より人を騙すとされる狐であ

るトモエとは相性がいい。

ダロスの深夜の報告から一ヶ月。

元マグガディア王国水の将リゼルダの副将であつたギリング、ホトロゼナン城の建設（採掘）指揮をとつていたドワーフのテランをそれぞれ重兵将、工兵将に据えてようやく軍の体裁が整つた。文官達の方もそこそこ有能な人材を登用し、戦後及び建国後の多忙期が過ぎてようやく落ち着いてきた。

「ハヤト、そなた何をしておるのだ？」

ホトロゼナン砦からようやく最低限の機能を持つに至つたホトロゼナン城のハヤトの部屋。光石という光を放つ魔石を明かりに、テープルの上でなにやら造つてている部屋の主を見つけたりリィは首を傾げる。

「ん、ちょっとな

断りもなく室内に入つてくる彼女に特に何も言つことなく、隼人は手元のそれに意識を集中させている。

隼人の座る向かい側の席に腰を下ろし、彼が手元を覗いてみると、そこには少々いびつな形をした同じくらいの長さをした数本の小さな棒があつた。

大きさは一十センチから一十五センチ程だらつか？
不揃いなそれらを幾つか手に取つてみると、太さもまちまちで一体何に使う物なのか全くわからない。

「武器、というわけでもなさそつだな。片側は細くなっているが先が尖っているわけでもない。ん？」

一本一本手に取りながら眺めるが、やはり用途のわからない棒に再度首を傾げる。

作っている本人に尋ねようにも集中していて今声をかけるのは戸惑われる。仕方なく今作っている分が終わるのを待つことにして手にしていた棒を元の場所に戻した。

「これ、で……」

今度もやはりテーブルの上に転がっている物と同じくらいの長さをした、しかし一本分横に繋げたような棒の先にナイフを当て、隼人は棒を二つに割始める。慎重にナイフを進め左右対称になるように割られていく棒だが、途中で力みすぎたのかナイフが逸れて左右非対称になる。

「ち、またか。昔から図画の成績は良くなかつたしなあ

テーブルの上をもう一度見てみると同じような状態の棒が幾本も見られ、これらはきっと失敗作なのだろう思いつつ、今彼が造つたばかりのそれを拾い上げる。

「それで、何を造つておるのだ？」

「ん、ああ。ちょっと箸をな

「ハシ？」

聞き慣れぬ名前に復唱するリリイに、隼人は苦笑しながら説明を始める。

「箸つてのは俺の故郷で使われている伝統的な食器だよ。こうやって一本の棒を使って……」

失敗作の中からなるべく出来のいい物を一本取り上げ、実演を始める。

「まあ、慣れないと使い辛い代物ではあるけど、こうやって物をつまんだり、フォークのようにも刺してもいいし、そこそこ柔らかいものなら挟み込むことで切ることもできる」

他の失敗作をつまみあげ、右から左へと移動させる。それを見ていたリリイは感心したように頷いていた。

「ふむ、これは便利そうだな。
しかしなぜ今頃このような物を？」

「じつに召喚されてからは他に気を回す余裕もなかつたし、建国直後はいろいろとどたばたしてたしな。

最近が初めてなんだよ、周りやなんかを気にする余裕ができるのは。元の世界にもナイフやフォークはあつたし、食事の時もそう不便ではなかつたんだけど、やっぱり箸があつたら便利だなと思ってな。
思ひたつたら吉田つてことで作り始めてみたんだけだ。
けどこれが単純なようでなかなか難しくてな」

失敗作の山に肩を竦め、それらを纏めて暖炉のそばにある木屑入れへと捨てる。

「ふむ、ならばドワーフ達に頼んでみたりビツだ？」

「いや、最近落ち着いてきたって言つたって、まだまだ仕事は沢山あるんだ。そこにこんなどうでもいいような事を頼むのは…………」

リリイの提案に困ったように頭を搔く隼人だが、彼女は小さく笑うと首を軽く振った。

「ふ、そなたはこの国の王なのだ。そんな細かいことを気にする必要はあるまい。だいいち彼らならば喜んで作ってくれると思ひます。こういう新しいことは大好きな連中だからな」

そうと決まればいぐぞと席を立つたリリイは、どうも王としての地位について理解していない隼人に苦笑しつつその手を取つて歩き始める。

向かう先は勿論、最近になつて城との通路が完成したドワーフの集落だ。

「へえ、ハシねえ。おもしろそつじゃないですか

場所はドワーフの集落にあるとある家。隼人とリリイの説明を聞いたドワーフは楽しそうに脇から引っ張り出した羊皮紙に図面を引き始める。

ドワーフ・フィオルラと言う見た目幼い少女のような彼女は歴とした成人したドワーフの女性である。というよりも土の上位精霊であ

るドワーフは下位精靈であるノームからドワーフへと昇華した時点で完結されており、技術の向上などの内面的な物など幾つかの例外を覗けば古い等の外見的な変化は見られない。これはドワーフだけでなくイフリート／イフリー／ティア、マーメイド、フェアリー、マスクウェル、レプラ／ーン達全ての上位精靈に言えることである。

そしてそんなドワーフ族の彼女は最近上兵将の地位についたテランの妻であり、この集落の長兼工房長なのである。

「しかしいいのか？

こつちはまだまだ忙しいと思つていたんだが、こんな些事を頼んでしまつて」

「何を仰つてるんですか陛下。陛下はただ黙つてやれつて言つてくれればいいんですよ」

「こやかにそう告げるフィオララに、しかし隼人は“黙つて”と言いつつ“言え”とはこれいかに。などとアホなことを考えつりそつなのか、と氣の抜けた返事を返す。

「それじゃこれをもとに幾つか試作して明日には城の方に持つて行きます。それでいいですか？」

「ん、それじゃあ頼む」

「はい、任せてくれ」

元気よく、それこそ新しい玩具を手にした少女のような笑顔で返事をするフィオララだが、これでも彼女は妖将シャナンクルよりも年上であるマル

「しかし、いつもすんなり引き受けてくれるとは……」

「やりすぎるのは良くないが、そなたの場合はむしと人を使うことを見えた方がいいな。

そなたは仕事にしても、自分にできないことに關しては簡単に人に任せることができると、自分にできることであれば全て自分でやろうとする癖がある。

もう少し自身でやるべきことが少なくなるよう努めるべきではないか?」

ドワーフの集落からの帰り道。長々と続く螺旋階段を登る隼人に、そのまま後を登るリリイが苦笑混じりにそう告げる。対する隼人はわかつてはいる、と頭を搔きながらひくひく苦笑して返す。

「ただ俺だけ仕事を少なくするつてのはどうも気分的にな。一人だけ楽をしているようで罪悪感が……」

「そんなもの感じずによい。何度も言つがそなたは王なのだ。父は文武両方に長け、デスクワークなども一人でやってしまうようなところもあつたが、それでも常にある雑事のような物に關しては下の者に丸投げしていたのだぞ? だというのにそなたは下の者に任せておけばいい物まで自分でやるつとする

そうやつて始まるリリイの説教タイム。ちゃんと仕事をして説教されるところのはどうこうことなのだろうかと思いながら、隼人は階

段を登り続けるのだった。

ドワーフの集落から戻ってきた一人はそのままホトロゼナン砦へと足をのばした。石造りの階段を登り地下室から砦へと入ると、そのまま中庭へと向かう。

中庭では騎頭将ヴェルベリオンと人熊族の男、騎乗将ゴルスゴダがそれぞれ兵を率いて演習を行つてゐるところだつた。

演習と言つても場所が中庭のため、それぞれ少數の兵を率いての小規模なもの。ヴェルベリオンの指揮で騎兵が鎌型の陣形を取つて突貫すれば、ゴルスゴダはその大柄な体躯に似合わぬ纖細な動きで己の配下にそれを受け止め包囲させる。

ヴェルベリオンの方も大人しく捕まるつもりがあるわけもなく、山竜^{ロドン}を跳躍させ、次々と相手の頭上を飛び越え包囲を突破する。

互いに背を向けたまま中庭の反対側へと駆け抜けると、今度は互いに隊を方向転換させ正面から激突…………ではなく互いの脇を駆け抜け模擬刀で斬り合いながら反対側へと辿り着く。

ゴルスゴダの命令が上がる。ゴルスゴダの命令に従い配下の瞬く間に兵が三列に並び、山竜^{イクルロドン}がその間を駆けられるかといつ隙間を開けた彼らは、そのままヴェルベリオンへと突撃する。

「動きに乱れがないな」

その一連の動きを見ながら隼人が呟き、リリイもそれに同意して頷く。しばらく演習の様子を眺めていた一人だが、このままここにいても邪魔になるとその場を離れる。

そして次に訪れたのは竜舎だった。竜舎では演習に参加していない兵士達が掃除や寝床となつてある藁の交換を行つてゐるところだつた。

二人が来たことに気付いた兵士達が慌てて敬礼しようとするのを気にしなくていい、と仕事の続きを促し、竜舎の外に放された山龍イクルロドンを眺める。

ここにいる兵士達は全て竜種と相性のいい『ティーム』のスキルを持つた者達のため、勝手に離れるなど命令しておけば、わざわざどこかに繋いでおく必要もない。

山龍イクルロドン達の方も近づいて来る一人に氣づき、甘えるように近寄つてくれる。これはリリイイクルロドンが竜種と相性のいい『ティーム』を持つてゐるからであるが、実は隼人もランクBの『ティーム』を所持してゐたのだ。先日ダロスに調べてもらつた際に分かつことなのだが、隼人と相性のいい種はリリイと同じ『竜種』に『猫種』『狼種』の三種類。狼種は犬などもそこに分類されるため、トモエが彼に懐いたのも同じ來訪者エトランジェであることの他にもこれが関係していたのかもしれない。目を細めて喜ぶ彼らの喉を搔いてやつてみると、山龍達が左右に分かれて道を作り、その奥から山龍達よりも一回り大きな竜が威風堂々と近寄つてくる。

その竜の頭部には首を守るように大きく広がる鎧のよくなヒレを持ち、さらにそのヒレからは前方に向けて太く波打つ巨大な角。体を支える後ろ足は周りの山龍よりも太く、その巨体を揺らすことなくしつかりと支え、それでいて鈍重そうなイメージを与えずすらりとした印象すら覚える。

鎧角竜イクルブロス。種類の多い山龍の亞種の一種であり、山龍種の中でも最も強力な種とされる種もあり、人によつては鎧角竜と火山竜、氷雪竜の三種を山龍三大王種と呼ぶほどである。

そしてこの三種の山龍は個体数が少ないとでも知られており、これらの竜種を手にすることは山竜に騎乗する者達にとって一つのス

テーラスとなつてゐる。

そんな三種の一種である鎧角竜^{イカルブロス}は出来た道を歩んで隼人の下へと来ると、目を細めて角を擦り付けてくる。鎧角竜^{イカルブロス}にとつての親愛を現す行動である。

実はこの竜、騎頭将ヴェルベリオンを召し抱えた際、隼人の即位を祝い彼のいた部落から献上された物であり、つまり隼人の持ち竜なのだ。

「元気そだな黒風。

騎乗隊の皆さんよく世話をしてくれてるな」

黒風^{イカルブロス}といふのは鎧角竜^{イカルブロス}の全身を覆う黒い鱗と、風のように若山を駆けめぐる姿から隼人のつけた名前だ。名前を呼ばれて嬉しいのか、さらに強く角を押し付けてくる竜に応え、隼人もその角をひつかくように撫でてやる。鎧角竜^{イカルブロス}の角は敵と戦うための武器であるが、こちやんとして角を擦られる感覚がお気に入りらしい。

ちなみにこの鎧角竜、名前をつけた後に雌だという事を知り、雌にこの名前を付けたと言うことに軽く後悔してしまったのは隼人だけの秘密である。しかしこの鎧角竜^{イカルブロス}という種は雄よりも雌の方が強く、騎乗竜としても贈り物としても雌の方が適しているのだといふ。

「ふ、黒風は主にべつたりだな」

その様子を見ていたリリイは微笑ましい物を見るように笑みを浮かべているが、隼人を黒風に独占された山竜達^{イカルロドン}が皆彼女の方へと群がつてきていて身動きが取れず、その笑みも少々ひきつっている。

存分に撫でられた山竜達^{イカルロドン}が解散した跡には疲れたように肩を落とした彼女の姿。いつもは美しさと力強さを秘めた彼女の黒翼もこの時

ばかりは萎れて見えたとか。

二人が竜舎を後にしようとしたその時、丁度竜達の餌の時間となつたらしく、餌である餌を積んだ荷車を引いた兵士がやってきた。山竜種の竜は総じて雑食であり、主な主食は地に落ちた枯れ葉や木の根である。虫や動物の肉を食べることもあるが、虫を食べるのは冬場に落ち葉が少なくなった時期に貴重な栄養源としてであり、他の動物を自分から襲うことではなく、野垂れ死にした動物がいたらそれを食べる程度である。

そのため荷車に乗っているのも畠から駆除した雑草や、穂を採った稻の茎を干した物である。

そしてそんな荷台を覗き込んだ隼人がそれを見つけたのは本当に偶然のことだった。

「へ、これって……」

それは土に汚れたいびつな形の実であった。実から生えた根の先根の先といびつな実が連なるそれは、地球で見たあるものを思い出させる。

「ハヤト、どうしたのだ？」

「いや、ちょっとな。

なあ、これについて聞きたいんだけど」

餌入れに餌を運ぼうとしていた兵士は、作業の邪魔をされたことに迷惑そうに振り返り、その相手が隼人だと分かるや慌てて姿勢を正して敬礼をする。

兵士の様子に苦笑しつつ、自分が見つけた身について聞いてみると、それは農家で雑草の一つとして駆除している物だとか。山の高い部

位で群生しているらしいそれは、いつからか白龍連峰にある村々の畑に入り込むようになり、勝手に実を作るらしく土の養分を持つていかれることから忌み嫌われているといつ。

隼人は少し考えた後に手にした実を洗つてくるようその兵に頼み、訝しげにそれを見ていたリリイに火の用意を頼む。

「いったい何をするつもりだ？」

リリイが用意した火、焚き火の中に実を放り込む隼人に首を傾げるが、当の本人は気になった風もなく焚き火の調子を見続ける。それからしばらくして辺りにいい匂いが立ちこめてきたことに気づき、彼女は空を見上げた。日はまだ中天には達しておらず、昼食の準備を始める頃合いではあるものの、料理が出来上がつてくる時間にはまだ早い。

「そろそろいいか」

隼人がたき火の中から実を取り出すと、辺りでしていた匂いが強くなり、その発生源に気付く。

「似てると思ったけど、やつぱり芋の一種みたいだの」

地球のジャガイモに似たその実を割れば強くなつた匂いが一段と濃くなる。それを見ながら隼人はこの世界、少なくともこの大陸には芋だけではなく、人参や大根のような根菜を食べる習慣が無いことを思い出していた。

匂いにつられて集まつてくる兵士をよそに、味はどうかと口に入れようとする隼人を兵士達が慌てて止める。

「へ、陛下何をしてるんですか！」

「そんなものを食べては……」

「いや、そんな物つて。俺の故郷では割と普通の食べ物なんだけど
……」

芋らしきそれを取り上げられて不満にする隼人だが、これは兵士達に分があるだろう。なぜなら今まで誰も食べようとしてこなかつたもの、毒でもあつた日には田も当たられない。

結局毒味として兵士が一つ食べ、何ともなければ隼人も食べてい事になつたが、当の隼人は不満そうであつた。仕方のないことではあるが。

「で、では……！」

緊張した様子の人猿族の兵士ヒゲテイが、仲間に見守られる中芋モドキにかぶりつく。ギュッと目を閉じて芋モドキをかじった兵士はその熱さに口から出しそうになつたものの、それを我慢して口の中の物を飲み込んだ。

「熱つつう、あち、あちちちつー！」

芋モドキに息を吹きかけ冷ましながら一ロ二ロ三ロと、やして完食した兵士は一言いづつ言った。

「つまかった……」

と。

その後賢将配下の魔導師班と医師が呼び出されて芋モドキを食べた兵士を診察。

身体に異常なしとのお墨付きを貰つたといひでようやく隼人にも食べる許可がでた。

昼食の時間はとっくの昔に過ぎ、焼いた残りの芋モドキも当然冷め切つた後だった。

その後白龍連峰に群生しているらしい芋（隼人が正式に命名）の搜索が行われた。

元マグガディア王国では白龍連邦への遠征のために二年前から増税を行い、各地の食料はこの冬をぎりぎり越えられるかどうかといった量しか蓄えられていなかつたが、この搜索で得られたら野芋やらに見つかった大量の人参、大根、蕪といった新しい（この大陸にとって）食料のお陰で餓死者が出ることは防がれることとなつた。

深夜のホトロゼナン城。シャナンクルに『えられたる部屋に紅茶と焼き芋の匂いが漂う。

一口大に切りそろえられ、乗せられたバターが食欲をそそる匂いを

させているが、それに対するシャナックルはお茶請けとしては失敗だつたかもしないと思いつつ、来客者であるリリイに向き直った。心得たもので紅茶の用意をしたティックアルヴのメイドが一礼をして退出してゆく。それを見送った一人は、用意された紅茶を一口喉に通す。そして最初に口を開いたのは部屋の主であるシャナックルであつた。

「それで、本田はどうなご相談でしょうか。姫様？」

「シャナックル、毎回言つているが私は……」

「私にとって貴女様が姫様であることには代わりありません。なにが起こりどのような立場になろうとも。

それで、本日はいかがなさつたのですか？姫様がこのような時間にお一人でいらっしゃる時は、いつも何かしら相談事がありでしたわね」

リリイの言葉を遮り昔を思い出すように口元を隠しながら静かに笑う彼女に、リリイは一つため息をついて芋バターを口に入れる。隼人が教えた食べ方だがこれは確かに美味しい。

「つむ、実はハヤトのことなのじゃが……」

「陛下が何か？」

口では陛下と呼びつつも、その実ハヤトのことを敬つていよいのは言葉の端に見え隠れする鋭さで明らかだつた。

これは彼女だけでなく、剣頭将の地位についたグリミナや、騎乗将であるゴルスゴダも同様であり、スカイル王国の魔族の約半数はまだ彼のことを王と認めてはいないだろう。それは前魔王が死して一

年も経つていいのだから当然といえば当然のことだらう。こればかりは時間をかけて認められていくしかないことなのだ。

「つむ、まだ私に手を出してこないのだ」

隼人の名が出たときに予想したことの正反対の言葉に、シャナンクルは紅茶のカップを落としそうになつた。

血族の長を一対一で倒したとき、その血族の命運は勝者の手に委ねられるのが魔族達の定の一つのようなものである。それを利用して隼人がリリイに手を出したのかと怒りを覚え、制裁方法を考えようとしていたシャナンクルは目をぱちくりとさせながらリリイを見る。

「ドレスなどもなるべく露出の多い物にし、風呂上がりなどにもそれとなく誘つているのだがな……。

私の容姿が好みと違うのかとも思つたが、かといって他の女に目を向けるわけでもなく、もしや男色の氣があるのかと思えば、露出度が一番多いドレスを着て報告に行つたときの反応からその線も薄い。シャナンクル、どうしたらいいと思う?」

「そ、そうおつしゃられても……」

まさかの相談事にシャナンクルは動搖する。

昔から何かと相談事にはのつてきたがこのような事は初めてだつた。しかもシャナンクルは独身、どころか男に興味が無く何人ものメイドを囲つている身だ。彼女にとつて男など勝手に寄つてくる存在以外の何者でもなく、この件の相談相手として彼女は完全にミスチョイスだ。

とはいえ先達として頼られるのは嬉しいことであり、しかしその相

手はあの隼人。

幼い頃に母を失つた彼女を姉のように見守つてきた身としてはその成長を喜ぶべきか、それとも相手方隼人であることを嘆くべきか、それ以前にどう答えるべきかと頭を抱えたくなつた。

「やはりも、もう少しきわどいドレスを用意するべきか……、いやいつそ魅惑の呪いの込められた品を用意して……」

「ストップ！ストップですわ姫様！そこで暴走しないでくださいまし！」

思考が危ない方向に走り始めたリリイを制止し、肩で息をしたくなるのを我慢しながら彼女を見る。

「先に、一つ聞いてもよろしいですか？」

「なんだ？」

呼吸を整えるために紅茶を飲むと、再び正面から彼女を見つめて問い合わせる。

「なぜ、陛下ですの？」

隼人は前王たる彼女の父親を殺した相手だ。なぜ彼女は憎むどころかあのように親身になり、あまつせえこのよつなことを想つことになつたのだろうか。

男を好きになつたことの自分には理解できない類の理由だろうかと思いつつそう訪ねる。

「む、なぜと言われてもな……」

質問されたリリイは腕を組み、言葉を探しながら答える。

「シャナンクルの言いたいことは分かる。ハヤトが父を殺したこと
に恨みがないと問われれば無論あるのだから。
しかしハヤトはそれを悔い償おうとしている」

思い出されるのは隼人と出会ったあの夜、彼女の胸の中で泣きじや
くる彼の姿。

魔王ネスフィアムだけでなく、今まで殺してきた魔族達のことを悔
い、自らの罪悪感に焼かれたあの姿は、忘れようにも簡単に忘れら
れるものではない。

「ハヤトはこの世界で一人ぼっちだ。同郷という意味ではトモエが
いるが、あの娘は彼の世界では所詮獣の一匹。隼人と故郷の思い出
をともにできる存在ではない。

それは彼に助けられた晩に知つたことだ。

そのとき私は、ハヤトを助けてやりたい。そう思つたよ。

あの者は落とされた暗闇で助けを求めて悶えているだけの存在な
だと。

最初はそう思つてそばにいただけだったのだがな。気付いたらハヤ
トに惹かれておつた。

それだけだ。始まりはハヤトを助けてやりたいといつ気持ちだった
かもしけんが、今では支えになりたい、自分を見てほしいと思つよ
うに、いつの間にかにそくなつておつた。

質問の答えはこれで十分か？

まつすぐ田を呑わせるリリイアナイラにシャナンクルは頭を下げた。

「不躾な質問をして申し訳ありませんでした。

姫様の御気持ちよくわかりましたわ。

しかし男と付き合つたこともない私ではこの件の相談相手としては不適格。

私よりももっと別の相手に『相談した方がよろしいでしょう』

顔を上げてそう返すシャナンクルに、リリイは少し不満そうに笑みをこぼす。

(色気で男を誘つて扱き下ろすのが趣味だと聞いていたのだがな)

なんてことを内心で思いつつ、紅茶を飲み干し立ち上がるシャナンクルに続いて彼女も席を立つ。

「このひの相談は既婚者のほうが適任でしちゃう。

知り合いにちょうどいい者がいますので『紹介いたしますわ』

「ああ、頼む」

ベルを鳴らしてメイドを呼び、片付けを任せた一人は部屋を後にした。

芋騒動のあつたとある日。隼人の手元にあがってきた報告書の中に、
その芋について書かれた物が存在した。
そしてそれにはこう書かれていたという。

異能力『環境適合』

周囲の環境に併せて種の存続率を上げる異能力。

確かに隼人とトモエ以外にも来訪者がいることの証明だった
.....。

・パルディア

38才

レバドゥオ

人豹族の青年。ライオックスと共にマグガディア王国で奴隸闘士をしているところを隼人に助けられる。カトラスの二刀流使いであり、部族にいたときは一番の狩人であった。他の元奴隸闘士と同様に隼人を王と認め忠誠を誓っている。

・固有スキル《隠密》

闇に潜み気配を周囲に同化させるスキル。後天的なスキルであり、得手不手はあれど鍛錬すれば誰でも手にすることのできるスキル。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1095y/>

来訪者《エトランジエ》の進む先

2011年11月20日11時27分発行